
電子の獣と少女達

ゼクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電子の獣と少女達

【Nコード】

N3171Q

【作者名】

ゼクス

【あらすじ】

それはとある平行世界のマッドのミスから始まった物語。

電子の獣達と少女達が織り成す、絆と奇跡の物語。

絆が作り上げていく奇跡が今始まる。

“電子の獣と少女達” 始まります。

プロローグ0 マッド最大のミス（前書き）

『漆黒の竜人と少女』を書いている作者のゼクスです。

ほのぼのとした話を書きたくなったので、新たに小説を始めました。ですが、メインはあくまで『漆黒の竜人と少女』なので、此方の話は息抜きと言う形なので、更新は遅いです。メインの小説が更新された日に更新される可能性が高いです。

基本的に此方では殺伐とした感じは出さない方向で行きます。まあ、多少はあるかも知れませんが、その時は申し訳ありません。因みに此方には恋愛の要素は全く無しです。あくまでデジモンとの友情をメインにして書きます。因みにデジモンの都合上管理局アンチは決定しています。

また、漆黒の竜人と少女の主人公・ブラックは登場しませんが、何名かキャラは出演します。

プロローグ0 マッド最大のミス

それはとある平行世界のマッドのミスによって始まった物語。

六体のデジモンと六人の少女の絆の物語。絆が作り上げる奇跡の物語。

“電子の獣と少女達” 始まります。

何処か遠く、本来ならば絶対に辿り着く事が出来ない研究所内部。その場所の主と思われる白衣を着た腰まで届く青い髪に、赤い瞳を持った女性がカプセルの中にそれぞれ入っている六つの卵らしき物の前で何かの作業を行っていた。

「ルン ルン ルン ……フフフツ、遂に、遂に完成しました！！私が外の世界に出る事が出来る機械！クウ！！彼と会ってから苦節十五年！！これを作り上げる為にどれだけ苦労した事か！ですが、ですが！遂に私は外の世界で楽しい研究の日々が出来る！！この目で見えてこの手で触れられる！！ああ、何と楽しそうな日々なんでしょう！！…さて、ばれない内にさっさと平行世界に移動しましょう…」
さんにばれたら絶対に没収されますからね」

そう女性は呟くと近くの机の上に置いてあった銃のような物を右手に握り、左手に腕時計と思われる機械を巻きつけ、腕時計のスイッチを入れると、意気揚々と自身の体に銃口を向ける。

「……カシャッ！」

「さあ！楽しい平行世界での研究にいざレッツゴーで…」

「何しているの、お姉ちゃん？」

「さんが呼んでいたよ？」

「ウワツッ!！」

突如として背後から響いた声に青い髪の女性は腕に持っていた銃の引き金を思わず引きながら空中に放り投げてしまい、慌てて自身の背後を振り向いてみると、十三歳ぐらいの金髪に紅と緑のオッドアイの瞳を持った少女と、その隣に立つ赤い恐竜のような生物が存在していた。

その二人の姿に女性は全身から冷や汗を流し始める。何せ自身が行っている事がばれば、確実に阻まれてしまう。自身の行いをよく知っている者達ならば、それこそ死に物狂いで阻むだろう。

「な、何でもありませんよ！それよりも如何したんですか？」

「お姉ちゃんが、探していたよ。デジタルワールドに送る予定の六個のデジタマについて話があるからって言ってたよ」

「ああ、それならば其処のカプセルの中に………無いですね」

少女の言葉に女性は納得した声を出しながら、近くのカプセルの中に入れておいた筈の卵・デジタマを指差そうとしたが、指差したカプセルの中にはデジタマは一つも入っていなかった。

「なあ！？何で無いんですか！？確かにこのカプセルの中に入れて置いた筈なのに！？一体何故!？」

デジタマが無い事実には女性には悲鳴のような叫びを上げて、慌ててカプセルの周りを調べるが、デジタマは何処にも無かった。

その女性の姿に少女と赤い恐竜もただ事ではないと思い、すぐさま女性と共にデジタマを探そうとするが、その直前に足元に一丁の銃らしき物が落ちていた事に気がつき、少女は銃を拾い上げる。

「……カシャッ！」

「アレ？ねえ　ちゃん？これって確か？」

「うん？……アッ！ソレは『平行世界にいつてらしやいガン』
！だけどこれって、　　さんが没収したんじゃないか？」

「……ギクッ！」

赤い恐竜の言葉に女性は擬音が立ちそうな動きを行って完全に動きが止まってしまい、その様子に少女と恐竜はジト目でジーと見つめ始めると、ギリギリと音を立てながら女性は少女と恐竜に顔を向ける。

「……ギリギリッ！」

「……ジーンッ！」

「……また、作ったの？」

「ハ、ハ、ハ、だって……私も平行世界に行きたかったんですよ！！皆は行ったのに作成者だけの私が行けない！！こんなの不公平じゃないですか！！だから、私は新しく『平行世界にいつてらし

「うん！行こう！平行世界に！！」

少女と恐竜はそう言いあい、デジタマが飛ばされたであろう平行世界に向かう準備を行い始めるのだった。

プロローグ 1 N & H

満月が浮かぶ夜空の海鳴市。

誰もが静かに寝静まる時間帯。

その時間帯に突如として四つの発光現象がそれぞれ寝静まっている家の中で発生し、四つの卵のような物がそれぞれ一つずつ同時に出現した。

現れた四つの卵の内二つは民家と思われる家の中に、残りの二つは普通の一般的な民家から離れた豪邸と呼ぶに相応しい家の中に、まるで其処こそが自身のあるべき場所だと言うように出現した。後にこの世界に訪れる最強の称号を持つ騎士はこう呟いた。

『運命など気に入らんが、如何やら本当にあるらしいな』

そう騎士は苦々しげに呟く事に何れなるのだが、今は関係なく、引き寄せられるように民家の中に出現した卵達は、それぞれの家の中で眠っていた同い年の少女達の手の中に納まるのだった。

8

早朝。高町家。

母親が喫茶店を経営し、父親がボディーガードの仕事を行い、歳が離れた三人の兄妹の五人が住む家。

その家の末っ子である四歳になったばかりの少女 - 高町なのはは、母親である高町桃子が起こしに来るまで布団の中で卵のような物を抱えながら安らかな寝顔をして眠りについていた。

もしなのが起きる事になれば驚くだろう。寝る前に抱えていなかった筈の普通の卵の五倍以上の大きさをもつ卵が腕の中に存在しているのだから。

その事を知らずになのはが眠っていると、突然になのはが眠っている部屋の扉が開き、なのはの母親である桃子がソツと部屋の中に入ってきた。

「なのは、なのは。起きる時間よ。早く起きなさい」

「う、うん」

「ーゴロゴロツッ！」

「えっ!?!」

桃子の言葉に被っていた毛布を退かしながら起き上がったなのはは、思わず抱えていた卵を床に落としてしまい、床に転がった信じられない大きさを持った卵に、桃子は思わず声を上げて床に落ちている卵を呆然と見つめる。

その様子になのはは気がつかずに自身の前にいる大好きな母親に朝の挨拶を行う。

「うん、おはよう。お母さん……如何したの？」

呆然としたまま固まっている桃子の姿に、なのはは疑問の声を上げながら桃子の見つめている方を見ると、床の上に落ちている巨大な卵を発見するのだった。

そして十数分後。高町家の家のリビングでは高町家の全員が集まり、テーブルの上に乗っている巨大な卵にそれぞれ困惑と疑問に満ちた視線を向けていた。

「……確認するが、誰もこの卵をなのはの部屋の中に置いていな

いな？」

家の家主である高町士郎がそう質問すると、長男である恭也と、長女である美由希は無言で頷き、桃子とその腕の中にいるなのも無言で頷いた。

その様子に士郎も黙って頷き、件の元凶である巨大な卵を見つめ、険しい顔をしながら声を出す。

「誰かが侵入して卵だけを置く筈は無い……一体どうなっているんだ？」

「俺や美由希はともかく、誰が侵入したら父さんが気がつく筈だ」

「そつだよね。本当に何処からこの卵は入って来たんだろう？」

士郎、恭也、美由希はそれぞれ声を上げて卵を見つめるが、答えが出る筈は無い。

まさか、平行世界にマッドが元凶だと分かる者がいる筈は無いだろう。もし分かったらその人物は確実に異常者でしかないのだから、当然ながら普通の人間を越える戦闘力を持っている高町家でも、流石に卵が突然に現れた原因は分からず、疑問に満ちた視線を卵に向けていると、桃子が首を傾げながら声を出す。

「でも、この卵は何の卵なのかしら？」

「ふむ、それも確かに気になるな。昔外国で見た事があるダチヨウの卵よりも大きい……そう言えばダチヨウの卵は結構美味しかった」

『……』

士郎が呟いた不穏な言葉に桃子、恭也、美由希は目を見開き、なのは思わず士郎から護るようにテーブルの上に載っていた卵を腕の中に抱える。

その様子に士郎は苦笑いを浮かべながら、桃子達を安心させるように声を出す。

「冗談だ。冗談だからな。空気が重くなっていたから、ちょっと変えようとしただけだ」

「もう！言っていない冗談と悪い冗談があるわよ、アナタ！」

「そうだよ、父さん」

「すまない……しかし、真面目な話だが、その卵は本当に何の卵なんだろうな？」

そう士郎は声を出しながら、なのはの腕の中に存在している卵を見つめる。

ボディーガードの仕事の関係で外国に行く事も在る士郎でさえも見た事が無い大きさを持つ謎の卵。

更に侵入された形跡も存在せずに、まるでフツと突然になのはの腕の中に出現した卵なのだから、家族を護る士郎としては見過ごす事が出来ない。特に士郎の実家はとあるテロリスト達に爆破された為に、尚更に警戒心を持たなくてはいけない。

そう思いながら士郎はなのはの腕の中にある卵に手を伸ばそうとするが、その直前に突如として卵が動き、罫が入り始める。

ーーーービキビキッ!!!

『ッ!』

罅が入った卵の姿に士郎、桃子、恭也、美由希、そして卵を抱えていたなのは目を見開くが、卵は士郎達の様子になど構わずに罅が広がり、卵の中から赤い体をして頭に三本の角のような物を生やしたスライムのような生物・『プニモン』が生まれる。

『ーパカン!!』

『プニ〜』

プニモン、世代/幼年期?、属性/なし、種族/スライム型、必殺技/酸の泡、アワ

生まれたての赤ちゃんスライム型デジモン。真っ赤なカラダはゼリー状でやわらかい。頭にツノのような触手が3本ついているが、戦闘には役に立たない。生まれたばかりの幼年期デジモンなので戦う事は全く出来ないが、無限の可能性をその身に秘めているぞ。必殺技は、酸性の泡を口から吐き出して相手を威嚇する『酸の泡』と、口から泡を吐き出して敵を驚かせる『アワ』だ。

『ウワァ〜!何これ!!可愛い!!』

自身の腕の中で卵の中から生まれたプニモンの姿に、なのは嬉しそうな声を上げてプニモンの姿を見つめる。

自身が見つめられている事に気がついたプニモンは、ゆっくりとなのはに顔を向けてまるで大切な人に巡り会えたかのように嬉しそうになのはに擦り寄る。

『プニ〜 プニニ〜』

「こんにちはなのはだよ。あなたのお名前は？」

「プニ〜」

「プニちゃんって言うの？」

「プニプニー!!」

なのはの質問にプニモンは何度も頷き、嬉しそうになのはに擦りより続ける。

その様子を見ていた土郎、桃子、恭也、美由希は仲良くなっているのはとプニモンから僅かに離れて顔を見合わせあう。

「何だ？あの生物は？見た事あるか？」

「いや、第一父さんが見た事無い生物を俺達が見た事ある筈無いだろうっ？」

「そうだよ……それよりも如何するアレ？何かなのはと仲良くなっているよ？」

「そうね………決めたわ！家で飼いましょう！」

『ハアツ!?!』

突然の桃子の宣言に土郎達は声を上げるが、桃子は真剣な顔をして説明し始める。

「何であの卵がなのはの腕の中に在ったのかは分からないけど、悪い子ではないわよ。あんな風になのはと仲良くしているんだからね」

「だが、桃子？あの生物は見た事も無い生物なんだぞ？もし危険な生物だったら…」

「大丈夫よアナタ・・・何でか分からないけど、あの子はきっといい子よ・・・もしかしたらなのはと友達になりたかったから現れたのかも知れないわ」

そう桃子が言いながらプニモンと楽しそうに遊んでいるのはを見つめ、土郎達も仲良く遊んでいるのはとプニモンの姿に警戒心が薄れ、土郎は決意した顔をする。

「・・・確かにそうだな・・・よし！今日からあの子も家の家族だ！だが、桃子？もしもの時には」

「分かっているわアナタ・・・多分もしもはないでしょうけどね」

そう桃子はニツコリと微笑みながら声を出し、プニモンとなのはに近寄り朝食を始めると告げるのだった。

これが後になのはと高町家の運命を大きく変える結果になるとも知らずに桃子、土郎、恭也、美由希、そしてなのはとプニモンは楽しげに食事をするのだった。

高町家が新たな家族となったプニモンを受け入れている頃。

とある民家の中で車椅子に乗った四歳ぐらいの少女・八神はやてが自身の太ももの上で眠っているキツネのような顔と尻尾を持ったデジモン・レレモンについて調べる為に家の中に置いてあった図鑑を見ていた。

レレモン、世代／幼年期？、属性／なし、種族／スライム型、必殺技／変身

月夜の晩にしか生まれないとされる神秘的なスライム型デジモン。特に満月の晩に生まれたレレモンは満月の魔力を受け、他のデジモンよりも能力が高く不思議な術が使えるデジモンに成長すると言われている。夜行性で、恥ずかしがりやな性格をしている。必殺技は、体のサイズに近いものなら、何にでも変化して身を守る『変身』だ。しかし、尻尾だけは隠す事が出来ずすぐにみつかってしまう。

「う〜ん？駄目や。この図鑑にも載ってない・・・一体何なんやろ？この生物？」

はやてはそう呟きながら、自身の太ももの上で眠っているレレモンを見つめる。

両親を事故で亡くなってから、一人暮らしを余儀なくされていたはやて。昼と夕方に訪れてくれる家政婦を除いては、後見人である人物は遠く離れた外国で暮らしている為に会う事は愚か、話す事も出来ずに寂しい日々を送り、今日もその日が始まるとはやては思っていた。

だが今朝早くに起きて見ると、自身の腕の中で安らかに眠っているレレモンが存在し、はやては思わず驚いてしまったが、レレモンは、はやてに懐き続け、はやての傍から離れようとしなかった。

最初は昨日までいなかったレレモンに驚いていたはやてだが、徐々にレレモンが危険な生物では無いと分かったのか、今ではレレモンを太ももの上に載せているほどに仲良くなっていた。

そして朝食を済ませてからレレモンの事を知ろうと、家の中に置いてあった動物図鑑を使って調べていたのだが、レレモンの事は何処にも載っていなかった。

「ハア〜、図書館に行けばアンタの事を分かるのかな？」

「スピ〜スピ〜スピ〜」

はやての質問にレレモンは答える事無く眠り続けるが、はやてはその様子に穏やかな笑みを浮かべた。

話す事は出来ないレレモンだったが、それでもはやてはレレモンが傍に居てくれる事が本当に嬉しかった。両親を失ってからずっとはやては一人だった。

何故自分は一人ぼっちなのかと、はやては神を恨んだ事さえもあった。だが、神はまるではやてに救いを与えるようにレレモンを連れて来てくれた。

自分は一人ではない。人間ではないが家族が出来た事にははやては心から神に感謝するが、何故か神に感謝しようとする、狂ったように何かに没頭している白衣を着た女性の姿が脳裏に浮かび、感謝の気持ちは何処かへと徐々に薄れていく。

その事にははやては疑問に思いながらも自身の腰の上に乗っているレレモンを、優しく撫でながら声を出す。

「ずっと一緒に居ってなレレ」

「レレッ！〜！」

はやての呟いた言葉に肯定するように眠っていた筈のレレモンは声を上げ、はやては驚きながらもレレモンを抱き締める。その様子を窓の外にいる一匹の猫が注意深く見つめている事に気がつかず、はやてとレレモンは仲良く話し続ける。

そしてはやてもレレモンも、そして窓の外にいる猫も知らなかった。この時からはやての歩む道が大きく変わり始める事に。九歳の誕生日まで本来ならば一人ぼっちだったはやてに、多くの幸せが訪

れ始める事に、その場にいる誰もが気がつく事はなかった。

某所の何処かの執務室。

その部屋の中に座っている何処かの組織の制服と思われる服を着た壮年の男性は、自身の使い魔から送られて来た情報に頭を悩ませていた。

謎の生物が自分達が監視している少女の下に現れた。その事實は少女を使つてある計画を実行しようとしていた男性達の計画を阻む可能性が在るかも知れない。何としても計画を完遂しなければいけない男性は、少女から生物を引き離すべきだと考えるが、送られて来た報告では何の戦闘力も持たない生物だとされている。

それだけではなく少女がいたくその生物を気に入っていると知らされ、もし少女から奪えば、少女が自殺するかもしれない。ただでさえ、その少女には自分達の勝手な計画の為に犠牲になって貰う為に色々と裏で行っていた。その為に少女にはかなりの寂しい思いをさせている。

此処で漸く出来た家族を奪えば、少女が計画の前に死んでしまう可能性も在る。

「………排除すべきではないな………せめて守護騎士達が現れるまでは一緒にいさせよう………全てはアレの永久封印の為に」

そう男性は方針を決めると、少女を監視している自身の使い魔達に方針を報告する。

しかし、彼は、いや、彼らは知らなかった。少女の下に現れた生物こそ、成長すれば世界の運命さえも変えてしまう可能性を秘めた生物で在る事を。そしてこの時の判断によって彼らの計画はまるで

糸を解くように簡単に崩れて行くのだった。

プロローグ2 S & A

海鳴市に存在する豪邸。

その豪邸の庭は広く、普通の民家が何件も立つほどの大きさを持つていた。

その豪邸の敷地に立つ家も、一目見て豪勢だと分かる大きさを持つた家。月村家と呼ばれている家。

その家の住人はとある特殊な一族 - 『夜の一族』と呼ばれる吸血鬼の家系だった。

それ故に命を狙われる事もある為に月村家のセキュリティは完璧な筈だったのだが、今朝早朝に家に未っ子である月村すずかの腕の中に謎の卵が存在していたのだ。当然ながらその卵は即座に家主であるすずかの姉 - 月村忍が回収し、家の地下に存在している忍の秘密研究室に運び込まれていた。

「それでノエル？この卵について何か分かった？」

「いえ、残念ながら何も分かりませんでした。少なくとも現在確認されている地球上の生物のどの卵とも一致しませんでした。忍お嬢様」

「そう」

白人のメイド服を着た美女 - ノエル・K・エアリヒカイトの言葉に忍は頷きながら、色々な機器に繋がれている巨大な卵の方に顔を向ける。

「私が構築したセキュリティを突破して、眠っていたすずかの腕の中に置くなんて……一体何処の組織が行ったのかしら？……」

それともまさか、天下の大泥棒でも現れたのかしらね」

「忍お嬢様。冗談を言っている場合ではないです。私やファリンにさも気づかれずに誰かが侵入したとすれば、その時点で人間の仕業では無いと思われます」

「……確かにそうね。セキュリティだけではなくノエル達まで突破したなんて、夜の一族でも難しいわ……。だけど、それが成功している……。一体誰が」

そう忍は険しい声を出しながらノエルと共に卵を見つめるが、答えが出る筈は無かった。

何せその答えを知る者は、忍達がどうやっても辿り着く事が出来ない場所に存在しているのだから。

その事を知らない忍とノエルは、巨大な卵を険しい瞳で見つめ続けていると、地上へと続く扉が開き、地下室の中に忍によく似た顔立ちをした女の子・月村すずかとノエルと同じようにメイド服を着た美少女・ファリン・K・エーアリヒカイトが恐る恐る地下室の中に入って来た。

「……お姉ちゃん？何か分かった？」

「残念だけど何にも分からないわ。どうやってすずかの腕の中に現れたのかも、この卵が一体何の生物の卵なのかも分からないのよね」

「お姉さまが調べていたんじゃないかったですっけ？」

「ノエルに調べてもらっても何も分からなかったのよ、ファリン……。とにかく、もう少し調べたら朝食にするから、二人とも上にも

ど…」

「カタクカタクッ！！ビキビキッ！！」

「ッ！！」

突如として響いた物音と何かに罅が入るような音に、忍達は慌てて音が聞こえて来た卵の方を見てみると、機器に繋がっていた卵の上部分に罅が入っていた。

その卵の様子に何かが生まれようとしている事に気がついたノエルとファリンは、即座に忍とすずかを護る様に前に立ち、忍も不安そうにしているすずかを抱き締めながら卵を見つめていると、卵の中から半透明な姿をした綿毛のような生物 - パフモンが現れる。

「バカン！」

「パフ」

パフモン、世代ノ幼年期？、属性ノなし、種族ノ精霊型、必殺技ノパフバルーン

精霊型というレアな分類に属するデジモンで、争いを好まない性格の個体が多い幼年期デジモン。透き通った美しい半透明の体が特徴的で、とても軽く、風に乗ってふわふわと移動しながら次の段階への進化を待っている。風の具合によつて移動できる距離が変わるらしい。必殺技は、大きく口を開け空気を吸い込みカラダを3倍にまで膨らませて敵を驚かす『パフバルーン』だ。また、ピンチの時に使用し、驚いている隙に空気を勢いよく吐き出し逃げ出す事も出来る。

「えっ！？」

卵の中から現れたパフモンの姿に、忍達は思わず声を上げた。てつきり何か危険な生物が生まれて来ると忍達は思っていたのだが、卵から生まれたパフモンは如何見ても危険な生物には見えない。その事に忍達は呆然とした顔をしながら、ユラリユラりと空中を漂っているパフモンを見つめていると、パフモンはノエルとファリンの背後にいるすすかを発見し、嬉しそうな笑みを浮かべながらゆつくりとすすかの方に移動する。

「パフ〜〜！」

「ウワツッ！」

自身に向かって飛びつくように向かって来たパフモンの姿にすすかは驚いた声を上げるが、パフモンは構わずにすすかの周りを楽しそうに飛び回る。

そのパフモンの様子を見ていた忍は一つの推測が頭の中に浮かび上がり、ゆつくりとパフモンの方にすすかを少し押す。

「ーっポン！」

「えっ？お姉ちゃん？」

「すすか、その生物は多分すすかと友達になりたいのよ。ゆつくりと手を伸ばして見なさい」

「う、うん」

姉である忍の言葉にすすかは半信半疑ながらも頷き、ゆつくりと自身の周りを飛び回っていたパフモンに両手を伸ばしてみると、パフモンは嬉しげにすすかの腕の中に飛び込む。

「パフフ」

「ポーポン！」

「……えいと、始めまして月村すずかです……貴方のお名前は？」

「パフツ！」

「パフ？パフって言うの？」

「パフ〜〜！」

すずかの言葉を肯定するようにパフモンは何度を頷き、すずかの体に擦りよる。

その姿にすずかも嬉しげな笑みを浮かべて、パフモンの頭を撫でると、パフモンは更に嬉しそうにすずかに笑みを向ける。

その様子を黙って見ていた忍は、自身の推測通りだったと内心確信しながら、仲良くなって来ているすずかとパフモンから離れてノエルとファリンに耳打ちする。

「良い。あの生物はとにかく家で飼って観察するわ」

「宜しいのですか？もしすずかお嬢様に何か在ったら」

「そうですね。もしすずかちゃんがあんまりのせいで傷つきでもしたら大変ですよ！」

「多分その心配は無いわ。あの生物は今生まれたばかりよ。なのに

すずかを見たらすぐさま、すずかの所に移動したわ。恐らくだけあの生物はすずかを母親か何かと勘違いしているのよ。だから、少なくとも今の所は安全よ……だけど、もしもの時の事もあるから、二人は充分に警戒していてね」

「分かりました」

「はい！絶対にすずかちゃんを護ります！」

ノエルとファリンはそう忍の言葉に答え、忍は安心したように息を吐きながら、パフモンと仲良くなっているすずかに声を掛けようとするのだった。

海鳴市に存在するもう一つの豪邸。

バニングス邸と呼ばれている家の一人娘、金髪の髪を持った四歳の少女ーアリサ・バニングスは今朝早くから起きて、自身の家の執事をしている鮫島と言う男性に命じて、大量の動物図鑑を持って来て貰っていた。

全ては早朝に自身と共にベットの所で寝ていた謎の生物の情報を知る為に、アリサは床に座りながらジッと動物図鑑を眺める。

「う〜ん、これにも載っていないわね……一体何なのよ？この子は？」

「プチッ？」

アリサの声に部屋の中に居た子犬と仲良く遊んでいた大きな角と小さな翼を持って、お腹の部分に鱗を三枚備えたスライムのような

生物・プチモンは首を傾げながらアリサの顔を見つめる。

プチモン、世代／幼年期？、属性／なし、種族／スライム型、必殺技／熱い吐息

フワフワと宙に浮いて生活するドラモン種のスライム型デジモン。大きな2本の角と小さな翼を持つのが特徴。とても体が軽く、小さな翼と口から吐く吐息で上手く空中での姿勢を安定させている。普段は陽気な性格だが、お腹に3枚の鱗を持っており、ここに触られると極端に機嫌が悪くなってしまう。必殺技は、口から熱い吐息を吐いて、それを推進力にして逃げ出す『熱い吐息』だ。

「プチッ！プチッ！！」

「何？遊んで欲しいの？」

「プププチッ！！」

アリサの質問にプチモンは同意するように声を上げながら飛び回り、アリサは溜め息を吐きながら床に並べて置いてあった動物図鑑を全て綺麗に片付けると、自身の周りを飛び回っているプチモンに声を掛ける。

「しょうがないわね。だったら他の皆とも一緒に遊びましょう」

「プチッ！！」

アリサの言葉にプチモンは嬉しそうな声を上げ、アリサも嬉しそうな顔を見ると、ゆっくりとプチモンに手を伸ばし、プチモンも嬉しげにアリサの腕の中に移動すると、アリサは優しくプチモンの頭を撫でる。

「今日の夜にパパとママに貴方の事を話すわね。大丈夫よ。絶対に飼えるようにしてみせるから、貴方も余り暴れちゃ駄目だからね？」

「プチッ!!」

プチモンはそうアリサの言葉に同意を示すように何度も頷き、アリサはプチモンの頭を撫でながら、家で飼っている犬達がいる部屋へとプチモンと一緒に向かうのだった。

プロローグエンド A&F

ミッドチルダアルトセイム地方。

ミッドチルダの中でも辺境とされ、豊かな緑が残る地域。

その場所に巨大な建造物が隠れるように停泊していた。夜の為にその場所に存在する巨大な建造物が放つ雰囲気には恐ろしいものを人に感じさせるだろうが、その雰囲気には構わずに建造物内部の二箇所に突如として光が現れる。

その内の光は建造物内部で暮らしていると思われる、ベットで眠っている金髪の少女の腕の中に現れ、光が消えた後には一つの巨大な卵が存在していた。

そしてもう一つの光は、建造物の中でも最深部に近い場所で発生し、その場所に置いてあった巨大なカプセルの前で何かに悩むように揺らめいていた。

まるでこのまま現れても意味が無いかのように光は点滅し続け、遂に意を決したのか光はカプセルの中に入って行く。それと同時にカプセルの中に存在してモノと光は一つに交わる。それが及ぶ結果は誰にも分からず、カプセルの中に存在してモノと光はゆっくりと交わり続ける。

そして翌朝。建造物の主であると思われる黒髪の女性が、ゆっくりと最深部を目指して歩いていた。

女性にとってそれは毎朝の日課と読んでもおかしくない事だった。自身の最愛の者を必ず助けると言う誓いを再確認する為の儀式と言っている事なのだから。その事で自身が絶望と悲しみに震えのにも慣れている。大切なモノを失ってしまった悲しみに心が壊れてしまいかもれない。それでもこれだけは女性には止められなかった。

そんな風に止められない習慣に女性が苦笑を口元に浮かべていると、先の通路に存在している横道から困惑した顔をしている頭に帽

け出す。

「ア、アリシア!!!!」

「プレシア！危険です!!」

駆け出したプレシアの背にリニスは叫ぶが、もはやプレシアは止まらずに前に向かって駆け出す。

向かう先にいるのは覚める事の無い眠りについた自身の最愛の愛娘。それは例え動かない存在であろうと関係ない。アリシアを蘇らせる為にプレシアは全てを捨てて、修羅の道に足を踏み入れたのだから。

そのアリシアの身に何かが起きた。プレシアはもはや冷静さを取り戻す事が出来ずに最深部に向かって走っていくと、黒煙を上げ続ける部屋を目撃し、思わず悲鳴を上げそうになるが、何とかそれを胸の内に押し込め部屋の中に入ろうとすると、部屋の中から懐かしくも愛しい声が響いて来る。

「……うん？此処何処なんだろう？」

「……えっ？」

「プレシア！？如何したんですか!？」

突如として足を止めたプレシアにリニスは叫ぶが、プレシアは何も答える事が出来なかった。

部屋の中から響いた声にプレシアはこれ以上に無いほどに聞き覚えがある。だが、その声が聞こえる筈は無い。では、今部屋の中から聞こえて来た声の主は誰なのかと、プレシアは恐る恐る希望と困惑に満ちた顔をしながら部屋の中に入り込む。

そのプレシアの様子にただごとではないとリニスも気がつき、プレシアと共に黒い煙が吹き上がる部屋の入ってみると、子供が入り込めそうな大きさを持っていたと思われるカプセルの残骸が存在していた。

リニスはそのカプセルの残骸に疑問を覚えるが、それどころではないと思い、先に部屋に入ったプレシアに顔を向けてみると、プレシアは呆気に取られたような顔をしていた。

その始めて見るとプレシアの顔にリニスは僅かに驚きながら、プレシアが見つめている方に顔を向けてみると、見覚えが在る金髪の髪に赤い瞳を持った五歳ぐらいの裸の女の子が辺りをキョロキョロと見回していた。

その少女の姿にリニスは一瞬の内に顔を険しくして、呆気に取られているプレシアの横を通り過ぎ、女の子に向かって叫ぶ。

「フェイト！何ですかその格好は！？服も着ないで！？」

「ふえ？・・・フェイト？私そんな名前じゃないよ」

「えっ？」

女の子の言葉にリニスは驚きに満ちた声を上げた。

目の前に居る少女は間違いなく、自身がプレシアから世話係を命じられている少女・フェイト・テストロッサ。しかし、その少女は自身の名前は違つと告げた。

フェイトに瓜二つと言つていい容姿をした少女が誰なのかとリニスは困惑していると、今度はリニスの横をプレシアが通り過ぎ、少女の視線に合うまで腰を下げる。

「・・・アリシア？アリシアなのよね？」

「うん！私はアリシア・テストロツサだよ！・・・お母さんの？」

「アアアアアアアッ！！アリシア！！」

「ーガバツ！！」

「ウワツ！」

「アリシア！アリシア！！アリシア！！」

少女・アリシア・テストロツサにプレシアは抱きつき、大粒の涙を両目から流しながらアリシアの名を叫び続けた。

抱き締められているアリシアの温もりは間違いなく本物。自身の全てと言っていい存在が帰って来た事にプレシアは歓喜に満ちた涙を流し続けるが、抱き締められているアリシアは苦しそうに顔を歪めて、プレシアにとって残酷な言葉を呟いてしまう。

「お母さん苦しいよ！・・・それに何かお母さん老けてない？」

「ーピシッ！！」

アリシアが呟いた女性にとって最も残酷な言葉を耳元で聞いたプレシアは石のように固まり、アリシアとリニスはその様子に困ったように顔を見合わせるのだった。

そして一時間後。漸く現実世界に復帰したプレシアは、リニスに後で事情を説明すると告げると共に、もう一人の住民であるフェイトを絶対に研究室に訪れさせないように命じ、自身の愛娘であるアリシアの体の状態を詳しく調べていた。

今まで色々死者蘇生の研究をしていたが、プレシアはアリシアには直接的には何もしていない。では、何故アリシアは急に蘇ったのかと疑問に満ち溢れながらプレシアは色々な機器でアリシアの体を検査してみると、アリシアの心臓と融合している青い玉のようなモノが存在しているの発見する。

「これは何？これがアリシアを蘇らせた原因なの？一体これは？」

アリシアの心臓に融合している見た事も無い物質に、プレシアは困惑した。

その物質は完全にアリシアの心臓と融合し、それが新たなアリシアの心臓としての役割を果たしていた。

詳しく知る為にはアリシアから取り出すしかないとプレシアは判断するが、即座にその考えを打ち消し、今調べたデータを即座に破棄する。

「ーピーッ！」

(この事は誰にも知られる訳にはいかないわ。アリシアは全次元世界で始めて死者蘇生に成功した存在。この事が誰かに知られれば、アリシアの体からこの物質を取り出して調べようとする。そんな事になればアリシアは！！)

「ねえお母さん？これもう外していい？」

「ええ、良いわよアリシア・・・(絶対にさせないわ！何が在っても今度こそアリシアを護り抜いてみせる！神か悪魔か知らないけど！アリシアを生き返らせてくれた事には感謝するわ！だからこそ、このチャンス逃してたまるものですか！！)」

自身の体についている機械を外しているアリシアの姿を見ながら
プレシアは内心で叫ぶと、即座に多数の世界の情報をピックアップ
し始める。

(ミッドにはもう居られないわ。何処別の世界。管理外世界が良い
わね。ある一定レベルの技術力を持つ世界に移住して隠れて暮らせ
ば良いわ……さて、何処の世界が良いかしら?)

「ねえお母さん？さっきの女の人ってもしかしてリニスなの？」

「……ええ、そうよ。使い魔として一緒に今はいるのよ」

「やっぱりそうなんだ！じゃさ！もしかしてさっきリニスが言っ
ていたフェイトって、私の妹！」

「……えっ？」

アリシアの言葉にプレシアは答える事が出来ずに、困惑した顔を
無邪気な笑みを浮かべているアリシアを向けた。

プレシアにとってフェイトはアリシアの偽者でしかなかった。

アリシアの記憶を与えたのにアリシアになれなかった出来損ない
そんなフェイトにプレシアは憎しみすら抱いていた。

しかし、そんな事を知らないアリシアは無邪気な笑顔を浮かべな
がら素早く用意されていた服を着て、研究室の出口に向かって駆け
出す。

「会いに行つて来るね！フェイトに！」

「アッ！アリシア！あんまり急いで走っちゃ駄目よ！」

「分かってるよ！」

「……ボタン！」

背後から聞こえて来たプレシアの声にアリシアは答え、研究室の扉を閉めると、そのままリスとフェイトがいる部屋に向かって急いで駆けて行く。

その様子にプレシアは懐かしそうに目を細めながら、先ほどのアリシアの言葉を反芻するように口元に手をやる。

「フェイトがアリシアの妹？」

そうプレシアは呟きながら、アリシアとフェイトの違いを思い浮かべて顔を険しく歪めるのだった。

建造物 - 時の庭園の内部の一室。

その場所には困惑した顔を隠す事が出来ずに居るリスと、その様子を首を傾げながら見ているアリシアに瓜二つと言っていいほどに良く似た少女 - フェイトと、フェイトの腰の辺りに静かに座っている頭に角を生やした青色のスライムのような生物 - チコモンが存在していた。

チコモン、世代 / 幼年期？、属性 / なし、種族 / スライム型、必殺技 / 酸の泡

小さくて青い色をした竜型デジモンの子供。小さくて非力だが、あらゆる竜型デジモンへの進化の可能性を秘めている。そのため、竜型デジモンの研究者やテイマーには非常に貴重がられているデジモンである。幼年期デジモン特有のひとなつこさと好奇心旺盛な性格

で可愛がられている。必殺技は、口から酸性の泡を吐き出す『酸の泡』だが、相手を怯ませるぐらいの効果しかない。

「・・・リニス？一体何があつたの？それにこの子の事も母さんに説明しないと」

「少し待つていなさいフェイト。プレシアも、もう少し来たら此処に来ますから・・・（それにあのフェイトに良く似た女の子も一緒に来るでしょうね・・・アリシアですか・・・何かその名前は懐かしく感じますけど、一体あの子とフェイトはどう言う関係なんでしょうか？）」

そうリニスは内心で疑問の声を上げながら、先ほど出会った少女・アリシアについて考え始める。

余りにも目の前でチコモンと遊んでいるフェイトとアリシアは似過ぎている。それこそ一卵性の双子と呼んで言いほどに似ているのだが、リニスはフェイト以外にプレシアに子供が居たと言う話は聞いた覚えは無い。では、アリシアは何者なのかとリニスは考えるが、やはり答えは出る事無く悩み続けていると、通路の方から急いで足音が響き、リニスとフェイト、チコモンが扉の方に顔を向けると同時に扉は勢いよく開けられ、アリシアが入ってくる。

「到着！！」

「えっ！？」

「チコ！？」

扉を開けて入って来たアリシアを目にしたフェイトとチコモンは目を見開き、自身にソックリな容姿をしているアリシアをフェイト

が言葉も無く見つめていると、アリシアはフェイトの姿に嬉しそうに微笑み、フェイトの前に移動する。

「始めましてだね！私はアリシア・テストロッサ！フェイトのお姉ちゃんだよ！」

「お、お姉ちゃん？」

アリシアの告げた事実にはフェイトは困惑した声を上げてアリシアを見つめるが、アリシアは構わずにフェイトの手を握り、嬉しそうにしながら声を掛ける。

「一緒に遊ぼう！フェイト！其処に居る可愛い青い子も一緒に！」

「・・・う、うん、お姉ちゃん」

「チコ！！！」

アリシアの言葉にフェイトは困惑しながらも頷き、チコモンは嬉しそうにフェイトとアリシアの周りを跳ね回っていた。

運命は変わった。その事実を今は誰も知る事無く、世界は動いて行く。

五つの電子の獣と電子の獣と融合せし少女が現れた事によって変わった未来が如何なるのかは、誰にも分からない。

六人の選ばれし少女達が紡ぐ絆の物語。“電子の獣と少女達”が今始まります。

幕間 平行世界より舞い降りる騎士と王……そしてマッド(前書き)

現在活動報告に嘘かもしれない予告を掲載しています。

出来ればご意見、ご感想をお願いします。

因みに今回の話で漆黒の竜人と少女のエピローグ後みたいな話が出ていますが、あくまでEFですので、そうなるとは限りません。

幕間 平行世界より舞い降りる騎士と王……そしてマッド

夜空が広がる海鳴市。

その街中に存在する一番高いビルの屋上に光が溢れ、光が消えた後には手荷物とリュックサックを背負った紅と緑のオッドアイを持った十一歳ぐらいの少女と、その少女の横に並ぶように立つ少女と同じようにリュックサックを持った赤い恐竜のような生物 - ギルモン、そして白衣を着て背中に巨大なリュックサックを背負った青い髪に赤い瞳を持った二十歳以上と思われる女性が立っていた。

ギルモン、世代 / 成長期、属性 / ウィルス種、種族 / 爬虫類型、必殺技 / ファイヤールール、ロックブレイカー

赤い恐竜の様な姿をした二足歩行の爬虫類型デジモン、胸にはデジタルハザードと呼ばれる紋章が存在し、多大な被害を齎す存在と言われているが、その力を正しく使えばデジタルワールドの守護者に成りえる存在にも成る。必殺技は、口から吐き出す火の玉で攻撃する『ファイヤールール』に、大きな爪で岩をも砕く相手に向かって攻撃を繰り出す『ロックブレイカー』だ。また、その他にも多彩な技を持っているぞ。

「この街にデジタマはあるんだよね？ギルちゃん」

「うん！追跡反応を辿ったらそうだって、リンディさんが言ったよ、ヴィヴィオ！」

オッドアイの少女 - ヴィヴィオの質問に、ギルモンは頷き、ヴィオは険しい顔をしながら街の中を見ようとビルの端の方に移動しようとするが、その前に最後の女性が背中に背負っていたリュックサックを屋上の床に下ろし、夜空に向かって歓喜に満ちた咆哮を

上げる。

「外の世界イイイイイ！！！更に平行世界と言う絶対に辿り着けない場所！！何て美味しい空気なんでしょうか！！やっぱり来て正解でした！！さあ！すぐさまけん……」

「ギルちゃん」

「うん。ファイヤーボール……」

「……ドゴオオオオオン！！」

「キヤアアアアアアアア……！！熱い！熱いですよ……！！」

ヴィヴィオの言葉にギルモンは即座に頷き、女性に向かって口からファイヤーボールを吐き出し、女性は悲鳴を上げながら火がついた白衣を脱ぎ捨てて、火を消し始める。

その様子を疲れたように溜め息を吐きながらヴィヴィオとギルモンは見つめ、ヴィヴィオはゆっくりと火が消えて安心してゐる女性に声を掛ける。

「フリートお姉ちゃん？私達は如何して此処にゐるのかな？」

「……ギクッ……！！」

「……も、もちろん分かっていますよ、ヴィヴィオちゃん。私のミスで平行世界に飛んでしまったデジタマを回収する事が任務ですよ」

「そうだよ。本当はリンディお姉ちゃんか他の誰かが一緒に来る筈

だったのに、フリートお姉ちゃんが我が侂を言うから、特別に今回だけ認められたんだよ。それに外の世界で悪さをしたら即座にフリートお姉ちゃんが外に出られるようになる機械は壊されちゃうんだよ」

「う、ウグツ！・・・分かっていきます。トホホ」

ヴィヴィオの言葉に白衣に付いた火を消し終えた女性・フリートは落ち込んだ顔をしながら、自分達がこの世界にやって来る時の経緯を思い出す。

数日前の平行世界アルハザード司令室。

その部屋には翡翠色の髪を持つて何処かの組織と思われる制服を着た女性・リンディとヴィヴィオ、ギルモン、リンディと同じ服を着たオレンジ色の髪をロングにしている女性・ティアナ・ランスタ、そしてその肩に巻きついている体に文様が描かれた生物・クダモン(S) - 以降クダモン。

リンディとティアナとは違ってエプロンを付けている制服を着て、僅かにお腹が膨らんでいる茶色の髪をサイドポニーにした女性・なのはとその横になのはが着ているエプロンと同じものを首から提げながら立っている毛皮を被った獣・ガブモン。

そして最後にリンディ、ティアナ、なのはとも違う制服を着た紫色の髪を持った女性・クイント・ナカジマが、部屋の隅で潰れているフリートを険しい顔をしながら睨んでいた。

クダモン(S)、世代/成長期、属性/ワクチン種、種族/聖獣型、必殺技/弾丸旋風、絶光衝、ホーリーショット

クダモンの亜種と呼ばれるデジモン。本来ならば聖なる薬莢を常に巻きつけて離さない聖獣型デジモンだが、此方の方は単体での行動を取る事が出来る。その他にも通常のクダモンとは違い、体に基盤

のような模様が刻まれている。左耳のイヤリングに聖なる力を日々溜めていると言われ、蓄えた力が大きいほど次の進化に影響があるという。冷静沈着な性格をしており、戦いにおいても的確に状況判断を行って、戦いを優勢に進める。必殺技は体を薬莢のように変化させ自らが弾丸となり相手を貫く『弾丸旋風』と、イヤリングから輝きを発して目をくらます『絶光衝』に、基盤のような背中模様が増した時に放たれる『ホーリーショット』だ。この世界のティアナのパートナーデジモンで、現在は地球に設立されたデジモンに関する事件を解決する特別部隊で、ティアナと共に働いている。因みに直属の上司はリステイ・牧原。

ガブモン、世代/成長期、属性/データ種、分類/爬虫類型、必殺技/プチファイヤー

毛皮を被っているが、れつきとした爬虫類型デジモン。とても臆病で恥ずかしがりやな性格でいつもガルルモンが残っていたデータをかき集めて毛皮状にしてかぶっている。必殺技の『プチファイヤー』は小さな青色の火炎弾を放つ技だ。この世界の高町なのはのパートナーデジモンで、一年前まではなのはと共にティアナ達が所属する組織に入っていたが、現在はなのはと共に夢だった喫茶店を経営している。

「……そ、それでリンディ……本当に六つのデジタマは行ってしまったの？ 平行世界に？」

「……ええ、頭が痛い事実だけど、本当に行ってしまったのよ、クイント……平行世界に」

「……眩暈がするわ」

リンディの断定の言葉にクイントは頭が痛そうに顔に手を置き、

他のメンバーも同様に頭が痛そうに手を顔に置く。

平行世界にまだデジモンが生まれていないデジタマが六つ移動してしまった。

それが事実だとすれば大変な事態になる。危険な場所にデジタマは向かってしまったかもしれないし、例え安全な場所でも其処に悪しき意思を持つ者がいれば、デジタマから生まれて来るデジモンを悪用するかも知れない。それだけではなく未知の生物であるデジモンを実験動物にしてしまうかもしれない。

考えれば考えるほどに悪い状況しかリンディ達の頭の中には浮かばず、全員が顔を青ざめさせていると、何とか話を進めようとクダモンがリンディに声を掛ける。

「とにかく六つのデジタマを早急に回収する必要があるな」

「ええそうね・・・だけど問題は誰がデジタマを回収に向かうかね・・・私やティアナさんにクダモン君は仕事があるから無理だし、クイントも仕事で無理」

「なのも無理ですよリンディさん。今一番大切な時期ですから」

「すみませんリンディさん・・・あの人も仕事があつて無理ですから」

「それは分かっているから安心してガブモン君、なのはさん。特になのはさんは今が一番体を大事にしなさいといけない時だから、体には気をつけてね」

「はい」

「となると動けるのは学校が夏期休暇に入ったヴィヴィオとギルモ

ンだけと言う事だな・・・ブラック、ルイン、ヒカリ、テイルモンは例の件がある為に戻って来る事も出来ない。他の連中も同様に忙しい時だ・・・ムツ！琴乃、リシア、風華は如何だ？」

「もつと無理ね。あの三人はフェイトさんとブイモン君、それにアインハルトさんとそのパートナーで、大君とアグモン君をデジタルワールドで捜索中よ・・・もういい加減に覚悟を決めて入籍して欲しいって小百合さんが嘆いていたわ」

「ウム・・・では、イクスとクラモンは！」

「お父さんとお母さん、マリエンジエモンと一緒に旅行に行っているんだよクダモン君・・・イクスまだよそよそしい所があるから、今回の旅行でそれを解消して来るって、お父さんとお母さんが言っていたよ」

「タイミングが悪すぎるぞ！」

なのはの告げた事実にくダモンは悲鳴のような声を上げ、頭を抱えた。

余りにもタイミングがそれぞれ悪すぎた。唯一自由に動けるのがヴィヴィオとギルモンだけとは不味すぎる。確かにヴィヴィオとギルモンの実力は信頼出来るが、万が一デジタマがある場所が平行世界の聖王教会だった場合、先ず間違いなくヴィヴィオとギルモンは再びカオスデュークモンになってしまうだろう。

二人の聖王教会及びベルカ嫌いはそれほどまでのレベルなのだ。そうなった時に止められるのはこの場に居るメンバーと、今は遠く離れた世界で作業を行っているブラック、ルイン、ヒカリ、テイルモンぐらいだ。

しかし、リンディ、ティアナ、クイント、そしてクダモンも自分

達の仕事からは離れる訳にはいかない。特にリンディとティアナ、クダモンは地球でも重要な仕事についている。だからこそ、おいそれと仕事から離れる訳にはいかないのだが、今回の件を放っておく訳にもいかない。

そう思ったティアナはリンディに険しい顔をしながら声を掛ける。

「リンディさん。だったら私とクダモンがヴィヴィオとギルモンと一緒にいきますよ。幸いにも有給は溜まっていますし、それを消化する意味も兼ねてリステイさんに言えば…」

「帰って来た時に山のように仕事が押し付けられるわね」

『……………』

リンディの告げた言葉にティアナとクダモンは全身から冷や汗を流した。

絶対にリンディの言った言葉どおりになるとティアナとクダモンは予測出来たのだ。リステイ・牧原と言う人間はそう言う人間なのだ。

リンディはティアナとクダモンの様子に溜め息を吐き、本気で如何すればいいのかと悩んでいると、部屋の隅の方で潰れていたフリートが起き上がり拳手する。

「はい！！私がヴィヴィオちゃんとギルモン君と行きます！！」

「寝言は寝て言いなさい。また潰されたいのかしら？」

「ヒイツ！！……うう、それでもお願いします！！お願いですから私をヴィヴィオちゃん達と一緒に外の、平行世界に行かせて下さい！！絶対に悪さはしませんから！！お願いしますリンディさん！！」

（絶対に信用出来ないわね。デジタマを探している途中で目的を忘れて、確実に研究の方に興味が行くわ）

自身の前で土下座しているフリートを見下ろしながらリンディはそう内心で考え、他のメンバーも同様の考えを思い浮かべる。

確かにフリートは知能に関してだけは信頼出来るが、その他の事に関しては全く信頼も信用出来ない。

確実に途中で目的を忘れて、自身の想いのままにフリートは動く、その場にいる全員が確信するが、フリートは構わずにリンディの前で土下座し続ける。

「お願いします！！私だって今回の件には本気で責任を感じているんですよ！！だから！名誉挽回！汚名返上の機会を如何かお願いします！！」

「駄目に決まっているでしょう」

「ーースダツ！！」

「フエエエエエーーン！！そんなに私は信用無いんですか！？」

「無いわね」

「無いですよ」

「ある訳無いでしょう」

「無理だと思っな」

「自分のして来た事を思い返してみる」

「フリートさん、諦めた方が良いよ」

「……ズダッ!!」

リンディ、ティアナ、クイント、なのは、クダモン、ガブモンの迷いが一切無い断言にフリートは完全に床に倒れ伏した。

その様子に話は終わったと言うようにリンディ達は再び顔を見合わせて如何したものかと悩み始めると、黙って話を聞いていたヴィオがリンディに声を掛ける。

「リンディお姉ちゃん。ヴィヴィオとギルちゃんが見張るから、フリートお姉ちゃんを行かせてあげよう」

『ヴィヴィオ!!』

「ヴィヴィオちゃん!!!!」

ヴィヴィオの突然の発言にリンディ達は信じられないと言うように声を上げ、フリートはヴィヴィオの言葉に希望に満ち溢れた顔をヴィヴィオに向けるが、ヴィヴィオは静かに自身の考えを告げる。

「だって、一回ぐらい連れて行ってあげないと、また暴走すると思うよ。フリートお姉ちゃんは」

「……ズダッ!!」

「私ってヴィヴィオちゃんにも信用無いんですか!?!」

フリートはそうヴィヴィオの発言に再び体を床に打ち付けながら叫ぶが、他のメンバーはヴィヴィオの発言に一理あると考える。

ヴィヴィオの言うとおり此処でフリートを外の世界に出せば、フリートの溜まっていた不満は解消されるだろう。逆に不満が溜まり続けてフリートが本格的に暴走したら、幾らリンディ達でも手の内ようがない。だが、此処で不満を解消すれば、フリートの暴走は起こらずに平穏な日々がアルハザードには続く。

その事が思い浮かんだ全員が同時に溜め息を吐き、フリート、ヴィヴィオ、ギルモンに顔を向け、代表してリンディが声を掛ける。

「・・・非情に不満と不安が在るけれど、今回だけは特別にフリートさんの外出許可を出すわ・・・ただし！！もし平行世界で何か行った場合は、潰し千刑に処する思いなさい！！それともし既に取り返しつかない事態が発生していたら、以後二度とフリートさんの外出許可は出しません！！良いですね！！」

「はい！！必ずヴィヴィオちゃんとギルモン君と一緒に六つのデジタマを回収して来ます！！」

「期待しないで待っているわ・・・ヴィヴィオ、ギルモン君。毎日連絡するのよ。もしフリートさんが怪しい行動をしたら、即座にデュークモンに進化してファイナルエリシオンを放ちなさい」

「うん！」

「分かった！」

(何気に私の死刑宣告していませんリンディさん！？)

リンディ、ヴィヴィオ、ギルモンのやり取りを見ていたフリートは全身から冷や汗を流しながら内心で叫ぶのだった。

そして時は戻り現在。

平行世界にやって来たフリートは自身が此処に来る経緯を思い出しながら、背中に背負っていたリュックサックから道具を取り出す。うとするが、その前に今は此方の世界は完全に深夜だと気がつき、ビルの端から街を見回しているヴィヴィオとギルモンに声を掛ける。

「ヴィヴィオちゃん、ギルモン君。今日の所は何処かのホテルに泊まって、明日拠点となる家を手に入れてから本格的にデジタマの捜索を始めましょう。流石にこんな深夜に子供が動き回るのは不味いですからね」

「うん．．．そうだね。じゃ明日からにしようかギルちゃん」

「うん！ギルモンもその方が良いと思うよ」

「では、行きますか．．．（まあ、此方の世界にデジタマが移動してからそんなに時間は経っていませんし、取り返しのつかない事態にはなっていないでしょうからね）」

そう背中にリュックサックを背負いなおし、ヴィヴィオとギルモンと一緒にビルを下りながらフリートは考えた。

しかし、この時フリート、ヴィヴィオ、ギルモンは重大な事実に気がついていなかった。

フリートが新たに作った『平行世界にいつてらっしゃガン』の設定時間がとんでもなくずれていて、デジタマがこの世界に訪れてから、五年以上に月日が経過してしまっているとは夢にも思っていない

か
っ
た
の
だ
っ
た
。

第一話 夜天と狐&夜と闇（前書き）

とある方のご意見で、一度第一話から書き直しました。

第一話はプロローグから一年後の話です。
誤字脱字などがありましたら、ご報告下さい。

第一話 夜天と狐&夜と闇

とある一軒家。

その家は一般家庭よりも障害者に対するバリアフリーが行き届いていた。

理由は、家の主である五歳の少女・八神はやての両足が原因不明の病気によって動かず、車椅子に寄る移動を余儀なくされていたからだ。

普通ならばその様な障害を持っている少女が一人暮らしなど出来る筈は無い。しかし、はやては両親を失ってから一人寂しく生活を強いられていた。だが、今は違う。

今、はやてには一人の家族が出来ていた。普通とは違うが、それでもはやてにとっては大切な家族が出来た事で、はやては幸せな想いに包まれていた。

それを表すようにはやては、自身の部屋の中で安らかな寝顔を浮かべながら眠っている。

そして朝の朝食時間に近づいて来ると、はやての部屋の扉が開き、何処かはやてに似た顔立ちをしている十八歳ぐらいの女性が部屋の入り込み、ベットの上で眠っているはやての体を優しく揺すり動かす。

「はやて、はやて、朝食の準備が出来たぞ」

「……うん」

女性の言葉と体を揺すられた事によって、はやてはボンヤリと両目を開けて体を起こす。

そして自身の大切な家族が、優しい笑みを浮かべながら近くに立っている事に気がつき、はやての顔も思わず綻ぶ。

「おはよう、レナ」

「おはよう、はやて。朝食の準備は終わっている」

「そう言えば、今週からはレナの当番やったな」

「そうだ。さて、まずは顔を洗ってから朝食にするぞ」

女性・レナはそうはやてに告げると、はやての体を抱き抱えながら立ち上がり、ベッドの横に置かれている車椅子にはやてを乗せて移動を開始する。

そのまま洗面所ではやては顔を洗い、レナは手早くテーブルの上に朝食を並べて、はやてと対面するように座る。

「うーん。やっぱりレナも成長しとるんやな」

「此処に来て一年近くだからな。何時までも幼年期では居られんさ」

「でも、全然甘えてくれへんようになったのは寂しいな……今日は一緒に風呂に入ろう。もちろんその姿でな!」

「……分かった」

はやての言葉にレナは何処か複雑さが混じった笑みを浮かべてながら頷いた。

逆にはやては心の底から嬉しげにはしゃぐと、レナが用意した朝食に手を伸ばし、食べ始める。

「今日の予定は？」

「病院に言つて足の検査や。何でも新しい先生に変わるんやて」

「そうか。では、その後には何時もどおり図書館で良いのだな？」

「うん……今日は図書館は止めて、何処かに遠出しよう……
久しぶりにレナと街を歩き回りたい気分やから」

「了解だ。では、その前に洗濯や掃除等を終わらせておく」

「頼むわな」

そうはやてはレナに嬉しげな声をかけ、レナは苦笑しながら自身の食事を食べ始める。

二人の共同を生活が始まって既に一年近く経過していた。人間の姿になってはいるが、レナの正体は一年前にはやての下にやって来たレレモンが成長したデジモンである。

当初は、はやての世話になっていたレナだが、成長期になった今では共に家事を行ったりしている。また、デジモンの特性を利用して電子関係の内職などを行ったりして、少しずつお金を稼いでいた。その理由はレナは、はやての保護者になっている人物 - 『ギル・グレアム』が嫌いだったからだ。

はやての前では隠しているが、レナは如何にもギル・グレアムと言う人間が信じられなかった。表向きは、はやてには何不自由ない生活をさせているが、五歳の子供を一人暮らしさせる人間など普通ではない。

それにレナには他にもギル・グレアムが怪しいと思える証拠を幾つか発見していた。

(……今日も来ているか)

自身とはやての食事風景を外から覗き見ている一匹の猫の姿を、レナは気づかれないように横目で眺めた。

第二段階の幼年期に進化した頃から、レナは自身とはやてを監視するかのように見てくる猫の存在に気がついていた。姿形はただの野良猫にしか見えないが、その身から感じられるのはただならぬ気配。

デジモンとしての本能でそれを読み取ったレナは、自分達が完全に監視されている事を理解し、自分には変身能力しか持って居ないように見せていた。

(やはり当分は力を隠して生活するしか在るまい。今の私は成長期までしか進化出来ない・・・何よりもはやてを危険に巻き込むのだけは何として避けなければ・・・味方が欲しい。信用出来て、私の事情を理解してくれる味方が)

何とか現状から抜け出したいとレナは思っている。

ギル・グレアムの目的が何でアレ、確実にそれには目の前で食事をしているはやてが関わっている。

自分が目的ながらもっと早くにギル・グレアムは行動しているとレナは考えている。

相手も自身の正体が分からないからこそ、自身を観察している筈問題はそれが何時までなのかだった。

(・・・少なくとも、当分は私には手を出すまい。そのチャンスは何度も在った。だが、相手は何もしてきていない・・・しかし、余り時間が無いかも知れないのも事実・・・とにかく、はやてだけは絶対に護ってみせる！)

「そつや！レナ！」

「うん？何だ？」

「もうそろそろレナが家に来て、一年やる？だったら一緒のパーティーでもしようか！」

「・・・それは良いな。ならば、私がケーキを買って来よう。丁度評判の店が近くに在る事を雑誌で知った。はやても気に入る筈だ」

「ほんま！よっしゃ！だったら、今日は予定変更して、病院が終わったらパーティーの準備を買いに行こう！」

「分かった。だったら先ずは食事を終わらせるべきだ」

「うん！パーティー楽しみやわ！」

「私もだ」

そうはやてとレナは互いに楽しそうに今後の予定を話しながら食事をする。

静かに自分達を見つめている猫に、レナは人知れずに警戒しながら、はやてだけは何としても護ると誓いながら。

海鳴市某所、広大な敷地を持つ月村家。

その家の次女である月村すずかは、自身の部屋の中で猫達と共に遊んでいた。すずかの周りを囲んでいる猫達は全て捨て猫だった。

とある事情で半年近く前から月村家で捨て猫を保護するようになったのだ。その理由は一体のデジモンに原因が在った。

最も最終的には月村家の主である忍も了承し、すずかも多くの猫達に囲まれる生活に喜んでいた。

そうしてすずかが猫達と遊んでいると、すずかの部屋の扉がノックされる。

「トントントン！！」

「おーい！開けてくれ！ノエルさんからおやつを貰って来たぞ！」

「うん！今開けるよ！」

「ーガチャ！！」

すずかは扉の向こうから聞こえて来た声に嬉しそうにしながら扉を開け、扉の向こうからケーキや紅茶が載った御盆を持った、首下に赤いスカーフをつけて、赤いグローブを両手に装着している小悪魔のような容姿をしたデジモンが部屋の中に入って来る。

「ほれ！今日はケーキと紅茶だつてさ！すずか！」

「ありがとう、インプモン」

インプモン、世代ノ成長期、属性ノウィルス種、種族ノ子悪魔型、必殺技ノナイト・オブ・ファイアー、ナイト・オブ・ブリザード
相手を困らせるのが好きなイタズラ子悪魔型デジモン。プライドが高い反面に実は寂しがりや。しかし、強い奴に対しても絶対に従わずに立ち向かう性格をしているぞ。必殺技は、暗黒の炎を手から出現させて相手に向かって放つ『ナイト・オブ・ファイアー』に、暗黒の氷を手から出現させて相手に向かって放つ『ナイト・オブ・ブリザード』だ。

部屋の中に入って来たインプモンにすずかは礼を告げて部屋の中に招きいれ、インプモンと共に座る。

同時に猫達の何匹かがインプモンの傍に近寄り、甘えるようにインプモンに擦り寄る。

『ニヤアー！ニヤ〜！』

「ウオオツ！あんまり擦り寄るなよ、お前ら」

「皆インプモンが好きなんだよ。だって、皆が家に来るようになったおかげはインプモンのおかげなんだから」

「それを言わないでくれよ、すずか」

猫達の相手をしながらインプモンは苦笑した。

月村家にインプモンがやって来てから一年近く、当初は忍やノエル。ファリンに警戒されていたインプモンだったが、一年経った今では月村家の一員になっていた。

すずかの姉である忍からは、忍作成の道具などの試験を手伝わされたり、ノエルやファリンとは家事や掃除などを手伝ったりして打ち解けていった。

その中でもすずかとは友人として暮らし、今では互いに胸の内を話せるほどの関係になっていた。

因みに月村家が猫屋敷に変わってしまった原因には、雨の日に月村家の門の所で悲しげに泣いている猫をインプモンが発見して密かに飼っていたところをすずかが見つけて、一緒に育てた事が原因だった。

「もう一年になるけど、結局インプモンが家に来た原因は分からない

かったね」

「デジタマで来たのが原因だけど・・・何で俺は、すずかのところに来たんだろうな？」

「分からないけど・・・私は嬉しいよ。インプモンって言う大切な友達が出来たから」

「なっ!?!ば、馬鹿! 恥ずかしいだろうが!?!」

すずかの言葉にインプモンは顔を赤らめながら叫んだ。

その様子をすずかは優しげな視線で見つめ、二人はそのまま猫達に囲まれながら他愛無い話をして行く。

それから少し時間は経ち、すずかの姉である忍がゆっくりと部屋の中に入って来て、インプモンに声をかける。

「インプモン、ちょっと見て貰いたいものがあるんだけど、今大丈夫?」

「ああ、大丈夫だぜ、じゃすずか。ちょっと席を外すな」

「うん! 終わったらまたお話ししよう」

「おう!」

インプモンはすずかの言葉に頷き、そのまま忍と共に部屋を出て行く。

そして忍はインプモンを連れてリビングに来ると、部屋の中には何らかの資料を持ったノエルが控えていた。

「如何したんだ？ノエルさんまで？」

「実は貴女に見て貰いたいモノがあるのよ。ノエル」

「はい、此方です」

忍の言葉にノエルは頷き、手に持っていた資料をインプモンに手渡す。

インプモンは渡された資料を無言で開き、資料を見てみると、月村重工が此処最近インターネットで行っていた入力の仕事を、凄まじい速さで終わらせている人物が居る事が書かれていた。

「インプモンからデジモンは電子に関しては強いって聞いたでしょう。だから、月村重工で入力作業の内職をやってみたら、案の定出来たのよ。高性能のコンピュータ並みに仕事を終わらせている人物がね」

「更にこの人物について調べて見たところ、月村重工以外にも複数の会社に登録している事が判明しました。しかも仕事の速さはどれだけ仕事が重なっても、殆ど同じ速さで終わらせています」

「人間では無理だけど・・・デジモンなら簡単だな・・・多分のコイツは」

「デジモン・・・もしくはさすがと同じようにデジモンに選ばれた人間の可能性が高いでしょうね」

インプモンの言葉に続くように忍が声を出した。

この一年近くの間で、インプモンには危険性は無い事を忍達は分かっている。だが、何故インプモンが自分達の下に現れたのかが分

からない。

インプモン自体には危険は無くても、送って来た人物には危険が在るかも知れないのだ。

大切な妹の安全の為に忍はこの一年近く、月村家の裏の力を使ってもインプモンの言うデジモンと言う種族について調べに調べ続けていた。

結局のところは何の結果も出なかったのだが、デジモンがインプモン一体だけなど不在りえないと考えて動き続け、漸くデジモンらしき影を捉えるに至ったのだ。

「近い内にこの人物の居所を発見出来る筈よ。そうしたら貴方にもついて来て貰うわね」

「分かってる。俺も何で俺がこの世界に居るのかを知りたいからな」

「頼りにしてるわ。さくで、それじゃすずかのところに戻ってゲームでもしましょう。今日は負けないわよ」

「ヘッ！返り討ちにしてやるぜ！」

忍の言葉にインプモンは不敵な笑みを浮かべながら答え、二人は互いに牽制しあいながらすずかのところに戻って行く。

残されたノエルは無言でインプモンが置いていった資料を持ち、自身の仕事へと戻って行くのだった。

第二話 枯れている竜と後の女帝&優しき獣と不屈

海鳴市某所、バニングス邸。

月村重工と言う会社を経営している月村家と同じく、バニングスも大型複合企業体を経営している。

その為に敵も多く一人娘であるアリサ・バニングスも狙われる事も多い。

しかし、今、バニングス邸に侵入しようとする猛者の数は限りなく低くなっていた。

何故ならば、バニングスは、“竜を飼っている”などと言う嘘が真か分からない情報が流れるほどに、次々とアリサを狙った連中やバニングス邸に忍び込んだ者達が逮捕されたのだ。

その連中の全てが恐怖に震え、絶対に喋らない事も喋ってしまうほどに、バニングスには関わりたくないと宣言していた。

だが、それでもバニングスを狙う連中は後を絶たず、今夜も二人の侵入者がバニングス邸内部に入り込んでいた。

「……よし……こつちだ」

赤外線暗視ゴーグルで前方の安全を確認した侵入者の一人が仲間呼びかけ、侵入者の仲間は呼びかけを行った侵入者と共に屋敷の中を進んで行く。

途中で警備員やSPなどに発見され掛けたりもしたが、何とか発見される事はなくアリサが眠っている部屋へと向かって行く。

「……何だ。思ったよりも警備がざるだな」

「ああ、今までの連中が雑魚だったんだろうぜ。所詮噂は噂なんだよ。“竜なんて居る筈が”」

達の命じて、侵入者二人を捕らえていく。

「よし、何時もどおりに警察に連絡しておくんだ」

『了解ッ！！』

S Pリーダーの命令に部下達は即座に応じ、侵入者二人を運んで行く。

それをS Pリーダーは確認すると、溜め息を吐きながら通路の奥へと歩いて行き、アリサの部屋の扉の前に立っている緑色の鱗で全身を覆い、頭に赤いツノを生やして、背中の部分に赤い色の翼を生やした竜を思わせる容姿している二足歩行の生物に声を掛ける。

「今日はこれで終わりだ。お前も休んで良いぞ、ドラコモン」

ドラコモン、世代/成長期、属性/データ種、種族/純血竜型、必殺技/ベビープレス、テイルスマッシュ、ジ・シユルネン
全ての『ドラモンタイプ』デジモンの“祖”に当たるとされる純血竜型デジモン。古より存在するとても古いタイプのデジモンだ。成長期デジモンとは思えないほどの身体能力を誇り、力・俊敏性とも同レベル世代ではトップクラスの实力を誇る。性格は非常に獰猛であるが、ドラコモンが認めた相手のみ従順な一面を見せることがある。翼を持っているが、発育が不十分であるため飛ぶことは出来ない。また、気に入った宝石や貴金属類を食べて摂取してしまう癖が存在している。必殺技は、高温の吐息を相手に吹きかける『ベビープレス』と全身を回転させシッポで打撃を与える『テイルスマッシュ』。そしてドラコモンの全身を覆う鱗のうち一枚は『逆鱗』と呼ばれているウロコに触れて、ドラコモンが怒りのあまり意識を失い、頭部の角を激しく発光させた時だけ、口からビーム弾を無差別に放つ『ジ・シユルネン』だ。

「フワア~~~~・・・漸くか。毎日毎日、飽きない連中だな」

「仕方が在るまい。それだけバニングスを手に入れたいんだ」

「ケツ！子供狙って、デビットさんを脅そうとしている時点で終わってるぜ。全くよ」

SPリーダーの言葉に、ドラコモンはこれ以上に無いほどに不機嫌な声を出した。

ドラコモンこそ、アリサの下に現れたデジタマから生まれたプチモンが成長期に進化したデジモンだった。当初は、アリサの両親は見た事も無い生物であるプチモンを警戒して、アリサから引き離そうとしたのだが、アリサは頑なにプチモンから離れず、結局アリサの両親の方が折れて、プチモンとの生活を了承した。

最もSP達には警戒し続けるように命じたのだが、ある時アリサがとある企業の配下に捕まってしまった時が在った。

その時に偶然にも一緒に居たドラコモンがアリサを窮地から救い、以後アリサ専属のボディガードにドラコモンはなった。今ではSPメンバー達とは他愛無い話をするほどに親しくなっている。

SPメンバーも当初は見た事が無いドラコモンに驚いたが、ドラコモンのおかげで幾度となく窮地を救われたりしたので、ドラコモンを仲間だと彼らも認めている。

「とにかくだ。お前は今日はもう寝ろ。鮫島さんから、明日は庭の手入れを行えと言われているだろう」

「そうだな・・・じゃ、眠らせて貰うぜ」

ドラコモンはそうSPリーダーの言葉に答えると、そのままアリ

サの部屋の中へと入って行く。

その何時ものやり取りに思わずSPメンバーは溜め息を吐いてしまいが、まだ自分の仕事が残っていると思い、他のメンバーに連絡して、自身の仕事へと戻って行った。

翌日の昼頃。頭にフードを被ったドラコモンは専用の手袋をつけて、庭の水撒きや掃き掃除など行っていた。

「フン フン フン ……ア~~~~、やっぱり庭の手入れは落ち着くぜ。やっぱり平穩が一番…」

「アリサキイイイイック」

「……ドゴオオオオオオン！！」

「グホッ！！」

突然の背後からの奇襲をドラコモンは避ける事が出来ず、後頭部に激痛を感じながら倒れ伏した。

それを確認したドラコモンを蹴り飛ばした張本人 - 五歳ぐらいの金髪の少女 - アリサ・バニングス - は怒りを堪えているように肩を動かしながら、地面に目を回しながら倒れ伏しているドラコモンの口を思いっきり両手で広げる。

「……ガバツ！」

「ゲツ……」

「……在った！！」

両手でドラコモンの口を開けながら、口の中を覗いたアリサは目的の物を発見したのか叫び、ドラコモンの口の中に右手を入れて、口の中に在った鍵束を取り出す。

「この〜〜、馬鹿竜！！何度鍵とかを口の中に入れたら駄目って言えば分かるのよ！！」

「キユウ〜〜〜〜・・・」

怒りの叫びを上げているアリサに構わず、ドラコモンは目を回し続ける。

アリサはその姿に更に怒りを覚え、勢いよくドラコモンの尻尾に足を振り下ろす。

「ーードガツ！！」

「ギエエエエエエー！！！！尻尾は！尻尾は止めてくれ！！」

「うるさい！！馬鹿竜！！また、私の部屋の鍵を口の中に入れて！探すの大変だったのよ！！」

「ウツ！・・・そ、それは悪かったけどよお・・・俺の習性で、如何しても光るモノは口の中に入れるのは・・・」

「へえ〜〜・・・だったら、針千本を飲ませましょうか？」

「ヒイツ！！そ、それだけは勘弁してくれ！アリサ！！」

目を細めながら残酷な言葉を告げるアリサに対して、ドラコモン

のかしら」

庭の一角を指しているドラコモンの後ろをアリサは溜め息を吐きながらついでに行く。

そしてドラコモンの目指した先には、純西洋式の庭の風景を壊すように三段型の棚に備えられた“盆栽”が並んでいた。

それこそがドラコモンの数少ない趣味の一つである“盆栽”だった。

「う〜ん？・・・どの枝を切るべきか？」

(何で竜が盆栽を弄っているのよ！？何度見ても可笑しいわ！！)

棚に飾られている盆栽を手バサミを持ちながら見つめているドラコモンの姿に、アリサは内心で数え切れないほどに繰り返した疑問の叫びを上げた。

このドラコモンの趣味だけはアリサは全然理解出来なかった。在る時、アリサとドラコモンが一緒にテレビを見ていた時、偶然にも回した番組に報道されていた盆栽特集を見てから、ドラコモンは盆栽に心が引かれ、盆栽を営むようになったのだ。

小さいながらも世界を作る事をドラコモンは楽しみ、鮫島に頼んで自身が作製した盆栽を大会などに展示したりしている。

「前は、中学生ぐらいの男に一步のところであられたからな。今度は勝って見せるぜ！」

(中学生が盆栽？・・・竜が盆栽をやるよりは可笑しくないけど・・・何？私の常識が間違っているの！？盆栽が今ブームなの！？)

そうアリスは幾度も繰り返した疑問の叫びを内心で上げ続けるが、ドラコモンは構わずに自身の趣味世界に入り込んで行くのだった。

早朝高町家。

高町家の一人娘である高町なのはは、自身のベットの所で、頭の先に角を生やし、毛皮で体を覆いながらも別の生物の毛皮を被った獣を強く抱き締めながら眠っていた。

獣はそれに対して非常に寝苦しい顔をしているが、何時もの事なので何とか耐えながら眠る。

そして朝食の時間が近づいて来ると、食事の良い匂いを嗅いだ獣は体を起こし、急いでなのはを起こし始める。

「なのは。なのは。朝食の時間だよ」

「うーん？」

「ほら、早く起きないと桃子さん達が仕事に行っちゃうから、早く起きよう」

「うー……おはよう……ガブモンX君」

ガブモンX、世代/成長期、属性/データ種、種族/獣型、必殺技/プチファイヤーフック、リトルホーン

ガブモンと言う爬虫類型デジモンが、デジモンを変異させる『X抗体』を取り込み、『デジコア電脳核』に影響が起きた事で、未知の力を引き出した姿。通常のガブモン種と違い、爬虫類型ではなく獣型なのが特徴。必殺技は、口から青い色合いの炎を吐き出す『プチファイヤーフック』に、頭部に生えているツノで相手を攻撃する『リトルホ

ーン』だ。

「いや、Xは付けなくて良いからね。何度も行ったけど」

進化してから幾度と無く繰り返した言葉をガブモンXは呟き、溜め息を吐きながらベットから降りると、手早くなのはの着替えを用意する。

「ほら、皆の仕事を手伝うんだらう？」

「うん」

ガブモンXの差し出して来た服に着替えながらなのはは頷き、ガブモンXは優しげに微笑む。

もうすぐガブモンXが高町家に着てから一年近くになる。当初は幼年期のブニモンで在った為に、ガブモンXは高町家の人々に迷惑をかけたりしてしまっていたが、今では完全に家族として認められ、高町家の人々の手伝いなどをしている。

その殆どは五歳であるなのはの面倒だったりしたが、今は違う。

高町家の大黒柱である高町士郎が、ボディーガードの仕事中大怪我を負ってしまったのだ。

当然ながらその報告に高町家の面々は慌てに慌て、母親である桃子は仕事や士郎の様子の確認。

兄弟である恭也と美由希は桃子の手伝いや学業、そして剣術の鍛錬などで忙しく、家族としての時間が取れなくなってしまっていた。必然的に家に残るのはガブモンXとなのはだけになってしまったが、なのははガブモンXと一緒に居ても寂しい想いに囚われてしまう事が多かった。

それに逸早く気がついたガブモンXは、桃子に進言して、自身となのはも少しは手伝わせて欲しいと頼んだのだ。

当然ながら桃子達としてはなのはに自由で居て貰いたいと思い、ガブモンXの考えを止めさせようとしたが、なのはの現状を細かく伝え、家族なんだから自分やなのはにも何かさせて欲しい力強く進言を繰り返した。

その結果、最終的に桃子達は折れて、ガブモンXとなのはに翠屋の外での売り子を頼む事にしたのだ。

しかし、ガブモンXは見た目は如何みても普通の生物ではない。その事を考えたら、やはり外に出すべきではないと恭也と美由希は告げた。

もちろんそれは家族であるガブモンXの事を思つての言葉だ。何せガブモンXは、一般的な動物ではない。悪い連中から実験動物にされてしまふかもしれないと暗示したのだが、既にその対策をガブモンXは思いついていた。

「着替えたね・・・それじゃ、なのはお願い」

「うん！」

背を見せるガブモンXに向かってなのは頷き、自身の机の上に置いて在ったファスナーの付いたガブモンXの毛皮に似た布を手に持ち、ガブモンXの背中の部分に両面テープで頑丈に貼り付けていく。

「うんしょ、終わったよ」

「これで今日もOK!さあ、行こうか」

「うん！」

ガブモンXの呼びかけになのはは頷き、二人は仲良くリビングに向かつて行く。

既にリビングには桃子、恭也、美由希が席についていてなのはとガブモンXが来るのを待っていた。

その様子になのはとガブモンXは申し訳なさそうな顔をしながら自身の席に着き、桃子が両手を合わせながら告げる。

「いただきます」

『いただきます』

桃子の言葉と共に全員が応じて、そのまま食事を開始すると、美由希がガブモンXに近くに置かれている醤油を示す。

「ガブモン。醤油とって」

「はい、美由希さん」

「母さん。今日の予定は？」

「今日は午前中は翠屋になのはとガブモン君と一緒に行って、午後からは土郎さん所に少し行くわ。それが終わったらまた翠屋ね」

「そうか。なら、俺も美由希も学校が終わったら行くよ」

「お願いね」

恭也の言葉に桃子は優しげな笑みを浮かべながら答え、自身の横で嬉しそうにご飯を食べているなのはに目を向ける。

「なのは。顔にご飯粒がついているわよ」

「にゃっ！ありがとう！お母さん！」

「フフフツ」

桃子はなのはの言葉に嬉しそうな笑い声を出してしまった。

少し前まではこのような風景は高町家には無かった。皆が皆、士郎の事で慌てに慌て、それぞれが余裕も無く動き回っていた。

その結果、なのはが寂しい想いをしている事にも気づけなかった。気づいていたのは、ただ一人で高町家の人々をそれぞれ説得していたガブモンXだけ。

本当は外に出る事さえ危ないのにガブモンXは危険を顧みず、なのはと共に桃子達の手伝いをする道を選んだ。最悪の場合は、高町家から人知れず離れる覚悟をガブモンXは持っている。

自分の身よりも、高町家の人々の暮らしがガブモンXにとっては大切なのだ。

「そう言えばさあ？恭ちゃんの鍛錬が急に落ち着いたけど？一体如何したの？」

「ああ、実は友人から手紙を貰ったんだ。最近の俺の盆栽は荒れているからとな」

「えっ！？恭ちゃんに盆栽の友達が居たの!？」

「ービシツ!！」

「ギャフツ!！」

失礼な物言いをした美由希に、恭也は無言でチョップを食らわせた。

痛みに堪えている美由希に、恭也は憮然としながら声をかける。

「失礼な奴だ。この相手は盆栽の大会の時に熾烈を極めて争った相手でな・・・体が病弱らしく代理人の人が来ていたんだ。中々に侘び寂が分かっている人物で、手紙でのやり取りをしているんだ」

「その人ってお爺さん？」

「それは分かん。何でも大変な病らしくて、外には余り出ないそうだ。だが、あそこまで素晴らしい盆栽を作り上げる相手。きつと素晴らしい精神を持っているんだろう」

『・・・・・・・・』

恭也以外の誰も理解出来ない世界に、全員が思わず箸を止めてしまった。

高町家で、恭也だけが嘗む盆栽。何故盆栽に興味を抱くのかは、ガブモンXにも全く分からなかった。

余人にもデジモンにも分からない領域に居る恭也と件の人物は似た者同士なのかと、その場に居る全員が考えながら食事を急ぐのだった。

第三話 狐と夜の出会い

月村家深夜。

既に月村家の次女であるはずかは付き人であるファリンと共に眠りについていたが、忍、ノエル、インプモンだけは眠らずにリビングで真剣な顔をしながら話し合っていた。

「例の内職関係で見つかった人物の居所が判明したのですが、幾つか不可解な点が見つかりました」

「如何言う事なの？ノエル」

「此方をご覧下さい」

忍の質問にノエルは持っていた資料を差し出し、忍はインプモンに見えるように資料を広げて読み、忍とインプモンは顔を顰める。

「これ・・・本当なの？」

「はい、間違いありません」

「・・・四歳の子供が一人で暮らしていた・・・日本の法律に真っ向から喧嘩売っているわね」

「普通は在りえないよな？こんななの？」

資料に書かれていた内容を、忍とインプモンは不可解としか思えなかった。

日本の法律では子供の一人暮らしなど赦されない。例え保護者や

身元引受人が存在していても、一緒に暮らしていなければ親権は剥奪されてしまう。

月村家のように特殊な事情が在れば話は変わるが、資料に書かれている少女にはコレといった特徴も無い完全な一般人。家系を調べて見ても、何の特徴も発見出来なかったと資料には書かれていた。

月村家の持つ裏の力ならば、大抵の事は調べられる。それを使っても発見出来なかったと言う事は、資料に書かれている少女は完全な一般人以外に在りえないのだ。

「件の内職の仕事を行っているのは、その資料に書かれている少女と“一年前近くから同居している女性”です。此方の女性については何も判明していません。戸籍なども発見出来なかった事から推測して……」

「人間に化けたデジモンの可能性が高いな。デジモンの中には特殊な力を持ったデジモンも居るから」

「……漸く見つけたわ」

ノエルの言葉に続くように告げられたインプモンの推測に、忍は僅かに歓喜に満ちた声を出して、資料に添えられていた少女と共に映っている女性の写真を見つめる。

一年近く掛けて漸く他のデジモンを発見した。このデジモンが、何故地球に存在しない種族であるデジモンが現れたのか知っている可能性は低いが、少なくともインプモンの他にもデジモンが居る事だけは明らかになった。

本来ならばこれは嬉しい事実だった。時間を掛けて調べていた事の成果が漸く出たのだから。

しかし、まさか、一緒に厄介事が来るとは、忍達は思っても見なかった。

「本当ならすぐにも接触したいんだけど」

「危険ですね。少なくとも日本の法律を破って子供を一人暮らしさせるだけの権力者が、背後には存在しています」

「何者なのかしらね？この男・・・“ギル・グレアム”は？」

資料に張られている少女の保護責任者の男の顔写真を、忍は警戒するように見つめていた。

既に件の人物達の背後関係もノエルは調べ終えていた。その結果、少女の背後に居る人物は限りなく怪しい人物だと言う事が判明したのだ。

何せ月村家の権力を使っても、イギリスに住んでいる事以外何も判明出来なかったのだ。これだけの日本の法律を破るような事を行っているのならば、月村家のように裏の力を持った権力者と考えるべき。

しかし、そう言う風な権力者だと判明出来ず、更にはイギリスで仕事を行っている形跡も存在していない。ならどうやってこれほどまでに日本の法律を破れるのかと言う疑問だけが残る。

考えられるとすれば、月村家の力を持ってしても探れないほどの力を持った組織に所属しているぐらいだろう。

「うーん。出来れば接触したいのよね。デジモンの情報を知るのも在るけど、月村重工としては彼女の電子関係に関する能力は絶対に確保しておきたいわ」

「それは同感です。デジモンの力は他の会社には絶対に渡すわけにはいきません」

「そうよね・・・何せ私が頑張って作った防衛プログラムでさえも、簡単に突破しちゃんだもの。アレには本当に自信がなくなっただわ」

忍はそう顔を僅かに俯けながら、自身の横で資料を座りながら見ているインプモンを見つめる。

数ヶ月前ほどになるが、忍達はデジモンの持つ電子干渉能力がどれだけ強力なのかを調べる実験を行ってみた。

その結果、夜の一族の中でも頭脳に特化している忍が三日三晩徹夜して作った防衛プログラムでさえも、簡単に突破してしまうほどの力がデジモンには存在している事がインプモンの手によって判明した。

そして実験結果を見た忍やノエル、そして忍の叔母に当たる綺堂さくらは、何が何でもデジモンを悪意を持つ人間の手に絶対に渡してはならないと理解したのだ。

もしデジモンの電子干渉能力を悪意を持つ人間が手に入れれば、それだけで世界恐慌が起きるだろう。或いは軍事基地などのシステムを掌握され、世界大戦が起きるかもしれない。

冗談抜きで、デジモンの電子干渉能力にはそれだけの力が宿っているのだ。だからこそ、忍達はインプモン以外のデジモンの所在を探し続けていた。

そして漸く見つかったデジモンは、その悪意を持つ人間の近くに居る可能性が高い。

「どうせ監視とかもしているんでしょうね。この男」

「その可能性は高いと思われます・・・ですが、何としても接触しなければいけません」

「そうよね・・・何か良い方法ないかしら？」

「在るぜ」

「やっぱりそんなに簡単には……えっ？」

何でもないように隣でインプモンが呟いた言葉に、思わず忍は声を上げ、ノエルと共にインプモンに顔を向けてみると、インプモンは不敵な笑みを浮かべていた。

「監視している奴らに怪しまれずに、尚且つデジモンだって確証で
きる方法が在るぜ」

「それ本当？」

「へっ！デジモンにはデジモンにしか分からない連絡手段が在るんだよ……その為に少し協力して欲しいんだけど？」

「構わないわよ。本当に監視の目を盗んで、二体目のデジモンに接触出来るのなら、多少の無理は構わないわ……悪意を持つ人間や夜の一族にデジモンは渡せないからね」

「よし。それじゃ説明するぞ」

そしてインプモンは自身が考えた作戦を忍とノエルに告げ、その作戦ならばと忍とノエルは準備を始めるのだった。

数日後。八神家。

朝食を終えたはやてとレナは、先日話し合ったパーティーの準備

を買いに行こうとそれぞれ準備を行っていた。とは言っても、殆ど準備をするのは、はやてだけである。

幾ら人間に化けているとは言え、レナは余り着飾ったりはしない。寧ろ着る服は全て機能重視した動きやすい服装ばかり。はやてとしてはそれは余り気に入らなかったが、レナの意思を尊重して了承している。

最も隙在らばレナに綺麗な服を着せようと画策しているのだが、レナはその事を知らずにははやてが準備を終えるまでに郵便受けを確認していた。

「・・・また来ているか・・・今度は何処の会社だろうか？」

郵便受けの中に入っていた一通の手紙を見たレナは、僅かに溜め息を吐かざるえなかった。

パソコンの内職を始めてから、何度かレナには正社員として働いて欲しいと言う通知が届いていた。

今の情報社会に於いて、レナのパソコン技術が欲しいと言う会社は沢山存在している。特にレナは内職を与えられれば即座に終わらせて、別の内職に手を出してしまうので、結構会社関係では有名になっていた。

それ故にレナの力が欲しいと言う会社からレナに正社員になってくれと言う通知が何度か届いていたが、全て断っていた。レナは自身の力の危険性を理解している。

だからこそ、内職は行っても正社員としては会社には働く気はなかった。戸籍を持っていない事がばれるのも在ったが、一番の理由はやはりはやてが一人になってしまいう事だった。

(幾らギル・グレアムの手から逃れる為とは言え、はやてを一人にするのは駄目だ・・・それに私は正社員として働けば確実に連中が邪魔をしてくる。在る程度の力を持つ会社でなければ、私を入社さ

せるのは無理だろうな)

そうレナは内心で考えながら封筒を開き、中に入っていた手紙の内容を読んで行く。

その様子を一匹の猫が向かいの屋根の上から覗き見ていたが、レナは何の変化も見せず呆れたように溜め息を吐きながら手紙を封筒の中に戻し、家の中に戻って行く。

猫はそれを確認すると、今度は別の場所へと移動して行く。

その様子を家の玄関の小窓から窺っていたレナは険しく顔を歪めて、急いで封筒の中に戻した手紙を引き抜き、手紙の右下端に書かれている『デジ文字』の内容を読み返す。

(・・・『明日の深夜二時に海鳴公園に来い』か・・・如何やら私以外のデジモンに所在地がばれたようだな・・・しかし、これは好機だ！この手紙に書かれている会社の名前は月村重工。この会社ならば連中もおいそれとは手が出せまい)

手紙の相手のデジモンと会う事は、レナにとっては問題は無かった。

何せこうして回りくどい方法で連絡を行って来たと言う事は、既に手紙の相手達はレナとはやての現状を理解していると言う事に他ならない。事情を理解して接触して来るような相手が、戦いを行って来る可能性は低い。

万が一の可能性も考えられるが、少なくともギル・グレアムよりは手紙の先に居るデジモンの方がレナは信用出来た。

(会うべきだな。如何言う意図で私に接触を図って来たかは分からないが、現状を打破出来る力を持った者が接触して来てくれたんだ。この好機は絶対に逃さん！はやての安全の為に必ずものにしてみせる！)

レナはそう決意を固めると、ゆっくりと手紙を自身の服のポケットにしまい、通路の奥の方で呼んでいるはやての下に何時もの笑顔を浮かべながら向かうのだった。

二日後の深夜二時少し前。

インプモンを連れだ忍とノエルは油断なく辺りを見回しながら、手紙を出したデジモンが現れるのを公園の噴水の前で待っていた。

もしかしたら手紙に気づいていない可能性も存在しているが、少なくとも監視を受けて警戒心が強まっているデジモンが、デジ文字で書かれた一文を見逃す可能性は低い。何よりも月村重工の名で出した手紙を無得にする相手は居ないだろう。

そう思いながら忍は件のデジモンが来るのを待っていると、足元に居たインプモンが公園の中に存在している一本の木を睨みつける。

「……おい！！隠れてないで出て来い！！」

「……悪いが、呼び出しに応じても姿を見せる気まではない。どのような用件で呼ばれたのか分からないからな」

『ッ！！』

インプモンの言葉に続くように響いて来た声に、忍とノエルは慌ててインプモンの見ている木を見つめるが、二人の目にはただの木にしか見えなかった。

「……居るの？」

「ああ。上手く隠れて居やがるが、間違いなくデジモンだ」

「そう」

「……話し合いは終わったか？」

「ええ……貴女を呼んだのは他でもないわ。貴女達デジモンが如何して急に現れたのか、その理由を知っている？」

そう忍は最優先で気になっている事を質問した。

忍達がわざわざ監視を受けているデジモンに接触したのは、デジモンが現れた理由を知る為である。

何としてもデジモンが現れた理由を知る為に、忍が真剣な瞳をデジモンが居ると思われる木に向けると、木に隠れているデジモンは何かを考え込むように間を取り、忍の質問に答える。

「……残念だが、私も何故自分がこの世界に現れたのか分からない。気がつけば今住んでいる家の中に居たのでな」

「そう……（すずかと同じね。と言う事はデジモンの出現はデジモン達の意味ではなく、第三者の意味が動いた可能性は高いわね）」

忍は木の中に隠れているデジモンの話で、少なくともデジモン達が現れたのはデジモン達の意味では無い事だけはハッキリと分かった。

それは忍の足元に居たインプモンも同感なのか、何度も頷き、ゆつくりと今度は別の質問を木の中に隠れているデジモンに質問する。

「俺からも質問だけど……何でお前監視何てされてんだよ？デジ

モンの事を危険視している連中が居るのか？」

「それは恐らく違う・・・私達を監視している連中の目的は、私ではなく私と暮らしている子供の方だ」

「如何言う事かしら？」

「・・・家の中に幾つかの盗聴器と思われる類の機械が存在している。私が子供の下に現れる前から仕込まれていたと思われる痕跡を残してな」

「盗聴器ですって！？ちよつと待ちなさいよ！！貴女の所に居る子供って、五歳ぐらいなのよね！？」

「その通りだ」

『・・・・・・・・』

デジモンの答えに忍、ノエル、インプモンは絶句する以外になかった。

監視されている事は分かっていたが、五歳の子供一人で暮らしていた家に盗聴器が仕込まれていたなど、もはや異常を通り越して何らかの執念さえも感じられる。

其処までして子供を一人にさせる理由が在るのかと、忍は資料から読み取った内容を思い出すが、コレと言った異常は思い出せずに首を傾げざるえなかった。

「・・・・・・・・駄目ね。幾ら考えても子供を一人暮らしさせる理由なんて思いつかないわ・・・・・・・・ねえ？何か心当たりは無いかしら」

「……一つだけ、あの家の中で異様な気配を放つ物に心当たりが存在している」

「それ何だよ？」

「鎖が巻かれている本」だ。あの本に私が触れようとした時、外から監視している連中が動揺したように動いた」

「鎖が巻かれた本」？……ツ！！（まさか！？夜の一族の遺産！？）」

ある一つの可能性に行き着いた忍は、思わず全身を震わせてしまった。しかし、同時にそれならば不可解な状況も在りえると納得出来る。

忍達、夜の一族は古くから存在している吸血鬼一族である。それ故に常人よりも遥かに強い力を持っていたり、忍のように頭脳明晰な者も存在している。

そして何よりも重大なのは、嘗ての夜の一族の技術力は、現代の科学技術を遥かに上回っていたと言う事実。それは時共に如何言う訳か廃れてしまい、今では当時の技術は夜の一族自身でも扱えない代物に成り果てていた。

忍はその技術を現代に僅かながらも蘇らせた功労者である。蘇らせた技術は、『自動人形』と呼ばれ、ノエルとファリンこそ忍が必死な思いで蘇らせた『自動人形』である。

最も忍自身は修理しただけで、同じ者を作れといわれれば、無理だとしか忍でも言えないほどの高度な技術でノエルとファリンは作られている。

話は戻すが、嘗ての夜の一族の遺産は途方もなく高度な技術である。それを悪用しようとする者も当然ながら存在している。遺産の扱いを間違えて、辺りに被害を出してしまった事も在るぐらいに、

遺産は危険な代物。

それ故にまともな夜の一族は、自分達が確保した遺産の管理は厳重に行っているが、全ての遺産が回収されている訳ではない。

（偶然が重なって一般人の所に紛れた可能性は充分に考えられるわ。そしてそれを彼女達の所に在る事を知った連中が、この可笑しい現状を作り上げている事も在りえるわね……。だとしたら、彼女達の所に在る遺産は、余程重要な代物……。欲しいわ！！）

忍はフツと手元にやって来たノエルとファリン以外の夜の一族遺産らしき代物に、思わず口元を綻ばせてしまった。

もしかしたら違う可能性も存在しているが、違くとも、此処まで日本の法律に喧嘩を売るような行為を行っている連中が求めている代物。

研究者を自負している忍は、好奇心が心の奥底から溢れに溢れ、思わずマッドの笑みを口元に浮かべ、ノエルとインプモンは即座に忍から一歩離れる。

二人ともこの状態の忍の危険性を理解し、関わりたくないと思うが、忍は構わずに悪そうな笑みをしたまま声を掛ける。

「フフフフツ！・・・ねえ？その本を持って来れるかしら？」

「・・・残念ながら無理だろう。連中の目的が、本当にあの本に在るとすれば、警戒されている私が手に取った瞬間に連中が邪魔をして来る筈だろうからな」

「そう・・・（其処までと言う事は、余程重要過ぎる代物なのね・・・合法的に手に入れて、所有権を確保してやるわ！！）」

忍の頭の中では既にデジモンよりも、告げられた不可思議な本の

方が重要になっていた。

何が何でも手に入れて調べなければ気がすまない。そう言う想いを持った忍の頭の中では目まぐるしく動き回り、合法的に本を手に入れる手段を模索する。

「……ねえ？貴女は現状から脱出したい？」

「当然だ。誰が好き好んで、あんな怪しい連中の下の庇護下に居たいと思う。四六時中監視生活など、ストレスが溜まる以外の何もでもない」

「そう……だったら、手を結ばない？知つての通り私は月村重工にかなりの影響力を持っているわ。相手が誰であろうと、絶対に貴女達の安全を確保するわよ」

「……要求は何だ？」

「話が早くて良いわ。要求は貴女のデジモンとしての電子能力を、月村重工と私の研究の為に使う事と、例の本を調べさせて貰う事よ」

(……悪くはない。私の能力の危険性は相手も理解しているよ
うだな……はやての安全を確保出来るのなら、安いものだ。何よりも連中に表立って反抗出来るチャンスだ。此処は了承すべきだ)

隠れているデジモン・レナはそう内心で呟いた。

交渉はレナの望んでいた通りに進んだ。現状を打破するに十分な力を持った者と手を結ぶ事が出来たのだ。

相手にも何かしらの思惑は在るだろうが、少なくともグラムな
どと言う人間よりは信頼出来る。

交渉の成果に満足しながらレナは隠れている木から飛び降り、自

身の姿を本来の姿である両手に大極図の紋章を付けた防具を身に付けた、背が高いキツネの顔をしている姿を忍達に晒す。

「改めて名乗らせて貰う。私の名前はレナモン」

レナモン、世代ノ成長期、属性ノデータ種、種族ノ獣人型、必殺技ノ狐葉楔こぎようせつ

スピードで相手を翻弄する狐の姿をした獣人型デジモン。どんな状況下でも冷静な判断が出来る。また、タイマーとの関係がその特徴によく反映されるといわれ、幼年期の育て方によっては、他の種族と比べても高い知能を持つようになる。そして成長期の中でも珍しく、変装したり相手の姿をコピーする特殊能力を持っている。必殺技は、鋭い木の葉を敵に投げつけ、相手を切り裂く『狐葉楔こぎようせつ』だ。

木から飛び降りたレナモンは自身の名を忍、ノエル、インプモンに告げた。

その様子に忍達は手をレナモンに差し出しながら、自分達の紹介を始める。

「私は月村忍よ」

「お嬢様の付き人であるノエル・K・エアリヒカイトです」

「俺はインプモンだぜ！」

「忍にノエル、インプモンか・・・忍がインプモンのパートナーなのか？」

「違うぜ。俺のパートナーは忍さんの妹のすずかだぜ」

「そう言えば貴女のパートナーと同年だったわね（これはもしかしたらすずかに友達が出来るかもしれないわね。今回の交渉はかなり良かったわ）」

そう忍は内心で考えながら、ノエル、インプモン、そしてレナモンと共に今後の行動を詳しく取り決めするのだった。

第四話 猫の不幸の始まり

レナモンと忍達との会合を終えてから一週間後。

人間の姿に化けているレナは、忍達との会合で計画した策を開始する為に、朝食を終えると同時にはやてと話し合っていた。

もちろん、グレアムの事と謎の本の事は伏せて、純粹に自分の持つ電子技術を活かしたいと言う話で仕事を持って来たとはやてには説明している。

「良ければの話だが、はやても含めて住み込みで働いても構わないそうだ・・・相手側にもはやてと同一年の子供が居るらしくて・・・とにかく一度私を含めて会いたいそうだ」

「うーん」

レナの説明にはやては悩むような声を出した。

確かにパソコンの事に詳しくないはやてから見ても、レナの電子能力は強力だった。

現に今の話で出た会社以外にも、幾つかの会社から誘いを受けている事はやては知っている。

はやてとしては、レナと一緒に居られる時間が少なくなるのが嫌だったので仕事を断ってくれているレナの事は嬉しかったが、今回は今までと完全に様相が違っていた。

何せ相手側は、五歳であるはやてですら名を知っている大企業の月村重工。更にその会社でもトップに近い場所に居る人物の誘いなのだ。

其処まで上の人間に目を付けられるほどに凄い技術をレナが持っていたとは、流石にはやても驚いたが、少なくとも今回は今までどおり簡単には断る訳にはいかない会社だと言う事だけは理解する。

それ故に如何すれば良いのかとはやては悩んでいると、レナは受けた理由の“表向き”を語り出す。

「悩むのは当然だろうが……実は、はやて……今回の話を受ければ、はやてが学校に通えるかもしれないのだ」

「……えっ？」

レナの突然の発言にはやては思わず啞然としながらレナを見つめ、レナは頷きながら話を再開する。

「先ほども説明したが、住み込みで働く事になるかも知れない家には、はやてと同年齢の子が居る。その子も再来年には学校に通う事になる。そしてその子が通う事になる予定の学校はバリアフリーなどの設備も常備しているらしい。私が住み込みで、いや住み込みでなくとも働けば、私の給料をはやての学校に通う資金として運営してくれる予定だ……如何だ？話だけでも聞いて見ないか」

「……うん……話だけは聞いてみるわ」

「良かった……（これで第一関門は突破した。後は月村家に行つて、はやてが話に乗れば次だ）」

レナはそう何処と無く不安そうにしているはやてと、家の外の塀の上で何時に無く険しい視線を向けている一匹の猫を確認しながら準備を急ぐのだった。

月村家リビング。

その場所で忍とすずかは対面するようにソファーに座っていた。忍の顔は何時に無く真剣さに満ち溢れ、すずかも忍の説明に思わず膝の上に載せていた手を強く握り締める。

「そう言う訳ですずか。貴女は今日来る予定の人が連れて来る子の相手をお願いするわね」

「……うん。良いけど……」

「……不安なのは分かるけど……少しだけ勇気を出して見なさい……まあ、友達が居ない私が言っても説得力は余り無いんだけどね」

不安そうに顔を俯けているすずかに、忍は慰めるように声を掛けたが、すずかは顔を俯げ続ける。

すずかが不安に思うのは自身の出自の事だった。

忍とすずかは吸血鬼の家系である夜の一族である。

故に他人の血液を必要とする事も在る。それ故にすずかは自身の存在がとも不安に思えてならなかった。何時か人を襲ってしまうかも知れない。友達になつてくれた子から、“化物”と呼ばれて拒絶されてしまうかも知れない。

その事実が頭の中に浮かぶだけで、すずかは恐怖と不安に襲われる。それ故に如何しても忍の言葉に心の底から同意する事は出来なかった。

しかし、忍はそれでもレナが連れて来る予定のはやてを、すずかに引き合わせる気だった。

（再来年にはすずかも小学生。大勢の中で過ごす事になるわ。その為にも少しでも相手に心が開けるようになる必要が在る……それに、多分レナモンが連れて来る子は大丈夫。何せデジモンを受け入

れた子なんですからね)

「さすがと違って忍は、はやてが来る事に余り不安は無かった。何せ未知の生物であるデジモンを家族として扱っている子供である。生い立ちが原因かもしれないが、少なくともさすがの正体がばれても拒絶する事は無いだろう。」

「無論、絶対ではないので注意だけはそれとなくするつもりだが、忍には余り不安は無かった。」

「その様に姉妹が今日の予定についてそれぞれ考え込んでいると、フツとさすがは気になった事が在ったので忍に顔を向ける。」

「・・・お姉ちゃん？そう言えばインプモンは如何したの？朝から姿が見えないんだけど？」

「インプモンにはちょっとフェアリンと一緒に庭の掃除をして貰っているわ。如何にも私が設置した機械の調子が悪いみたいで、変な所に穴が出来ていたのよ。だから、インプモンとフェアリンが戻って来るのは昼頃ね」

「そうなんだ」

「・・・さて、そろそろ例の客が来る時間も近いから準備しないかね・・・色々」

「えっ？」

「部屋を出て行く直前に忍がポツリと呟いた言葉にさすがは疑問の声を上げるが、忍は答える事無く苦笑を浮かべながら部屋を出て行った。」

「その様子にさすがは首を傾げるが、すぐに訪れる予定の子供の事」

を思い、思い悩むように顔を俯けるのだった。

月村邸庭内部。

月村邸の庭はそれは広く。初めて訪れた人間は案内されなければ、確実に迷うほどの大きさを持っている。

更には庭の中に林まで存在しているのだから、一般家庭の人々の想像を絶するだろう。

そしてその庭を囲むように当然ながら高い塀も存在している。その塀の一箇所の上に、はやてとレナを監視している猫が存在していた。

猫はレナがはやてに話した事を赦す気は無かった。そんな事をされたら計画が崩れてしまう。

だからこそ、レナの話に出た家に一足先に訪れ、猫達が居る世界でも違法とされる事を行うつもりだった。

(計画の為にも、この家の人間には“仕事の話は無かった”事にしてないといけないわ・・・それにしてもあの生物。やっぱり私達の計画を台無しにするかもしれない不確定要素ね・・・今回の件が終わったら処理すべきね)

そう猫は内心で今後の事を考えながら屋敷の庭に入り込む。

自分達の計画の成功の為には、はやてが孤独でなくてはいけないのだ。最もその計画に何も知らずに関わらせられているはやてからすれば迷惑どころか、怨嗟の声を上げてても可笑しくは無いだろう。

漸く出来た家族さえも奪われるのだから、普通の人間は怒りどころか、憎しみを持ってても可笑しくは無い。

しかし、猫は全く気にしていなかった。

猫にとって最重要なのは自分達の計画。計画に不安要素を招くの

ならば、排除するのも当然だと思っている。それがより大勢の人々を救えるのだから。

そう猫は思っているし、猫の背後に居る者も思っている。しかし、それはあくまで『彼らの世界』の話だと言う事実を猫達は考えていなかった。何も知らない者からすれば、猫達が行っている事は犯罪以外の何者でもない事実を、猫達は考えていなかった。

その報いが少しだけ、猫に降りかかる。

――カチツ！

「ニヤ？」

遠くに見える月村邸に向かって走っていた猫は、突如として足元から響いた機械音に首を傾げる。

そのまま猫は機械音がした前足に目を向けて、足を上げてみると、突如として足元からネットが飛び出して来る。

――バツシュン！！

「ニヤツ！！ニヤニヤニヤツ！！」

突然のネットの出現に猫は驚くが、猫とは思えない身のこなしでネットを避ける。

しかし、避けた方向からもネットが飛び出し、猫を絶対に捕まえると言うように次々と四方からネットが飛び出して来る。

――バツシュン！！バツシュン！！バツシュン！！

「ニヤアアアア――！！！！」

流石に四方からのネット攻撃は避けられなかったのか、猫は雁字搦めにネットに捕らわれてしまう。

しかし、猫はすぐさま冷静に立ち返り、慌てずにネットから逃げ出そうと、体を動かし始める。

「（ウツカリしていたわ。此処はお金持ちの家らしいから、侵入者の罠が在っても可笑しくはないわよね。とは言ってもただの罠。それにこれはチャンスだわ。多分、私が猫の振りして騒げば家の主が来る。そうすれば苦労する事無く屋敷に入れるわね）・・・ニヤアアアツ！！ニヤニヤニヤ！！」

猫は内心で策を決めると、鳴き声を上げながらネットから抜け出そうと暴れる。

その鳴き声が聞こえたのか、メイド服を着ている紫色の髪の女性・すずかの付き人であるファリンが急いで走って来る。

「大変！！猫さんが罠に掛かっています！！」

（上手く言ったわ！これで屋敷・・・の・・・）

ファリンが駆け寄って来る姿を目撃した猫は、内心で歓喜の声を上げようとしたが、すぐさまそれは止まった。

何故ならば猫の目の前には、体を猫に向けて倒れて来るファリンの姿が存在していたのだ。

猫は知らなかった。ファリンがドジっ子で在る事を。慌てて猫に駆け寄ったファリンは、地面に躓いてしまい、そのまま猫を下敷きにするように綺麗にダイビングする。

ーードタン！！

猫が月村家の正体を知っているのならば、何もしない可能性も存在していたが、もし知らなければ絶対に何かの行動を行って来る。そう思った忍は、この一週間で家の外から入り込んで来る侵入者に反応する装置を塀の上などに設置していたのだ。

同時に庭の方にも侵入者用の罠も設置し、ファリンとインプモンに庭の監視を行わせていた。もちろん月村家に元々居る猫達には反応しないように事前に処置も行っていたので、月村家の猫達は安全だった。

そしてレナとはやてを監視していた猫は、まんまと忍が考えた罠には嵌ったのだ。因みにインプモンではなく、ファリンに猫を捕らえる様に命じたのは、出来るだけインプモンの存在を知られない為と、ファリンならば自然に『ドジを踏んで確実にネットに捕まっている猫に向かって転ぶ』 - 猫を気絶させられると言う信頼からだった。

「これで忍お嬢様に褒めて貰えます」

「(やばいな。本当の事言ったら確実に泣くよな・・・黙って於こう)・・・それじゃ、最初の予定通りに毛を何本か抜き取って、獣医のところへ送ろうぜ」

「うーん？良いんでしょうか？だって、この猫、人の言葉を喋ったんですよ？これはやはり…」

「分かってるさ・・・だけど、コイツは黒幕じゃねえ。月村家はあくまで普通の家だと思わせて、油断させるんだってよお。親権を手に入れる為にも、こっちの力を弱く見せるんだとさ」

「流石は忍お嬢様・・・それじゃ、私は猫ちゃんをお姉様に渡して来ますね！」

ファリンはそうインプモンに声を掛けると、急いでノエルの下に抱えている猫を連れて行こうと走り出す。

その様子を眺めていたインプモンは、ファリンがまた転ばないか心配しながらも、猫から抜き取っていた毛を真剣な顔を睨む。

「…………人語を解する猫か…………やな予感がするぜ…………だけど…………すずかや皆に手を出して見ろよ。絶対に赦さねえからな」

インプモンは何となく感じていた。

もうすぐ戦う時が来る事を。それが何と戦う事になるかは分からない。

もしかしたら相手は人間なのかもしれない。しかし、それでもインプモンは戦う覚悟を決めていた。

未知の生物である筈の自身を受け入れてくれた大切な家族の為に、インプモンは戦う決意を決めながら、ゆっくりと悩んでいるすずかが居るであろう部屋へと足を向けるのだった。

第五話 夜天と夜の少女の出会い

月村邸正門。

正門の前にはそれなりに整った服装を着ている車椅子に乗ったはやてと、その車椅子のハンドルを握って、スーツ服を着ているレナが立ち尽くしていた。

今日の面接の為に、二人は恥ずかしくない服装を着て面接の場である月村家に訪れたのだが、その余りにも一般家庭とかけ離れた豪邸と外観に言葉を出す事を忘れてしまい、呆然とはやては正門を眺める。

そのはやてとは違い、人間の一般常識に余り囚われていないレナは、正門に備えられているインターホンに向かって歩き出し、インターホンのボタンを押す。

「……ピンポン!!」

『はい、月村です』

「今日面接に受ける予定の八神レナですが」

『お嬢様より承っています。その場で少しお待ち下さい』

そうインターホンの受け答えをした女性はレナに答えた。それをレナは確認して頷くと、呆然としたままのはやてに顔を向ける。

「はやて。驚くのは当然だが、もうすぐ人が来るぞ」

「ハッ!・・・そ、そうや・・・それにしてもほんまに大きなお家

やな」

レナの言葉で現実に立ち返ったはやては、そう言いながら月村家の中庭を見つめる。

はやてとレナが暮らしている八神家もかなりの大きさだが、月村家には及ばない。それだけの大きさを持っている家の人が、レナを勧誘して来たのだから、改めてはやては今回の話は簡単には断る訳にはいかないと思気込む。

その様子を首を傾げながらレナが見つめていると、正門の扉が開き、メイド服を着た白人の美貌の女性・ノエル・が深々とレナとはやてに向かつてお辞儀する。

「ようこそお越し下さいました、八神レナ様。八神はやて様。この屋敷の主に仕えております。ノエル・K・エーアリヒカイトです」

（メ、メイドさん！？現代社会の日本にほんまもんのメイドさんが居ったん！？）

一分の隙も無いノエルのお辞儀に、はやては戦慄した。

よくテレビなどでやっているメイド喫茶に居るメイドとノエルは一目見て違うと分かる。洗練されたノエルの従者の身のこなしに、はやては言葉も出す事が出来なくなってしまう。

しかし、レナはそんな事は全く気にせずにノエルに八神家に届いた手紙を見せて、ノエルは手早く確認すると、レナの手の中に戻す。

「確認しました。間違いなくお嬢様が差し出した手紙のようです。ご案内いたします」

「分かった。それではお願いします」

レナはノエルの言葉に頷くと、はやてが乗っている車椅子のハンドルを握り、前を歩いているノエルの後を付いて行く。

はやてはその間に月村家の広大な中庭を見回し、その余りの広さに再び啞然としてしまう。

「……レナ……ほんまに……この家の人に呼ばれたん？」

「間違いない。手紙にも月村忍と名前が書かれていた。ノエルと言う女性にも確認して貰ったからな」

「……うゝ……何か私ら場違いに思えるわ」

「気にする事は無いだろう。それに私達の家も普通の家よりは広いのだ。その程度の差だと認識すればいい」

「……無理や……この豪邸と私らの家を同じ認識にするのは無理や」

はやてはそうレナに力の無い声で答えた。

目の前に広がる広大な庭と、その先に見える一目見て豪邸と分かる家を、自分達の住んでいる家と同じ認識にするのは、はやてには到底無理だった。

広がる中庭には何件もはやてとレナが住んでいる家が建てられる。その家の主はどんな人物なのかとはやては不安に思ってしまう。

厳格な人間なのか。はたまた途轍もなく偉そうな人物なのかとはやては考え込む。

最も、もうすぐはやての認識は粉々に砕け散ってしまうのだが、その事をはやては知らずにレナに車椅子を押されて行く。

そしてはやて、レナ、そしてノエルは月村邸の扉に辿り着き、ノエルは無言で扉を開き、レナとはやてと共に屋敷の中に入って行く。

その屋敷の中は、はやてにとって完全な別世界が広がっていた。子供であるはやてにも明らかに高級品だと分かる調度品の数々。何処も彼処も清掃が行き届き、埃一つ全くはやての目には映らない。寧ろ廊下や壁などが輝いているかのようにはやては見えない。極め付けは壁などに掛けられている、はやてには額が全く想像付かない美術品の数々。

(場違いや!! 私ら絶対に来る場所間違ったんや!!)

「……素晴らしい手入れだ。私もはやてと共に家の掃除は行っが、此処までは出来ないな……出来れば、後で掃除の仕方などを詳しく教えて欲しい。はやての健康面も考えれば綺麗な方が良い」

「分かりました。もし今日の面接が上手く言って、この家で一緒に暮らせる事になったらお教えします」

「頼む」

(何で普通に会話が成立してるん!? 私らと完全に別世界の人なんやで!?)

平然と世間話をするようにノエルと会話を行っているレナに向かって内心ではやては叫ぶが、レナとノエルは気にせずに話しながら応接間へと向かって行く。

そして応接間の扉は開かれ、八神家のリビングよりも圧倒的に広い空間にはやての目の前に広がり、ソファーに座る中学生ぐらいの女性・月村忍・が紅茶のカップをテーブルに置きながらはやてとレナに顔を向ける。

「いらっしやい。待っていたわよ」

「始めまして」。この度はお招きありがとうございます。八神レナです。そして此方が私の家族の…」

「や、八神はやてです！きよ、今日はレナと一緒に招きさせていただいて！」

「そんな緊張しないで良いわよ。呼んだのは私なんだしね」

緊張しているはやてに向かって忍は安心させるように声を掛けた。その言葉にはやては想像していた人物像との違いに困惑するが、忍は気にせずにはやてとレナにソファアに座るように促す。

レナはそれに応じ、はやてを車椅子から優しく抱き上げると、忍と対面するようにソファアにはやてと共に座る。

同時に紅茶の準備を行っていたノエルは、レナとはやての前に紅茶のカップを差し出す。

「ありがとう」

「気になさらないで下さい」

レナの感謝の言葉にノエルは微笑を浮かべながら答えると、忍の背後へと移動する。

それを忍は確認すると、用意していた書類をテーブルに置き、レナに真剣な顔を向ける。

「さて、今日呼んだのは手紙に書いてあったとおり、月村重工専属のプログラマーになって欲しいと言う話なんだけどね」

「其方に関しては条件次第だ。見ての通り私の家族であるはやては

足が不自由な身の上だ。私は出来ればはやてを一人にたくは無い」

「それは当然ね。足が不自由な子を一人で家に於いておくには危険よ。何時泥棒何かがやって来るか分からないからね」

「その通りだ」

「とは言っても貴女のプログラマー技術は見逃せないのも事実・・・それで何だけどね？手紙にも書いたとおり、貴女の仕事場は此処にしてその子と一緒に暮らす案も在るわ。或いは家から此処に通って、その子をノエルと、もう一人のメイドの子に任せるって案も在るわね」

「ふむ・・・確かにそれも悪くは無いな・・・如何思う、はやて？」

「えっ？」

突然に声を掛けられたはやては思わず声を上げるが、レナは真剣な瞳をはやてに向ける。

「私としては、月村重工で働くのは悪くないと思っている。家でも説明したとおりには私は、はやてを学校に通わせたいと願っている・・・はやてにはもっと多くの世界を見て欲しい」

「・・・私は・・・」

レナの言葉にははやては悩むように顔を俯かせる。

はやての本心としてはレナとずっと一緒に居たい。しかし、レナの気持ちも充分に分かる。

此処ではやてが忍の提案を断れば、レナも同意し、今回の話を断るだろう。そうすればレナとずっと一緒に居られる。

だが、同時に今のままではいけないとはやては思う。レナと一緒にこのまま過ごしているだけではいけない。それでは何も進まないとはやては思い、決意を固めるように頷くと、顔を上げて忍に顔を向ける。

「……お話は受けます……ですけど、いきなり住み込みと言うのは急過ぎると思います……だから、レナと一緒に此処に通う方の話でいいですよ？」

「構わないわよ。私も流石に住み込みって言うのは急過ぎると思っ
てたしね」

忍はそう優しげに微笑みながらはやてに答え、はやては安堵の息を吐く。

レナはそれを確認するとはやてを車椅子に戻し、忍はその間にノエルから新たに渡された書類をテーブルに置く。

「さて、それじゃ仕事は受けると言う事に決まった事だし、細かい契約の話しましょう。それではやてちゃんだったわね？」

「は、はい！」

「緊張しなく良いわよ。後普通に話しても構わないよ。これから殆ど毎日顔を会わせる事になるでしょうしね。話は戻すけど、これから細かくて難しい話になるから、私の妹と会ってくれないかしら。先に挨拶して於いた方が良いでしょう？」

「……分かりましたわ……それじゃレナ」

「ああ、分かっている。私も契約の話が終わったらすぐに行く。先に行っていてくれ」

「では、はやて様を連れて行きます」

「お願いする」

ノエルの言葉にレナは頭を下げながら頼み、ノエルはお辞儀すると車椅子を押しながらはやてと共に部屋を出て行く。

そして扉が完全に閉まるのを忍とレナは確認すると、互いにソファーに安堵の息を吐きながら座り込み、忍は悪戯が成功したように笑みを浮かべる。

「役者ね、レナモン。全然演技には見えなかったわよ」

「当然だ。私の言葉には嘘は無い。本当にはやてには学校に通って欲しいからな」

忍の言葉にレナは真剣にはやてとノエルが出て行った扉を見つめながら答えた。

先ほどの忍との会話で告げた言葉はレナの心の底からの本心だった。あのグレアムが作り上げた箱庭のような家だけではなく、はやてにはもっと多くの世界を見て欲しいとレナは思っている。

それこそが今のはやてには必要。その為ならば、はやてに多少の嘘もついてしまう事もレナは決めていた。最もそれだけではなく、出来れば裏の話は、はやてには余り知られたくないと言う思いも在った。

その事は忍も分かっているのか、真剣な顔をレナに向けて、月村家に現れた猫の事を話し出す。

「貴女の予想どおり、例の猫が家に現れたわ。最も現れたのは“一匹”だけだったけどね」

「やはりか……如何やらよほど連中は、はやてを孤独にしたいらしい」

「そのようね。貴女の話聞いてから、更に詳しくグレアムを調べただけど……これが何にも出て来ないのよね」

「何にもか？」

「ええ、何にもよ……仕事は愚か家族構成も幼少の頃だけしか判明しない。現在何をしているのかも不明。八神家の通帳に記されているお金の出所も不明……更には居所さえも不明の状況よ」

「よくそんな人間がはやての保護者になれたものだな」

忍のグレアムについての情報に、レナは心の底から不愉快そうに眉を顰めた。

如何考えてもグレアムがはやての保護者になっているのは可笑しいとしか言えなかった。普通ならばそんな怪しい人間がはやての保護者になれる筈はない。

日本の法律から考えても、今のグレアムにははやての保護者を名乗る資格はない。にも関わらずグレアムは、はやての保護者の立場に在る。レナにはそれは絶対に認められない。

（何が目的なのか知らんが、碌でも無い事だったら赦さん！！はやてには絶対に手を出させん！！）

「・・・少し落ち着いた方が良いわよ。あの子が今の貴女の顔を見たら、怖がるかもしれないからね」

「・・・そうだな・・・ありがとう」

忍の言葉に冷静さを取り戻したレナは、忍に感謝の言葉を告げ、忍は照れくさそうに笑いながら声を出す。

「別に気にしないでね。それで次に相手はどんな手で来ると思う？」

「契約が終わった後では、此処に手を出しても遅いから、次は私に何かしらの行動して来るだろう」

「やっぱりそれが可能性は高いわね。貴女の立場を利用して来るでしょうけど・・・もう遅いわね」

「ああ、連中がその行動をした瞬間に、全てが其方の手に納まる。例の本も・・・はやての親権も」

「その時が楽しみね・・・（早く私の手の中に入れてたいわ。遺産がもしれない本。どんな力を持っているのか、楽しみね）」

忍は近い内に入るかもしれない物を思っ、心の底から楽しそうに・属に言うマッドな・笑みを思わず口元に浮かべてしまい、レナの中に僅かな不安が生まれるたのだった。

その頃、ノエルに車椅子を押されながらはやては忍の妹であるすずかが居る部屋へと向かっていた。

これから会う子が同年代とは言え、ずっとレナと共に八神家で過ごしていたはやてからすれば、初めてに近い同年代の子供との出会いである。

どんな人物なのかとはやては悩み、思わずノエルに質問するのだが、ノエルは優しいな笑みを口元に浮かべる。

「大丈夫ですよ。すずかお嬢様は優しいお方ですか。きっとはやて様とお友達になられるでしょう」

「すずかちゃんって言うんですか？」

「ええ、月村すずかお嬢様です。もうすぐ着きますので、お待ち下さい」

そうノエルは、はやてに告げると、とある部屋の前で車椅子を止めて扉をノックする。

「……コンコンコン……！」

「すずかお嬢様。例のお客様が参られました」

「……入って良いよ」

「では失礼します」

「……ガチャーン……！」

すずかの許しを貰ったノエルは扉を開けた。

それと共にノエルは車椅子を押してはやてを部屋の中に入れて、はやては部屋の中に居る一人の少女を見つめる。

その少女は近くに居た猫に伸ばしていた手を戻すと、ゆっくりとはやてに顔を向けて不安そうにしながらもはやてに自己紹介する。

「始めまして……私月村すずかです」

「わ、私は八神はやて言います」

「はやてちゃんだね……可愛い名前だね」

「そ、それ言うたら、月村さんも綺麗な響きやんか」

「……ありがとう」

はやての言葉にすずかはぎこちないながらも礼を告げ、はやてもぎこちないながら笑みを浮かべる。

これが生涯の親友と呼び合える六人の少女の内に二人、後に管理世界で畏怖と畏敬の念を込められて呼ばれる『夜天の名を持つ日輪姫』と『暴食の魔王の夜姫』の出会いだった。

第六話 晝く異世界の法の闇

夕暮れが近い時間帯。

自分達の家である八神家に帰る道程を嬉しそうに顔を綻ばせているはやてと、その様子を微笑ましげに見ながら車椅子を押しているレナが歩いていった。

「それでな。すずかちゃんも私と同じ図書館に行く事が在るんやて」

「それならば次に行く時は待ち合わせするのも悪くはないな。互いにどんな本を読むのかは話したのか？」

「うん！私も読んどる本が在ったから、二人で意見を言いあったりしたので」

「そうか・・・（良かった。如何やら二人の邂逅は上手く行ったようだな）」

レナは、はやての様子に嬉しげに微笑んだ。

忍との今後の取り決めを完全に決め合った後に忍と共にレナがはやてとすずかの下に訪れて見ると、はやてとすずかは互いに自身が読んでいる本について話し合っていた。何処と無くぎこちないところは在ったが、それでもはやてもすずかも歩み寄ろうとしている。其処に忍が入り込んでレナも含めた四人でゲームを興じたりしてこの時間まで遊んでいたのだ。

本当は夕食もご馳走になると言う話が在ったが、今日は兼ねてより計画していたはやてとレナのパーティーの日で在った為に辞退した。

その代わりに明日からは夕食の終わりまで月村家に居る予定で、

その後ノエルに八神家まで送って貰う手筈に決まった。

「明日からあの家でレナは仕事なんやなあ」

「ああ、とは言っても忍が出して来る仕事が終わってからは自由だからな・・・その時間帯はノエルに掃除の仕方でも習うから、はやては彼女と遊んでいてくれ」

「え、レナも一緒に遊ぼう」

「私は仕事に行くのだぞ、はやて。忍が赦さなければ、遊ぶ事など出来ん」

「そか・・・仕事頑張つてな、レナ」

「ああ、はやての学校の為にも頑張らせて貰うさ・・・さて、急いで帰って今日のパーティーを楽しもう」

「そやった！急いで帰らなあかったんや！レナ！」

「了解した」

はやての言葉にレナは頷くと、車椅子を押して八神家への道程を急ぐ。

その姿は仲良さげで、道を行き来する人々が微笑ましげに見つめるのだった。

場所は変わって月村家。

夕食まで間、すずかは夕食の準備をしているノエルとファリンを除いた二人、忍とインプモンに今日の出来事を何処か嬉しげに語っていた。

忍とインプモンはその様子を微笑ましげに見つめる。多少の不安は在ったが、少なくともはやてとのファーストコンタクトは成功したと言っている。

流石にインプモンの事は明かしてはいないようだが、それでも互いの趣味の内の一つである読書に関しては盛り上がったようだ。

「良かったわね、すずか」

「うん！今日はやてちゃんの会えて本当に嬉しかった・・・インプモンの事は流石に話せなかったけど」

「気にすんなよ、すずか。いきなり俺の事を話したら相手も驚くだろうからよ。そう言うのはすずかが話して良いと思っただけで良いぜ」

「そうよ。何事も段階が大事だからね。それに一般人にインプモンの存在は驚かれるでしょうから、ゆっくりと行きなさい」

「うん！」

インプモンと忍の言葉にすずかは頷き、今日はやてと仲良く読みあつた絵本を読み直し始める。

忍とインプモンはその様子を嬉しげに見つめながら、互いに今日の出会いは上手く行ったと目配せをする。

本来ならばデジモンの存在を知っているはやてならば、インプモンの事を話しても大丈夫だろう。

しかし、それは、はやてとすずかが告げ合う事。ただ同じデジモンと言う種族をパートナーにしているからと言う友情よりも、互い

に本音を言い合える親友として友情の方が良いと忍、インプモン、そしてレナは判断している。

故にインプモンには悪いが当分の間は、はやてが来る時は月村家の庭に存在している林の中に隠れていて貰う事になっている。

三人にはそのままノエルが呼びに来るまで談笑をし、夕食を取り終わるとずかばフアリンと共に寝室へと向かい、明日を思いながら眠りにつく。

そして忍達はさすがが完全に眠りにつくくと、リビングで今日月村家に侵入した猫について話し合いを始める。

「例の猫から採取した毛を調べたところ、やはり普通の猫とは違うデータが出たそうです」

「そう……ならそのデータをさくらに送って頂戴……今回の件は私達だけの問題じゃなくなるでしょうから、味方は多い方が良いわ」

「了解しました……それと例の猫を連れて行った動物病院から連絡が届きました」

そうノエルは告げると、足元に置いて在った袋の中から小型のビデオカメラを取り出し、忍へと差し出す。

忍はそれを操作し、インプモンにも見えるように画面を再生させると、頑丈なケージの中に月村家で捕まえた猫の映像が映し出される。

「……………やっぱり普通の猫じゃねえな」

「ええ、起きた瞬間に驚いた様子を見せたわね」

画面に映っている猫の様子に、インプモンと忍は険しい声を出しながら画面を見つめる。

そのまま画面は夜の時間帯へと向かって行き、このまま今日は終わるのだろうと忍とインプモンは考えるが、次の瞬間にそれは驚愕に変わった。

何故ならば画面に映っていた猫の足元に光り輝く陣が出現し、陣が消え去ると共に猫の姿は完全に消失したのだ。

「……何なの今の？」

「……こんなデジモンでも出来ねえぞ」

目の前の画面に広がった光景に忍とインプモンは信じられないと言つ風に声を出しながら、もう一度巻き戻して再生するが、やはり先ほどと同様に猫が陣の中に消え去る映像が広がるだけだった。

「その映像が流れた時ですが、動物病院内部の監視カメラが全て誤作動を起こしたようです。その映像が映っていたのはお嬢様のご命令で仕掛けて置いた隠しカメラだけでした」

「……つまり、この猫は完全に裏側の存在のようね……（厄介ごとだとは思っていたけど、これは予想以上の厄介ごとのようね。少なくともこんな力の話は聞いた事は無いわよ）」

ノエルの報告とビデオカメラに映った映像に、忍は内心で険しい声を出すしかなかった。

何せ月村家は裏でもかなりの力を持った一族である。その当主として中学生ながらも忍は裏に存在する力ついでには在る程度は知っている。

その忍をもつてしても猫が使った力については予測する事が出来なかった。一番近いのはHGS患者の超能力一つであるテレポートだが、それには不可思議な陣の出現などない筈。

「・・・ノエル。この力についての情報を出来るだけ探索して。もしこの力が海鳴市で悪用でもされたら不味いわ」

裏社会にも縄張りと言うものが存在している。

月村家にはその中でも海鳴を中心に土地を治めている家でもある。そして治める以上、その中で組織が絡んでいるかもしれない裏の存在に対しては、それ相応の対処をしなければならぬ。

「万が一、それをせずに好き勝手に組織が関わっているかもしれない裏の存在が動いた場合、一気に海鳴市に他の敵対組織が大挙として押し寄せて月村が治める土地を手に入れようとするだろう。」

裏社会とはそう言う場所なのだ。故にその事が分かっている忍は、今回の件の危険性を誰よりも理解していた。

「良いわね。この月村が治める土地で裏の人間が関わっているかもしれない連中が好き勝手しようとしているわ。これは月村に喧嘩を売って来たも当然の事態よ。絶対にこのギル・グレアムは潰すわ。私達の安息の為に可及的速やかに今回の件を片付けるのよ。ノエル！」

「はい」

「家の防備を強化するわ！それと在る程度実力が在って裏に関わっている探偵を雇って、徹底的にギル・グレアムの過去を洗いなさい！関わっているかもしれない家なども全部ね！月村に喧嘩を売った意味を教えるわ！」

「了解しました。すぐに準備に行います」

「頼んだわよ・・・それとインプモン！」

「応ッ！！」

「貴方は、はやてが居る間以外は出来るだけすずかと一緒に居て護衛をして頂戴。敵は四歳の子供を一人暮らしさせる人間よ。すずかを人質にする可能性も充分に在るわ。貴方とファリンが一緒に居れば大抵の連中には負けないわ！」

「了解だぜ！すずかは絶対に俺が護つて見せるぜ！」

忍の言葉にインプモンは頷き、ノエルと共に忍の命令を遂行する為に動き出す。

それを忍は確認すると、手早くグレアムからはやての親権を奪い取る策を練り始めるのだった。

とある巨大な建造物内部。

その建造物は地球が未だに到達する事が出来ない空間 - 次元空間に浮かんでいた。その建造物こそ、次元世界の法を名乗っている一大組織 - 時空管理局本局だった。

そして忍達が敵と断定した男 - ギル・グレアムは時空管理局で顧問官を勤めるほどの人間であり、管理局内部の人間からは『時空管理局歴戦の勇士』と呼ばれるほどの人間だった。

最も忍達からすれば存在さえも知りもしない組織の重要な役職に位置する人間が、何の許可も無く治める土地で動かれたのだから、ますますギル・グレアムを敵視する理由にしかないのだから。

そんな事は知らずにグラムは自身の執務室で、はやてとレナを監視していた自身の双子の猫の使い魔の片割れ、ロングヘアの猫耳を頭に生やした女性・リーゼアリアの報告に顔を険しくせざるえなかった。

「ゴメンなさい、父様！私が油断したばかりにこんな事態に！」

「いや、元はと言えば私があこの生物の同居を認めたこそが原因だ。気にすることは無い、アリア」

自身に向かつて深々と頭を下げて来るアリアを落ち着かせるようにグラムは声を掛けたが、その顔は険しく歪みきっていた。

何せ自分達の考えた計画が崩れてしまいかもしれないほどの危機なのだ。慌てざるえないだろう。

本来ならばはやては在る時まで一人でいて貰わなければいけないかった。しかし、一年前にレナがはやての下に訪れた時からはやては一人ではなくなった。

それは、はやての心情を思ってからこそそのグラムの判断だったが、今回の月村家での仕事の件は確実にグラム達の計画に多大な影響を及ぼす事態になる。故にアリアは今回の月村家の仕事の件を無かった事にする為に、月村家の人間からレナとはやてに関する記憶を消去する予定だった。

しかし、予期せぬファリンの邪魔によりアリアが記憶操作を実行する前に契約は完全に成立してしまった。そうなればもはや完全に手遅れである。

何せ月村家ではなく、今回の契約は月村重工と言う巨大な会社が関わった話の契約である。幾らなんでもそんな会社に記憶操作など行ったら、大変な事態を地球に引き起こす事になりかねない。

幾ら管理局が管理外世界と認定している地球であろうと、はやての件を管理局内部の者にばれずに済む保障は何処にも無い。

万が一、はやての事がばれればグレアムは管理局内部から責められるかもしれない。

それどころからグレアムが最も恐れているのは、はやてが死んでしまう事だった。はやてが死んだりすれば、折角考えた計画が完全に台無しになってしまう。

それだけは何としても避けなければいけないのだが、事態は全く予想だになかったイレギュラーの手により崩壊への道筋を辿り始めた。

「・・・とにかく最終的にはアレさえ完成すれば計画には問題は無いが」

「だけど、それは守護騎士だけが家族だった場合よ、父様。状況を完全に予測出来る人間が近くにいたら、確実に守護騎士達の動きを止めようとするわよ」

アリアの横で話を聞いていたアリアの姉妹であるショートカットの頭に猫耳を生やした女性・リーゼロツテは自身の意見を言い、グレアムはその通りだと言うように深く頷く。

はやてを一人暮らしさせる理由の一つには、何れはやての下に現れる守護騎士の存在が関わっていた。

守護騎士はどんな事態でも必ずアレを完成させる為に動く。其処にはやての“命の危機”まで関わってくれば、それは確実にグレアム達は思っていた。

しかし、其処ではやて以外に守護騎士達の行いを客観的に見れる人物が居た場合、確実にアレの完成に影響が出て来る。それでアレの完成が間に合わなかった場合は、グレアム達の計画は潰れてしまう。

故にグレアム達は日本の法律に逆らい、半ば違法の行為を行ってまではやてを一人暮らしさせていたのだ。もしこの事実をレナが知

った日には怒り狂うどころの騒ぎではないだろう。

レナからすれば、どんな理由が在ろうとはやてを悲しませる事を許さない。

それがはやて自身に問題が在るのならば話は変わるが、少なくともグレアム達の考える計画に偶然にもはやてが巻き込まれただけならば、赦す事は絶対でない。

グレアム達は知らず知らずの内に自分達の計画を最も破壊する可能性を秘めた生物の逆鱗に触れる直前になっていたのだ。

その事が全く分かっていないグレアム、アリア、ロツテは今後を如何すれば良いのかと悩んでいると、ロツテが意見を出す。

「やっぱり例の生物を亡き者にするしかないと思うんだけど」

「それは無理よ、ロツテ。既にあの生物は地球での立場を確立させている。此処で始末でもしたら、通う筈の会社が不審に思うわ」

「・・・そうだったわね。そうなったら地球での父様の事も調べられるかもしれないわ」

「・・・それだ」

『えっ?』

突如として声を上げたグレアムにアリアとロツテが疑問の声を上げて顔を向けてみると、グレアムは神妙な顔をして自身の考えた策を説明し始める。

「あの生物には地球での立場は本来ならば無い。あの世界の電子関係が優秀だからこそ、雇おうとしている会社も生物の問題点を無視した。ならば、会社に通えないほどに立場が悪くなれば、雇おうと

していた場所から来ないでくれと言われるだろう」

「でも父様。そんな事したら、八神はやての方に影響が」

「はやて君には悪いがあこの生物に関する記憶は消去する。その後にはやて君の家の周りに住人に掛けている認識障害をより強化するんだ。今回の件のような事が二度と無いようにはやて君の監視も今後更に徹底する」

『なるほど』

グレアムの考えた策にアリアとロツテは納得したように頷いた。

確かにグレアムの策が成功すれば確実にレナを八神家から排除出来、かつよりはやての一人暮らしが進む。当人であるはやての気持ちは完全に無視しているが、グレアム達の計画を確実にさせるには充分な策だ。

「所詮は管理外世界の一般会社だ。魔法に関する手立てなど打てはしないし、更には、契約が無くなればはやて君の事など忘れるだろう。私はこれから休暇の手続きを取る。休暇になり次第に動くから、アリアとロツテは監視を強化して於いてくれ」

「分かったわ、父様」

「必ず計画は成功させないといけないからね。悲劇をもうこれ以上繰り返させない為と、クライド君のような犠牲を出さない為に」

「・・・その通りだ、ロツテ・・・二度と“闇の書”による悲劇を繰り返さない為に」

グレアムはそう決意に満ちた声を出してアリアとロツテに今後の動きの指示を出し始める。

しかし、グレアム達は知らなかった。彼らが管理外世界と呼ぶ地球。

その地球では管理局でさえも知らない力が存在し、その力の一端にグレアム達は知らずに喧嘩を売ってしまった事を。

そして後に管理局の存在さえも脅かすほどの力を秘めた生物の逆鱗に触れる直前で在る事を、グレアム達は知らずに自分達の計画を完成させる為に動き始めるのだった。

第七話 夜が作り上げし糸に絡められる異世界の英雄

月村家でレナが仕事をしようになつてから二週間が経過していた。

その間は例の八神家を監視している猫も現れる事無く、レナとはやては月村家の人々と親交を深めていた。

未だインプモンの事やレナの正体をすずかとはやては語る事は出来ていないが、それを除けば二人は自身の考えを話し合える友達になつていた。序に言えば忍ともはやては仲が良かった。

流石に学校がある忍とは会える時間は限られているが、それでも三人で一緒にゲームを興じたりする光景は月村家ではよく見られ、フアリンやノエル、後は与えられる電子関係の仕事が在る程度終わつて忍の許可を貰つたレナも遊んだりしている。

何時かはその光景にインプモンも加えたいとすずかは最近では思っているのだが、やはり拒絶されてしまう恐怖が何処かで存在し、はやてにはインプモンの事を話す勇気が持てなかった。

そんな風に月村家でそれぞれが日々を過ごしていた在る日、訪れると共にはやてが忍とリビングでとある用件について話をしていた。

「うーん・・・それじゃ、明日は来れないと言う訳ね」

「・・・はい・・・明日は急にグラムおじさんが家に訪ねに来るんですわ・・・だから、明日はレナの仕事もお休みにして欲しいんです」

「随分と急な話ね・・・（漸く姿を見せる訳ね）」

はやての説明に忍は悩むような顔をしながらも、内心では漸く動き出したグラムに対して笑みを浮かべていた。

忍達は当初はすぐにグラム達は動き出すと思っていたが、今日までの二週間、表立ってはグラム達は動いていなかった。最も裏では下級の警察関係者に接触している情報を既に忍は掴んでいる。相手は如何やらレナを社会的な立場で責める気のようなだが、既に無駄である。

月村家の裏の力を使って、既にレナの戸籍は作成されている上に、海鳴の警察上層部にもグラムの件を伝えて在るのだ。

伝えた時の警察上層部の激怒は恐ろしかったと忍は何処か遠い目で思い出してしまう。

何せ公然と裏の力を使って法律を無視していたのだから、在る程度人々を守ると言う意思を持っている者からすれば、グラムの行動は完全に逆鱗に触れる行動でしかない。

と言うか馬鹿にされているとしか思えなかった彼らは、即座にグラムを逮捕しようと言う動きを見せたが、忍が持ち込んだ資料から一筋縄では確かにいかない相手だと理解し、忍が提案した策で行動してくれる事を了承して貰っている。

既に海鳴にはグラムが全く知らないところで、完全な包囲網が形成されてしまっているのだ。

それこそ一度飛び込んだら最後、絶対に一般人ならば逃れる事が出来ない包囲網が。

最も例の猫が使った不可思議な力についてだけは未だに判明する事が出来ず、忍の叔母であるさくらも知らない力について警戒心を強めている状況だった。

そんな事がはやての知らないところで行われているとも知らず、はやては忍からの許可が貰えるのかと思いつながら不安そうに見つめていると、忍は安心させるように笑みを浮かべる。

「良いわよ。流石に保護者のおじさんが来るんじゃ、来れないものね」

「ありがとうございます……グレアムおじさんには前からレナを紹介したかったんですわ。私の大切な家族やって」

（ウウウツ！何て良い子なの！？一人暮らしを無理やりさせられていたのにこの健気さ！……何か裏で動いている私が凄く汚れているような気がして来るわね）

忍は思わずはやての発言に自身の行いを顧みながらも、はやての健気さに感動していた。

普通の子供が保護者に放置などされたら、それこそ保護者に対して憎しみと怒りの感情を持つだろう。或いは何処か歪んだ子供が出て来ってしまう。

しかし、はやての様子には全く憎しみや怒りなど見えなかった。寧ろ一年以上音沙汰が殆どなかった相手と会える喜びに満ち溢れているような気配さえも見える。

まさか、その相手が自身とレナを引き離そうとしているとは微塵もはやては考える事無く、許可を貰えた喜びに溢れながら部屋の居る部屋に行く為に車椅子を操作して扉に向かうと、扉が突如として開き、ノエルとファリンと同じデザインの“メイド服”を着たレナが入って来る。

「……何度見てもその姿は似合っとするでレナ」

「……ありがとうございますと言うべきなのか困る言葉だな、はやて」

親指を立てて褒めて来るはやてに、レナは僅かに不機嫌な声で答えた。

幾ら人間の姿に変身しているとは言え、レナはメイド服のような服は余り好んではない。

逆に動き易い服装などの方が好きなのだが、忍とはやてが共謀し

て一週間前から月村家内でメイド服を着て仕事をするように義務付けられている。ひとえにはやてのレナに可愛い服を着させたいと言う願いを忍が叶えたのだ。

因みに変身しているレナの容姿は、はやてが自身が成長した時の理想像であり、十三年後ぐらいに理想が破れた事を知って絶望する未来が待つていたりする。

「ハア〜・・・すずかが部屋で待つている。早く行った方が良いぞ」

「そやった！それじゃ、忍さん！失礼するわ！」

「私もレナに仕事を与え終わった後に行くからね」

車椅子を操作して急いで部屋を出て行ったはやての背に、忍は右手を軽く振るいながら声を掛けた。

その声にはやては僅かに顔を向けて頷くと、部屋を出て行きすずかの下へと急いで向かって行く。

レナはその様子を確認すると扉を閉めて、自身が穿いていたスカートの下に隠れていたインプモンを外に出す。

「ーゴソゴソッ！！」

「プハア〜！苦しかったぜ」

「と言うか如何言うところに隠れているのよ？インプモン」

「いや、俺も止めておけつて言ったんだけどよ」

「一々窓を開けてインプモンを入れるより、此方の方が手早いからな。この服も思ったよりも役に立つ」

「・・・そう言う服じゃないんだけどね」

一般の女性ならば必ず気にする事に無頓着なレナに、忍は思わず溜め息を吐いてしまいが、今は気にしている場合ではないと思いなおして真剣な顔をレナとインプモンに向ける。

「それで、はやてのところにはどうやってグレアムが来るって話は届いたの？」

「手紙でだ」

「手紙ね・・・外国からの手紙なら国際便とかだけど、そう言う消印は在ったの？」

「一応イギリスの消印が押されていた。信用は全く出来ないがな」

「でしょうね。イギリスにはあの男が暮らしているような家は見つからなかったんですもの。絶対に何か裏が在るでしょうね」

そう忍は言いながらテーブルに載っていたカップを手に持ち、険しい顔をしながら紅茶を飲んだ。

手紙が届くような場所に居るならば、既にグレアムの所在地を忍達は見つける事が出来た筈。しかし、グレアムの居所は月村家の裏の力を使った懸命な捜索でも発見する事が出来なかった。

それが意味する事はグレアムはイギリスなどには住んでいないと言ふ事実だった。

アレから更に詳しくグレアムの経歴を調べたのだが、在る一定の時期以降からグレアムが姿を消した事が判明したのだ。詳しい調査結果は未だ出ていないが、少なくともグレアムが一般人では無い事

だけは判明している。

その事を聞き終えているレナは、新たに忍のコップに紅茶を注ぎながら声を掛ける。

「確か行き倒れの男を助けてから行方が分からないらしいな」

「ええそうよ・・・当時ギル・グレラムの住んでいた場所に住んでいた人からの情報だけだね」

「何でこんなに可笑しい奴がイギリスの人間だって認められているんだよ？」

「知らないわよ。だけど、イギリスの税務署関係からは要注意人物に指定されているわよ。なんせ税金の長期未納者らしいから」

「ハア？何だそれ？どっかの悪い組織の奴でも、怪しまれない為に税金は払っているんじゃないのか？」

「普通はね。多分明日来る事を知ったら、確実にイギリスの税務署関係者が飛んで来るわよ。随分と滞納しているようだし」

「なるほど」

忍の言葉にレナは納得したように頷いた。

徐々にでは在るが、グレラムの地球での包囲網は完成に近づいていた。現れればその瞬間にグレラムは地球での立場を失うだろう。

それほどまでにグレラムは月村家に完全に敵として見られていた。どんな理由が在ってもグレラムのした行為は、月村家に大勢の敵を招き寄せる呼び水の行為。

幾らばれずに済んだとは言え、グレラムの行動事態が月村家を敵

に回すに十分な行動だった。

「何も考えずに勝手に裏の力をこの地で揮った報いを味合わせて上げるわ。覚悟していなさいよ、ギル・グレアム」

(やはり彼女の提案を受けたのは正解だった)

(コワー！忍が凄く怖いぜ！！終わったなこりゃ・・・ご愁傷様だぜ)

気炎を吐いている忍の様子をレナは頼もしげに見つめ、インプモンは恐怖に震えながら月村家を敵に回したグレアムに対して思わず同情するのだった。

そして翌日。

月村家に敵として認定され、はやての保護者の位置に居る人物・ギル・グレアムはスーツ姿を着て八神家の前に立っていた。

その顔には僅かな苦渋が浮かんでいた。何故ならばこれから自身は、漸く家族を得た少女からその家族を奪う行動をしなければならぬ。しかし、更なる悲劇を生み出さない為には必要な犠牲。

全てが終わった後は甘んじてどんな罰でもグレアムは受ける覚悟だった。

今日までの間に海鳴の警察にも手を回してある。後はグレアムが入って合図を示せばレナは現地の警察に捕まる手筈だった。

その瞬間を猫形態になつて向かい側の屋根の上に居るアリアに撮らせて、マスコミに送って社会的にレナを潰す。そうすれば月村家と接点が無くなったはやては必然的に一人になり、その隙に月村家とはやて自身の記憶を消去する計画だった。

全ては“闇の書の永久封印”の為と思いながらグレアムが八神家のインターホンに手を伸ばした瞬間。通行人の一人が素早くグレアムの横に移動して、グレアムの手首に手錠を掛ける。

「……ガチャーン!!」

「……ハッ?」

「ギル・グレアム氏ですね?海鳴警察署の者ですが、貴方を不法入国罪で逮捕させて貰います」

「なっ!?何を言っているんだ!?!」

手錠を掛けると共に警察手帳を差し出して来た男性に、グレアムは叫ぶが、男性は気にする事無く手錠をグレアムの両手に掛ける。

「話は署で伺わせて貰います。貴方には色々可笑しい点があるようですからね」

「待ってくれ!!私は不法入国などしていない!!パスポートも持っているぞ!?!」

「偽造の可能性も十分に考えられます。とにかく署に来て貰います。話は全て署で聞きますので」

男性はそうグレアムに言葉を告げると暴れるグレアムを無理やり、用意していたパトカーに向かって連れて行き始める。

その思ったよりも力強い男性にグレアムは混乱を極めていた。本来ならば警察が連れて行くはずなのは八神家内部に居るレナの筈。しかし、警察が連れて行くのはグレアムだった。

このままでは自分の計画が崩れてしまおうと思ったグレアムは、男性の手を振り払い、八神家を示す。

「私よりもあの家を調べてみる！！あの家には住んでいる少女以外の身元不明な人間が居るぞ！！」

「――ガチャン！！」

「身元不明とは失礼な物言いだな」

グレアムが叫び終わると同時に八神家の扉が開き、不機嫌な様子をしたレナと、グレアムの発言に顔を俯けている車椅子に乗ったはやてが存在していた。

「此方は貴様が来ると言うので二人で色々と準備をしていたのだぞ？仕事まで今日は休んだのに・・それに私の事は以前からははやてが手紙を送って知らせていたはずだぞ。一年前にな」

「グツ！！その後には調べたが！君のような人間は居ない事が明らかになったのだ！」

「フム、私はその一年の間ずっとはやての下に居たが、この家には私とはやて以外の誰も住んでいなかったぞ」

「追求すべき事が増えたな。子供の育児放棄の件も追求させて貰う」

「ッ！！」

男性の発言にグレアムは目を見開いてレナを見つめた。

漸くこの一連の出来事が仕組まれていた事だとグレアムは理解し

た。そしてその犯人は紛れも無く目の前に立っているレナ。

何故立場も何も無い者が警察などと言う法の人間を動かせたのかはグレアムには分からないが、このままでは不味いと言う事だけは理解した。

何せ自身の発言はレナだけは無く、その背後に居るはやても聞いていた筈。家族として思っているレナを警察に差し出そうとした人間を、幾らはやても信用する事は出来ない。

その証拠にはやては先ほどから無言で顔を俯かせて肩を震わせている。

レナはその様子を察して、はやてを安心させるように抱き締めると、レナの背に警察官が声を掛ける。

「八神レナさん。今日のところはこの男の件があるので戻りますが、後日貴方にも詳しい事情聴取を聞きますので」

「分かってている・・・だが、今は下がって欲しい・・・はやてが・・・泣いている」

「・・・分かりました」

レナの言葉に男性は僅かに顔を伏せて、パトカーから出て来た別の警官と共にグレアムをパトカーに入れて、警察署へと連行して行く。

それを確認したレナは扉を閉めると、涙を流しているはやてを安心させるように強く抱き締める。

「大丈夫だ・・・私は何処にも行かない。ずっとはやてと共に居る」

「・・・グスツ・・・レナ・・・ヒック」

「大丈夫だから。もうはやてが一人になる事は無い。私も、すずかも、忍、ノエル、ファリンも居る。もうはやてが一人になる事は絶対にない。だから、安心してくれ」

家族を失う恐怖と一人に戻ってしまう恐怖に震えているはやてに、レナは安心させるように声を掛けながら抱き締める。

幾ら強くてもはやては五歳の子供でしかない。五歳の子供が漸く出来た家族を奪われる恐怖に耐えられる筈は無いのだ。

レナは恐怖に震えて涙を流しているはやてを目にし、改めて誓う。

(この小さき背を如何なる脅威からも護ろう。二度とはやてに悲しみの涙は流させん！)

そうレナは内心で誓いながら、遠からず訪れる戦いの時への意欲を燃やすのだった。

第八話 狐と闇に訪れる戦いの時

海鳴市警察署。

今、その場所の取調室では八神家前で逮捕されたグレアムと、そのグレアムを逮捕した警官の男性と、別のもう一人の男性が顔を付き合わせていた。

「先ず貴様が所持していたパスポートは、確かに本物に良く似てるようだ」

「本物なのだから当然。だから、早く私を解放してくれ！そしてはやて君の傍に居る不審者を捕まえるのが君達の仕事だろう！」

「彼女については後日だ・・・それよりも何処でこんな精巧な偽造パスポートを作ったのか教えて欲しいのだが？」

「だから本物だと言って!？」

「偽物だ。何せアンタの姿は何処の飛行場の入国審査に映っていなかったんだよ」

「ッ!！」

警官の言葉にグレアムは言葉を出す事が出来なかった。

確かにグレアムが持っているパスポートは限りなく本物に近い代物である。それこそ、そこ等辺で出回っている偽造パスポートなど紙屑に見えるほどに。

しかし、警官の言葉どおりグレアムは飛行機や船などで日本には訪れていない。管理局から赦された休暇期間内で終わらせようと転

移魔法で海鳴に訪れたのだ。

故にどれだけ本物に近いパスポートを所持していても、入国審査を受けていない時点でグレアムは不法入国者以外に無いのだ。

警官は完全に黙ってしまったグレアムに険しい視線を向け続け、更に言葉を続ける。

「第一だ。貴様はもうあの子には会う事は無い。一年間も放って於いたアンタに、あの子の親権などと与えられる筈が無いだろうか？」

「グウツ！！」

「重ねて言えばだ。もうアンタは犯罪者として逮捕されたんだ。弁護士を呼んでも構わないが、こっちには証拠品が山ほど出ているんだ。少なくとも数日は此処に居て貰うぞ」

(不味い！そんな事になったら、はやて君の存在がばれてしまう！)

グレアムは警官の言葉に内心で慌てに慌てた。

何せすぐに事態を終わらせるつもりで、グレアムは短期間しか休暇を取っていないのだ。休暇を過ぎて戻って来なければ、確実に管理局員が訪れる。そうなればグレアムが地球の法的組織に捕まった事が知られ、そうなった原因も調べられてしまう。

そうなれば計画どころではなく、グレアムは管理局の地位を失うだろう。幾ら管理外世界では在る程度の管理外世界の法の無視を管理局が赦しているとは言え、今回の件は確実にマスコミに報道される。グレアムの故郷が地球だとかは関係なく、今回の件が管理局に明るみになったらグレアムは管理局での地位を無くすどころか、悪くすれば懲戒免職だろう。

自身の地位が無くなれば、闇の書の永久封印なども不可能になってしまう。

その事実グレームは険しく顔を歪めるが、警官は構わずに事情聴取を続けようとすると、取調室の扉がノックされる。

「コンコンコン！」

「うん？一体誰だ？」

扉をノックする音にグレームと対面するように座っていた警官は訝しげな声を出し、もう一人の警官も疑問に満ち溢れた顔をしながら扉に手を伸ばすと、同僚の男性警官が入って来る。

「ガチャッ！」

「事情聴取の様子は如何だ？」

「全然進んでいない。この男は如何やら自分のやっている事が分かっていないらしくてな……ん？おい、お前？何で化粧の匂い何てさせてん……」

「ドーン！」

『ガッ！！』

同僚の筈の警官から匂って来た化粧水の匂いに質問しようとした瞬間、質問された警官が素早く拳を二人の警官の鳩尾に叩き込み、警官二人を気絶させた。

同時にその警官の正体が分かっているグレームは安堵の息を思わず吐くと、警官の体が魔法陣に包まれ、魔法陣が消え去った後には頭に猫耳を生やしたショートカットの女性・リーゼロッテが立っていた。

「父様！大丈夫！」

「ああ、ロツテ。私は大丈夫だ」

「良かったわ。早くこの場所から逃げましょう。今回の事が管理局にばれたら計画どころの騒ぎじゃなくなってしまうわ」

「分かっている。それでアリアは？」

「あの生物を殺しに向かったわ。このままだと計画どころか、父様の地球での身分も危ないわ。とにかくあの生物の排除だけはして於かないと」

「確かに・・・まさか、地球の法組織まで動かせる力を手に入れていたとは思っても見なかった。せめて排除だけはして於かなければなるまい」

「ええ、そのとおり。アリアが抹殺に成功すれば、少なくとも計画の不安要素だけは消す事が出来るわ」

「うむ、はやて君を一人暮らしに出来ない状況には成ってしまったが、不安要素だけは消去せねば・・・ロツテ、一先ずは此処を脱出するぞ」

「はい」

グレアムの言葉にロツテは頷き、二人の足元に魔法陣が出現すると、グレアムとロツテはそのまま取調室から転移した。

そして二人が転移してから数分後、気絶したと思われていた警官二人が恐る恐る立ち上がり、自分達の着ている服を上げて、拳の形に凹んでいる防弾チョッキに冷や汗を流して顔を見合わせる。

「・・・おいおい、何者だ？あの女は？部長から言われた通りに防弾チョッキを着ていなかったら、肋骨が粉碎していたぞ？」

「知りませんよ・・・でも、先輩？如何してこんな回りくどい方法をしたんですか？」

「ソイツについては秘密だ。若造のお前が知るには早いんだよ。さて、部長のところに行って報告するぞ。ギル・グレアムを指名手配にするように伝えないとな」

そう年配の警官は自身の後輩の声をかけながら、意味深な視線を取調室に備えられていた鏡に向けると、そのまま自分達の上司に事の次第を伝えに向かうのだった。

グレアムが警察署から脱出してから約一時間後。

レナとはやては月村家に訪れていた。訪れた当初、目を赤く腫らしているはやてに入り口にまで迎えに訪れたすずかは驚いたが、今は事情を聞いて憤慨していた。

既にすずかにとってはやては大切な友達である。はやてがどれだけレナとの日々を大切に、喜んでいたのかは聞き知っている。

自身も忍、ノエル、ファリン、そしてインプモンから引き離されたらどれだけ悲しむか分からない。それ故にすずかは本気でグレアムに対して怒りを表していた。

何時も大人しいすずかの怒りには流石に忍、ノエル、ファリンも

面食らったが、すぐさま冷静に立ち返り、レナに抱きついて離れないはやてに声を掛ける。

「安心して頂戴はやて。レナは、はやての前から消えないわよ。こんな事も在ろうかとレナの戸籍は作成して於いたから」

『えっ？』

何でもないように忍の発言に、はやてだけではなくすすかも思わず声を上げるが、忍は気にせず紅茶を飲みながら話を続ける。

「子供の貴女達には分からないでしょうけど、何事にも仕事をするなら身分を証明する者が必要なのよ。で、正式にレナを雇う時に戸籍やその他の必要な書類も作成して於いたの。変わりに他の会社には絶対に行かないって条件を付けたんだけどね。そう言うわけで警察にレナが出頭しても簡単な事情聴取を受けて終わり。説明の時も自分は記憶喪失だったとか言ってはぐらかせば終わるわよ。(と言うか、既に警察にはそう言う風に説明して在るものね)」

そう忍は内心で考えながら驚いているはやてとすすかの顔を見回す。

流石にデジモンの事を警察には話す訳にはいかないの、事前に八神家にはやてと共に住んでいるレナは、記憶喪失の女性だとグレームを捕まえる策を警察に説明する時に話して於いたのだ。

警察もその事には訝しんだが、五歳の少女と記憶喪失の女性ならば確かに一年も自分達の状況が可笑しいと気づかなくてもしょうがない納得した。

最もそれだけではなく、今回の事件が明るみになったのは月村家のおかげで在る事も在ったのでレナの件に関しては目を瞑る事にしたのだ。

「さて、話は変わるけどね・・・このままだと確かにはやてとレナは離れ離れになる可能性が高いわね」

「ッ!」

「――ギョッ!」

「忍。はやてを怖がらせないでくれ」

「アッ!ゴメンね。言葉が足りなかったわ」

レナに強く抱きついて再び震え始めたはやてに忍は頭を下げながら謝った。

それでもはやてはレナが居なくなるのが怖いのか強く抱きつき続け、忍が困ったように頬を掻いていると、もう一人、忍の言葉の意味が分からなかったさすが忍に声を掛ける。

「お姉ちゃん?如何してレナさんとはやてちゃんが離れるの?だつて二人は一緒に暮らしていたんでしょ?」

「今まではグレアムって奴がはやての保護責任者だったからね。一応はそのおかげで二人は暮らせていたのよ。だけど今回の件で確実にはやての親権、子供の貴女達には分からないでしょうけど、とにかくはやてとレナが一緒に暮らせていた物が移動される事は間違いないのよ」

「それって・・・」

「ええ、はやては少なくとも住んでいた家で暮らすのは無理になる

でしょうし、此処にも来れなくなるわね」

「そんな!？」

忍の発言にすずかは悲鳴のような声を上げた。

漸く何の隔たりも無く話せるようになって来たのに、そのはやてと会えなくなるかもしれない。

初めての友達と離れ離れになってしまう事にすずかは悲しげに顔を歪め、はやてはもう号泣寸前だった。はやてからすれば大切な者が一気に全て無くなるかもしれないのだから当然だろう。

その様子にレナは険しい視線を忍に向けると、忍は安心させるようにはやてとすずかの頭をそれぞれ撫でる。

「大丈夫よ。私と言うか月村家が手を回して上げるからね。折角レナの電子技術が手に入ったのに、手放す事なんて絶対にしないから、私に任せ頂戴!！」

「……忍お嬢様……お電話が掛かって来ています」

「分かったわ」

険しい声で電話の事を伝えて来たノエルに、忍も険しい声で答えるとノエルと共に部屋を出て行く。

その様子にはやてとすずかが顔を見合わせていると、レナとファリンがそれぞれ安心させるように声を掛けて来る。

「大丈夫だ、はやて。忍ならば何とかしてくれるだろう」

「そうですよ!忍お嬢様は絶対にはやてちゃんとすずかちゃんを悲しませたりしません!ファリンもお二人と一緒に居られるように頑

張りますからね！」

「……ありがとうな、レナ」

「ファリンもありがとね」

慰めるように声を掛けて来てくれた二人に、はやてとすずかはぎこちないながらも礼を告げた。

その言葉にレナとファリンが笑みを浮かべた次の瞬間、レナは顔をこれ以上に無いほど険しくして、はやてをファリンの腕の中に入れる。

「ファリン……はやてを頼む」

「ーバツ!!」

「フェツ!?!」

急にはやてを渡された事にファリンは間の抜けた声を上げるが、渡されたはやてを落とさないように大切そうに抱える。

その突然のレナの動きにはやてとすずかは思わず呆然としてしまうが、レナは構う事無く窓の外の方に居る殺気を放っている猫を睨みつける。

「……如何やら相手もご立腹のようだな」

「……レナ?どないしたん?」

「……すまない、はやて。お前自身が話すまでは隠して於くつもりだったが、如何やらそんな悠長な事を相手は赦す気は無いようだ」

「えっ？・・・レナさん？」

レナの意味深な発言にすずかは首を傾げながら質問するが、レナは答える事無く窓ガラスを開けて、外に身を出す。

同時に着ている自身の服に手を伸ばしながら、自身を睨み続けている猫に険しい視線を向ける。

「・・・どのような用件で来たのかは知らんが、即刻此処から立ち去れ。此処は私有地だ」

レナはそう言いながら油断無く猫を睨み続けていると、突如として周囲の空間が色褪せて、一切の音が聞こえなくなった。ただけではなく、レナの背後の屋敷の中に居たはやて、すずか、ファリンの姿も消え去っていた。

「ッ！！・・・これは？・・・一体何だ？」

突然に変わり果てた空間にレナは一瞬驚愕するが、すぐさま冷静に戻って変わった辺りに景色を見回す。

色褪せた事と人が居なくなつた事以外は、先ほどまで居た場所と変わっては居ない。だが、少なくとも先ほどまで居た世界とは全く違う事だけはハッキリと理解出来た。

(恐らく忍が言っていた連中の特殊な力が関係しているのだろう・・・不味いな。はやてが泣いているかもしれない)

目の前に広がる特殊な現象にも、レナは全く慌てていなかった。

レナ自身特殊な生物であるデジモンで在る事も在つたが、それよりも自身と急に離れてしまつて泣いているかもしれないはやての事

が心配だったからだ。

一刻も早くこの空間から脱出する為に目の前の猫を倒さなければならぬと顔を向けてみると、其処には頭に猫耳を生やしたロングヘアの女性・リーゼアリアが立っていた。

「・・・その姿が貴様の真の姿か？」

「・・・関係ないでしょう。特にこれから死ぬ奴にわね!!」

「ーブーン!!」

「チィッ!!」

アリアが叫ぶと同時に発生した複数の魔力弾に、レナは舌打ちを行いながら横に飛ぶが、構わずにアリアは魔力弾をレナに向かって放つ。

「食らいなさい!!」

「悪いが食らう気は無いな!!」

「ーバサッ!!」

レナは叫ぶと同時に向かって来ている魔力弾に向かって服を脱ぎ捨て、自身の本当の姿である大極凶の文様が描かれた防具を両手に装着した五頭身のキツネ型デジモン・レナモンの姿に戻った。

同時に脱ぎ捨てた服は魔力弾に貫かれて穴だらけになってしまいが、レナモンは構わずに両手を構えて鋭い木の葉を魔力弾に向かって撃ち出す。

「狐葉楔ッ！！」

トトトトトトトトトトトトオオン！！

「何！？」

レナモンが放った狐葉楔に、魔力弾を相殺されたアリアは驚愕の声を上げた。

その隙をレナモンは逃す事無く、素早くアリアの前に移動して右手を手刀の形にして、鋭い速さでアリアに向かって振り抜く。

「爪斬ッ！！」

「クッ！！」

「ガキイイイーン！！」

振り抜かれたレナモンの爪斬を、アリアは急いで張った障壁で防いだ。

レナモンはそれを慌てる事無く、僅かに空中にジャンプして自身の攻撃を防いだ障壁に向かって連続で超高速回転しながら回し蹴りを叩き込む。

「狐回蹴ッ！！」

「バキイイーン！！」

「なっ！？ばッ！ガッ！」

レナモンの連続回し蹴り - 狐回蹴 - に障壁を撃ち破られた事に驚

愕していたアリアに、レナモンの蹴りが叩き込まれ、アリアはそのまま吹き飛ばされた。

それをレナモンは確認すると素早く、自身の身を月村家の庭に存在している林の中に向かって走らせる。

幾ら攻撃を加えられたとは言え、それはあくまでアリアが油断しておかげに過ぎない。

今までレナモンはアリア達に監視されている時は素早い動きも、特殊な攻撃を放った事は無い。それ故に監視していながらも知らなかったレナモンの実力のアリアは戸惑ってしまい、レナモンは攻撃を加える事が出来たのだ。

しかし、もうレナモンの実力を知られてしまった今、アリアはもうレナモンには不覚を見せる事は無いだろう。故にレナモンは僅かな勝利の可能性の為に林へと走って行く。

後を追いかけて来ているアリアの気配に険しく顔を歪めながら。

一方その頃、レナモンが取り込まれた結界の外。

突然のレナモンの消失に大泣きしているはやてを何とか宥めようとしているずかとファリンに、警察からの電話で状況が分かった忍とノエルがリビングに存在していた。

「全く！まさか、こんなにも早く実力行使で来るなんて！？」

「忍お嬢様。もしやですが、ギル・グレアムは何らかの組織に所属しているのでしょうか、今回ののはやて様の件は個人で動いていたのでは無いでしょうか？」

「・・・そうかもしれないわ・・・だから、こんなに早く動いたいたんだわ。自分達が犯罪者として追われる前に、せめてレナだけは

排除するつもりなんでしょっね」

『ッ！！』

忍とノエルの会話を聞いていたはやてとすずかは目を驚愕に見開いた。

特にはやてはレナが死んでしまうかもしれない現状に、もはや絶望感さえも湧き上がって来た。

(いやや！レナが居なくなるなんて絶対に嫌や！！何処に居るん、レナ！！)

湧き上がって来る絶望感から逃れようと、はやては月村家の庭を大粒の涙が溜まっている目で見回すが、レナの姿は何処にも存在していなかった。

その事実にはやての心が絶望感に押し潰されそうになった瞬間、すずかが安心させるようにはやての両腕を握り締める。

「ーギョッ！

「大丈夫だよ、はやてちゃん！レナさんは絶対にはやてちゃんを悲しませたりしないよ！だって、何時もはやてちゃんの事を見守ってくれていたんだから！」

「すずかちゃん……そうや……すずかちゃんの言うとおりや……レナは……帰って来るんや！！」

「ーードクン！！」

『えっ？』

はやてが決意の声を上げた瞬間、はやてとすずかが握り合っていた両手の中で鼓動が発せられた。

その突然の不可思議な鼓動にはやてとすずかが疑問の声を上げながら、恐る恐るはやての両手を広げて見ると、はやての手の中には蒼い色合いの縁取りが存在している機械が存在していた。

同時にはやての膝辺りに、複数の不可思議な生物らしきモノが描かれた四枚のカードと全体が黒く塗り潰された六枚のカードらしき物がバサバサと落下する。

「バサバサッ！！」

「ウワッ！！何や！？この機械にカードみたいの！？」

「如何したの！？」

何かを慌てているはやてに気がついた忍はノエルと共に急いで駆け寄るが、はやてと、そして横に居たすずかとファリンも答える事が出来ずに、はやての下に出現した十枚のカードと不可思議な機械に困惑の視線を向けるしかなかった。

そのはやてが持つ見た事が無い機械とカードに忍は首を傾げるが、フツとはやての膝の上に載ったままの一枚のカード。

炎の体と翼を持った生物が描かれたカードの名らしきモノが描かれた部分に目を向け、驚愕に目を見開きながらそのカードを手に取り

「ちょっと見せて貰うわよ！……バードラモン……これって……デジモンの名前？」

「えっ！？如何して忍さんがデジモンの事知ってるんですか！？」

「そ、それはね・・・」

はやての質問に忍は思わず顔を逸らしてしまう。

何せはやてのインプモンの事を話すのは、さすがが話す時だと決めていたのだ。

その為にすずかも何故はやてがデジモンの存在を知っているのかと疑問に満ちた視線を忍に向けるが、忍はどう説明したものかと顔を逸らしながら悩んでいると、レナが出て行った窓ガラスの方から男性の声が響いて来る。

「八神はやてを渡して貰おうか？」

『ッ!!』

聞こえて来た声に忍達が顔を向けてみると、仮面を被った男性らしき人物が立っていた。

「貴様らと問答する気は無い。八神はやてを渡せば命は助けるぞ？」

「・・・悪いけど、家は脅しに屈するような柔な家じゃないよ！それに妹の友達を渡すわけ無いでしょう！ノエル！ファリン！！全力でお持て成ししなさい！！」

「了解しました!!」

「了解です!!」

「……ビュン!!」

「何ッ!？」

ノエルとファリンの一般人どころか、並みの魔導師から見ても明らかに逸脱した速さに仮面の男は驚愕した。

何せ如何見てもノエルとファリンは華奢な女性にしか見えない。それ故に仮面の男は二人の速さに驚愕してしまい、動きが完全に止まってしまった。

その隙をノエルとファリンは逃す事無くスカートを穿いている事など構わずに、同時に蹴りを仮面の男に叩き込む。

『フッ!！』

「ーードゴオオオン!！」

「グフッ!！」

ノエルとファリンの蹴りを食らった仮面の男は口から息を吐き出してしまった。

表現するならばトラックに猛スピードで激突された衝撃。その一撃を同時に受けた仮面の男は、一気に広い月村家に庭へと吹き飛ばんで行った。

そのままノエルとファリンは仮面の男を追撃するように走り、ノエルは自身の穿いているスカートの中から装着用のブレードを取り出し、腕に装着しながらファリンに声を掛ける。

「ファリン! 貴女は遠距離から攻撃しなさい!! 相手は未知の敵です!」

「はい! お姉さま! すぐかちゃんとはやてちゃんを離れ離れにしようなんて悪い人は! お仕置きではすませません!」

「……ガチャーン！」

「馬鹿なツ！？質量兵器だと！？」

ファリンが叫ぶと共にノエルと同様にスカートの中から取り出したマシンガンに、もはや仮面の男は混乱と驚愕の極致に立たされていた。

幾ら金持ちの家とは言え、質量兵器の所持などは本来は赦されない。しかし、仮面の男は知らない事だが、月村家は完全にその例外に当て嵌まる家だった。敵が多い月村家は、こう言う非常事態の為にちゃんと許可を貰って在るのだ。

更に今回は裏で組織が関わっているかもしれないグレラム相手だった為に、強力な銃器を忍達は揃えていた。

そして質量兵器を手足のようには扱うノエルとファリンの息の合ったコンビネーションに、仮面の男は翻弄されて徐々に後方へと押しやられて行く。

忍はその様子に満足げに頷きながら、啞然とノエルとファリンの戦いぶりを見ているはやてに声を掛ける。

「今の内に避難するわよ。向こうの狙いは、如何もはやてみたいだからね！すずかも来なさい！」

「う、うん！」

はやてが乗っている車椅子のハンドルを握っている姉の言葉に、すずかは困惑しながら頷き、家の奥へと逃げようとする。

しかし、その直前に忍とすずかの体を突如として出現した光の輪が拘束されてしまい、二人は床に倒れ伏してしまう。

「……ガシイイーン!!」

「ッ!!こ、これは!?!」

「う、動けない!」

「すずかちゃん!忍さん!!」

光の輪に拘束されて身動きが取れなくなってしまっている忍とすずかにむかつてはやてが叫んだ。

何とか光の輪の拘束から逃れようと忍とすずかは、常人から考えられないほどの力を発揮するが、光の輪は壊れる事無く二人を拘束し続ける。

はやてはその様子に何とかしなげればと思い、右手に持っている不思議な機械に目を向けてみると、何かを通すような隙間が横面に存在している事に気がつく。

「……もしかして、このカードを此処に通すんやるか?」

左手に持っている十枚のカードの束と、右手に持つ機械の隙間をはやては見回す。

このカードで何かが変わるとは、はやてにはとても思えない。しかし、カードと機械には何らかの意味が在ると思つて、はやては『サングルウモン』と名が刻まれている、獯猛そうな狼のような生物が描かれているカードを隙間に通そうとする。

しかし、その直前に床に倒れ伏していたすずかは、はやての背後に忍び寄るように現れた“二人目”の仮面の男の姿を目撃する。

(ッ!!いけない!!このままじゃはやてちゃんが!だけど!)

すずかは自身の体を拘束している光の輪に目を向けた。

普通の子供では考えられない力を持っているすずかでさえもビクともせずに拘束を続けている。

このままでは、はやてが連れ去られてしまうと思ったすずかは、如何すれば現状からはやてを助け出せるのかと悩んでいると、フツとこの場に居ないもう一人の家族の姿が思い浮かんで来る。

「（もしかしたら林に居たままかもしれないけど・・・きっと来てくれる！！）・インプモーン！！はやてちゃんを！！私の大切な友達を助けて！！」

「ッ！！」

「すずかちゃん！！」

すずかの心からの叫びを聞いた二人目の仮面の男の動きは思わず止まってしまい、すずかの言葉の意味が分かったはやては目を見開きながらすずかに目を向けた瞬間、リビングの扉が蹴破られるように開き、二人目の仮面の男に向かって飛び掛かる黒い影をはやては目撃する。

「ナイト・オブ・ファイアーツ！！」

「ーゴオオオオオー！！！！」

「クッ！！」

「ービュン！！」

黒い影が現れると同時に放たれた炎・ナイト・オブ・ファイアー

第九話 カードスラッシュ&進化の時 前編（前書き）

本作のデジヴァイス設定

形はテイマーズに出たデジヴァイスの形をしている。

デジモンの全てのデータが登録されているので、戦闘の時に敵対したデジモンの情報を知る事が出来る。

またパートナーと離れても通信が出来る上に、パートナーデジモンが見ているものも、映像として見る事が可能。

更にはデジモンデータが内包されている特殊なカードを横の部分に存在している隙間に通す・スラッシュ・する事で、一時的に別のデジモン必殺技&特殊能力が使用可能になる。

その上、カードに記録されているデジモンの身体部分&武器も一時的に使用可能。

例

『バードラモン』のカード使用 必殺技の『メテオウイング』か、バードラモンの翼を生やせる。

『ムシャモン』のカード使用 必殺技の『斬り捨て御免』は、武器で在る『白鳥丸』を装備出来る。

名称は、テイマーズと同じ、『デューアーク』

第九話 カードスラッシュ&進化の時 前編

現実世界でも戦いが繰り広げられ始めた頃。

結界に取り込まれたレナモンは、自身が戦っているリーゼアリアからの追撃を避けるように林の中に身を隠しながら移動していた。

「ービュン!!ビュン!!」

「クツ!!ちょこまかと!!」

林の木々を踏みながら素早く移動しているレナモンの姿に、アリアは空中を飛びながら叫んだ。

月村家の林の中にレナモンが入ってからと言うもの、アリアはレナモンを捉えるのが難しくなっていた。何せレナモンは殆ど止まる事無く素早い動きで林を移動している為に、次々と木々が揺らされ、アリアはその揺らされた木々を避けて飛ばなければいけなかった。

林から抜けようと高く飛び上がれば、その瞬間に林の中に身を隠しているレナモンが、自身の必殺技である狐葉楔こようせつを放ち、アリアを林の中から逃げ出せないように動く。

完全に自分が不利な場所に誘い込まれてしまったとアリアは悔しげに、自身の周りで揺れ動く木々を睨みつける。

(この生物!今までずっと実力を隠していたのね!!だけど、私を舐めるのはこれ以上は赦さないわ!)

(仕掛けて来るか・・・相手は未知数の力を使って来る敵・・・勝てる可能性は低いな)

憤慨しているアリアと違って、レナモンには余裕など全く無かつ

た。

上手く自身が有利な場所へと誘い込めたとは言え、自力の差ではアリアの方に圧倒的に分が在る。

更には自身の最大の必殺技である狐葉楔こようせつは、アリアが纏っている特殊な防護服のようなモノのせいで全くダメージを与える事が出来ない。

幾らでも打つ手が在るアリアと違って、既にレナモンが打てる手は全て切ってしまったているのだ。

もしも林から脱出でもされれば、確実にレナモンは敗北してしまう。それが分かっているレナモンは、何とかアリアを追いつめる手は無いのかと木々を揺らしながら考え続ける。

一方現実世界では、最初に現れた仮面の男とノエルとファリンが戦い、後からは現れた機械的な杖を握っている仮面の男はインプモンと戦い続けていた。

「食らいやがれ！！ナイト・オブ・ファイアー！！」

「フツ！！」

インプモンが右手から撃ち出したナイト・オブ・ファイアーを、仮面の男は障壁を発生させて防いだ。

意図も簡単に自身の必殺技が防がれた事にインプモンは悔しげな顔を一瞬浮かべるが、すぐさま左手に発生させていた氷を撃ち出す。

「なら、こつちだ！！ナイト・オブ・ブリザードツ！！」

「……ガキイイイン！！」

「ムッ!! 氷結能力!!」

インプモンの放ったナイト・オブ・ブリザードに、障壁が凍りつかされるのを目撃した仮面の男は僅かに驚いた声を上げた。

炎と氷の能力を同時に持っている者は、仮面の男からみても珍しい。その為に思わず仮面の男の動きが止まってしまうと、インプモンは空中にジャンプして連続蹴りを仮面の男に向かって放つ。

「ダダダダキツクッ!!」

「未熟だな」

「何ッ!？」

ダダダダキツクを避けながら仮面の男はポツリと呟き、インプモンは驚愕の声を思わず上げてしまった。

しかし、仮面の男は気にする事無く杖をインプモンに向かって構えて、光の輪を次々とインプモンに向かって撃ち出す。

「君も大人しくしてたまえ!!」

「ービュン!!」

「クッ!! ふざけんじゃねえ! 家を荒らした奴を赦せるかよ!!」

向かって来る光の輪を避けながら、インプモンは怒りに満ちた声で叫び返した。

その声に仮面の男は僅かに首を横に振るうと、自身の周りに複数の魔力弾を生み出し、杖の矛先を光の輪を避けているインプモンに

向かって構える。

「邪魔をするなら、消えたまえ!!」

「ズガガガガガガッ!!」

「インプモン!!避けて!!」

「クッ!!チクシヨウ!!ナイト・オブ・ファイアーッ!!」

「ドゴオオオオオオオ!!」

すずかの叫びで自身に魔力弾が迫って来ている事に気がついたインプモンは、右手に作り上げたナイト・オブ・ファイアーを撃ち放ち、魔力弾とナイト・オブ・ファイアーは空中で激突して爆発を起こした。

しかし、全ての魔力弾は破壊される事無く、残った魔力弾がインプモンに直撃する。

「ドゴオオ!!」

「グハッ!!」

「インプモン!!」

魔力弾が直撃して苦痛の声を上げたインプモンを目にした忍とすずかは叫んだ。

仮面の男は今の攻撃でインプモンは戦闘不能になったと思い、状況について行けず呆然としてしまっているはやてに目を向けた瞬間、仮面の男の頭に炎が降りかかる。

「バーカ!!! ナイト・オブ・ファイアーツ!!!」

「————ゴオオオオオ————!!!」

「グアアアアアアア————!!!」

頭に炎が降り注いだ仮面の男は、激しく燃える自身の髪の毛を急いで消火しようと暴れ回る。

その様子を冷めた目で見ていたインプモンは、左腕に作り上げていた氷を暴れている仮面の男に向かって放つ。

「おら、冷ましてやるよ! ナイト・オブ・ブリザードツ!!!」

「————ガキイイ————!!!」

「しまったッ!!!」

インプモンのナイト・オブ・ブリザードを受けた仮面の男は、持っていた杖ごと左腕が凍りに包まれた。

その現状に何かを焦ったよう仮面の男は杖に纏わり付いている氷を破壊しようと、右腕に不思議な陣を作り始める。

床に拘束されたままだった忍はその様子に何かがピンと思いきり、インプモンに向かって叫ぶ。

「インプモン!!! その男が持っている杖を重点的に攻撃しなさい! それが大変な力の威力を増幅させているみたいだから!!!」

「了解だぜ!!! オリヤアアアアアアア————!!!」

「クツ!!」

咆哮を上げながら迫って来るインプモンを目撃した仮面の男は、
一先ず庭の方に避難する。

インプモンはその後を追って行き、一先ずの安全を確保した忍、
すすか、そしてはやては安堵を息を吐き、はやては気になっていた
事をすすかに質問する。

「・・・すすかちゃん・・・さっきのはもしかしてかもしれへんけど・
・・・デジモンなんか？」

「・・・うん・・・あの子の名前はインプモン・・・一年前ぐら
いに私のところに現れた家族なの」

「一年前!? レナと一緒にやないか!？」

すすかの説明にはやては声を思わず上げてしまった。

レナモンがはやての下に訪れたのも丁度一年前。まさか、自分の
ところ以外にもデジモンが現れて居たとは、はやては夢にも思っ
てなかつた。

それはすすかも一緒だった。はやての下にもデジモンが居たとは
思ってもみなく、更にはそのデジモンが家で働いていたレナだと信
じられないと言う気持ちだった。

二人はそのまま互いにデジモンが居た事を如何話せばいいのか押
し黙ってしまう。

それを見ていた忍は焦ったように二人に向かって叫ぶ。

「二人とも!! 今はそんな状況じゃないでしょう!! はやてはとに
かく現れた変な機械を調べなさい!! それは多分デジモンに關係す
る物でしょうからね!!」

「そやった！！え〜と!？」

忍の言葉に現状を思い出したはやては、即座に右手に持っていた機械・『デイーアーク』に目を向けて調べ始めると、突如として液晶画面らしき部分から光が浮かび上がり、猫耳を生やした女性と戦っているレナモンの映像が映り出した。

「ーブーン!!」

「何か映った!!・・・レナ!!」

デイーアークに映った映像の先に居るレナモンの姿にはやては喜びの声を上げ、忍とすずかもレナモンが生きていた事に安堵の息を吐く。

しかし、レナモンが映った映像を見たはやては逆に焦りを覚え始めていた。

映像を見る限り、如何見てもレナモンの方が追いつめられている。このままではレナモンがやられてしまうと不安をはやては覚え、自身に出来る事は無いのかと考えていると、フツと左手に持っているカードの束から『サングルウモン』と名が書かれているカードを取り出す。

「・・・お願いや!!レナを!私の家族を助けて!!」

「ーシューン!!」

サングルウモン!!

はやてがデイーアークの横の隙間部分にカードをスラッシュした

瞬間、ディーアークから電子音声が鳴り響いた。

ーードックンー!!

(ッー!!何だ!?これは一体!?)

アリアの魔力弾を木々を移動しながら避けていたレナモンは、突如として自身の体の奥底から沸き上がって来た不可思議な力と知識に動きが止まってしまった。

その隙を目撃したアリアは、レナモンの動きが止まってしまった事をチャンスだと思い、素早くレナモンの背後に高速移動して蹴りを叩き込む。

「貰ったわー!!」

ーードゴオオンー!!

「ガハッー!!」

背中に一撃を食らったレナモンは、苦痛の声を上げて木の上から落下してしまう。

そのまま地面に激突してしまいそうになるが、レナモンは素早く体勢を整えなおし、地面に危なげなく着地する。

レナモンは地面に着地すると同時に再び木々の中に飛び込もうとするが、その直前にレナモンの両腕に光の鎖が巻きついてくる。

「チエーーンバインドッー!!」

ーーガシィィーーン!!

「クッ!!おのれ!!」

「ギリギリギリッ!!」

「もう逃がさないわ。やっぱり貴女は計画を潰す不確定要素、排除させて貰うわね!!」

「・・・計画だと?貴様ら、やはりはやてを利用する気か!??」

「これから死ぬ貴女には関係ないわね!消えなさい!!ブレイズキヤノン!!」

「ドグオオオオン!!」

Ariaは叫ぶと共に右腕からレナモンに向かって砲撃を撃ち出した。

チェーンバインドに拘束されているレナモンは、迫り来る砲撃に険しい顔をするが、砲撃が直撃するポツリと眩く。

「ブラックマインド」

「ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」

レナモンが眩き終わると同時に、レナモンは砲撃の中に飲み込まれ、後には砲撃が通った後だけが広がっていた。

その光景に Ariaはレナモン抹消を確信して笑みを浮かべていると、現実世界から焦りに満ちた念話が届いて来る。

(Aria!!そっちは終わったの!??)

(?・・ええ、今殺傷設定の砲撃を放って抹消したわ。それよりもロツテ、如何したのよ?)

(こっちは大変なのよ!何だか分からないけど、質量兵器を平然と使ってくる女どもは居るし!父様の方も変な生き物が邪魔をしているのよ!!)

(ツ!!分かったわ!それじゃ私が八神はやてを確保するわ!!)

ロツテからの報告で現状が自分達に不利な事を知ったアリアは、急いで自身の姿を外に居る二人同様に仮面を被った男の姿に変身して、張り巡らせていた結界を解除する。

同時に高速移動の魔法を使用して月村家の林から飛び出し、そのままはやて達が居る部屋の窓の前に辿り着き、油断無く中の様子を窺い始める。

部屋の中に居るはやて、そして光の輪に体を拘束されている忍とすずかは、はやてが持っている不可思議な機械・ディーアークに集中していて、アリアには気がついていない。

それを確認したアリアは、無言で部屋の中に飛び込み、そのままはやてを捕まえようと手を伸ばした瞬間、アリアの足元の影から太極図の文様が刻まれた籠手を装備した手が飛び出し、アリアの伸ばしていた手を掴み取る。

「ガシッ!!」

「なっ!?!」

「汚い手ではやてに触れるな!!」

在りえない場所から飛び出して来た手にアリアが驚愕した瞬間、アリアの影の中から砲撃の中に消え去った筈のレナモンが現れ、そのままアリアを投げ飛ばす。

アリアはその攻撃に驚くが、何とか頭からの床への直撃は避けようとする。だが、そうはさせないとレナモンは渾身の力を込めた蹴りを振り抜き、アリアの頭を刈り取る。

「ーードゴオオオン!!」

「ギャアツ!!」

無防備なままの状態だった頭への一撃にアリアは悲鳴を漏らし、そのまま庭へと吹き飛んで行った。

それを確認したレナモンは、自身の背後で心配そうな目をしているはやてに僅かに顔を向けて、安心させるように笑みを浮かべる。

「安心してくれ・・・私は死なない」

「レナツ!!」

「レナモン!! 貴女! 影に潜める能力なんて何で隠していたのよ!」

「・・・忍、悪いが、先ほどの能力は私は本来は持っていない。先ほど急に何故か知識と力が私の中に流れ込んで来たのだ」

「何ですって?」

レナモンの説明に忍は訝しげに首を傾げ、はやてとすすずかも疑問に満ち溢れた顔をする。

本来のレナモンには影に潜む力などない。それなのにレナモンは持っていない筈の力を使った。

その原因が何なのかと忍は首を傾げながら原因を考えていると、先ほどはやてがカードをディーアークに通した事を思い出す。

「ッ！・・・原因が分かったわ！はやてが持っているカードを機械に通せば、カードに描かれているデジモンの力が使えるようになるのよ！」

『えっ！？』

「カード？機械？忍、如何言うことだ？」

忍の言葉にレナモンは、ずずかと忍の体を拘束していた光の輪を破壊しながら質問した。

その質問に自由を取り戻した忍は、レナモンが居なくなってからはやての下に現れた不可思議な機械とカードの事を説明する。

説明を聞き終えたレナモンは、何処か納得したように頷きながら、はやてが持っているディーアークとカードに目を向ける。

「なるほど・・・急な力の発現の原因はその機械のせいだったのか・・・正直なところ、助かった。危なかったのも事実だから・・・はやて、ありがとう」

「気にせんとええよ・・・それよりも後で事情を説明して貰うで、レナ」

「ああ、分かっている」

「レナさん！あの、インプモンも戦っているんです！助けて上げて

その声にレナモンは安堵の息を吐き、そのまま自身に険しい視線を向けている仮面の男を睨みつける。

「貴様・・・姿は変えていても私には分かるぞ。ギル・グレアム！
！」

「・・・アリアは失敗したようだな」

「首の骨を折るつもりで渾身の蹴りを食らわせてやった。貴様ら、
一体何の目的ではやてを利用する！？」

「答える義務は無い。だが、これこそが正しい行動なのだ」

「ーブチッ！！」

「・・・正しいだと？」

「お、おい、落ち着けよ、レナモン！」

顔を俯かせて肩を震わせているレナモンに、インプモンは体を襲う痛みも構わずに落ち着かせるように声を掛けた。

しかし、レナモンはインプモンの言葉に構わずに、インプモンを地面に下ろして立ち上がりながら、はやてと出会ってからの一年間を思い出す。

自身が現れるまで一人寂しく八神家で過ごしていたはやて。

自身と言う家族が出来た事を心の底から喜び、共に過ごした日々。ずずかと言う初めての友人との日々を楽しく語っていた時の事。

その全てをグレアムは台無しにしようとしたばかりか、はやてに再び寂しい日々をグレアムは与えようとしている。

その事実に行き当たったレナモンは、全身から怒りのオーラを立

ち上らせて、自分とインプモンの背後で戦いを見ているはやて、忍
ずずかを護るように杖を握っている仮面の男・グレアムに怒りに満
ちた視線を向けながらインプモンに声を掛ける。

「・・・インプモン・・・お前は下がってくれ・・・私が戦ってい
た相手が戻ってくるかもしれんからな」

「お、おう」

怒りに滲んでいる声を出したレナモンに、インプモンは答えてそ
のままずか達の下に走って行った。

それを確認したレナモンは全員から一気に怒りのオーラを爆発さ
せて、グレアムに向かって怒りに満ちた視線を向けながら構えを取
る。

「貴様だけは絶対に赦さん！！貴様は、必ずはやての人生を潰す！
！それだけは絶対に私は赦さん！！」

「君には関係のない事だ。今からでも遅くは無い。はやて君から手
を引きたまえ。そうすれば・・・」

「ふざけるな！！貴様と一緒にするな！！私は何が在ってもはやて
を見捨てるものか！！」

EVOLUTION

「レナモン進化ッ！！」

レナモンが一際力強い叫びを上げた瞬間、はやてが持っていたデ
ィーアークから電子音声が鳴り響き、レナモンの体はデータ分解さ

れて別の存在へと進化し始めた。

その現象にデジモンで在るインプモンを除いた全員が目を見開くが、レナモンの進化は止まらず、次々と分解されたデータが集まって行き、データが集中した箇所には銀色の体毛で全身を覆い、九本の尻尾を生やした四足歩行の妖獣型デジモンが立っていた。

そのデジモンこそ、レナモンが成熟期に進化を果たした姿。その名も。

「キュウビモン！！」

キュウビモン（銀）、世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／妖獣型、必殺技／狐炎龍、鬼火玉

多くの経験を積んだレナモンが進化されると言われる九本の尻尾を持つ妖獣型デジモン。その中でも銀色の体毛を持つキュウビモンは非常に珍しく、通常のキュウビモンよりもどこか高貴な印象を持っている。また、銀色のキュウビモンは本来のデータ種のキュウビモンではなく、ワクチン種である。強大な精神力を武器に『術系』の技を得意とする。必殺技は、九本の尻尾から蒼く燃える龍を出して、敵を焼き尽くす『狐炎龍』に、九本の尻尾の先から、狐の顔のついた蒼い炎を飛ばす『鬼火玉』だ。その他にも多くの『術系』の技を使いこなすぞ。

「やったぜ！！レナモンが成熟期に進化しやがった！！」

レナモンのキュウビモン（銀）への進化を目撃したインプモンは喜びの声を上げた。

それはインプモンだけではなく、デジモンの進化の事を知っていたはやて、忍、すずかも笑みを浮かべ、高貴な雰囲気放っているキュウビモンを見つめる。

逆にデジモンの進化の存在を知らなかったグラムは困惑に満ち

溢れていた。

いきなり目の前に立っていたレナモンが、完全に別の生物へと変貌を遂げたのだから、グレアムの困惑も当然だろう。その上魔法とは全く違う変化なのだから、その困惑は更に深まっていた。

しかし、キュウビモン（銀）はグレアムの困惑など一切気にする事無く足を前に踏み出し、全身から蒼い炎を噴き上げ始める。

「――ゴオオオオオオ――！！！」

「行くぞ！ギル・グレアム！！！」

「クッ！！私も負けるわけにはいかん！！悪いが此処で君には消えて貰うぞ！！！」

キュウビモン（銀）の咆哮に応じるようにグレアムも杖を構えながら叫び返し、キュウビモン（銀）とグレアムは激突を開始するのだった。

第九話 カードスラッシュ&進化の時 前編（後書き）

今回の使用カード

サングルウモン、世代/成熟期、属性/ウィルス種、種族/魔獣型、必殺技/ステイツカーブレイド、ブラックマインド

デジタルワールド創世記より生き残っている古代種デジモンに数えられる魔獣型デジモン。吸血狼をモデルとしており、サングルウモンに血を吸われたデジモンはデジコアの情報を全て抜き取られ死に至ってしまう。自分の意志で自らをデータ分解させる特殊な能力を持つており、瞬間移動能力を保持している特殊なデジモン。必殺技は、数千の小型ブレイドを高速で投げ飛ばし、相手を一瞬の内に串刺しにする『ステイツカーブレイド』と、自らのデータを分解し相手の影の中に溶け込み消える『ブラックマインド』だ。

今回レナモンが使用したのは、サングルウモンの『ブラックマイン

ド』

影に溶け込める能力なので、かなり強力な力を秘めている。

ーードオオン！！

「何だと！？馬鹿なあんな複雑な動きが出来る筈は！？」

「貴様らの常識で私を語るな！！こでんげき弧電撃ッ！！」

ーービリビリビリッ！！

「クッ！！」

ーービュン！！

電撃を纏って体当たりをして来たキュウビモン（銀）の一撃を避けるように、グレアムは空中に身を躍らせた。

そのまま地上に居るキュウビモン（銀）に杖の矛先を構えて、魔力光弾を矛先から撃ち出す。

「ステイガーレイツ！！」

ーードオオン！！

「速い！？だが、それだけだ！！」

ーードオオン！！

「なっ！？」

グレアムと同様にキュウビモン（銀）は空へと舞い上がり、ステインガーレイを避けた。

その事実にはグレアムは思わず驚愕の声を漏らしてしまう。まさか、

姿が変わっただけで空戦の能力まで得ているとは思っても見なかったのだ。

しかし、キュウビモン（銀）からすれば決定的な隙が生まれた事には関わらず、自身よりも頭上に居るグレアムに向かって九つの尻尾の矛先を構えて蒼い九つの竜の炎を放つ。

「受けるがいい！！狐炎龍こえんりゆうッ！！」

「ーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「クッ！！」

高速で迫って来る狐炎龍こえんりゆうに対して、グレアムは前方に障壁を展開する事で防御しようとする。

幾ら威力が在る攻撃だろうと、防げる自身がグレアムには在った。先ほどの鬼火玉おにびだまはステイガスナイプ一発を相殺する為に全てを集めなければならなかったのだ。

これだけでもキュウビモン（銀）の攻撃力が低い事実には、幾多の魔導師達と戦い抜いて来たグレアムが判断するには充分だった。

その証拠に先行していた一匹の蒼い炎の竜はグレアムの張った障壁を貫く事が出来ずに、障壁に完全に防がれてしまっている。

そのままグレアムは大技を放った直後動きが止まるであろうキュウビモン（銀）に向かって砲撃を撃ち込もうと杖を構える。

だが、グレアムの予想に反するように残された八つの蒼い炎の竜は身を動かし、障壁を張っているグレアムを通り過ぎて、グレアムの背後で急な方向転換を行い、背中に向かって直進する。

「ーーギユン！！」

「父様危ない！！」

「ハッ!!!」

「ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ノエルとファリンと戦い続けていた仮面の男・ロツテの叫びに、背後から迫る八つの蒼い炎の竜にグレラムは気がつくが、時既に遅く、グレラムは八つの炎の竜の牙の中に飲み込まれて爆発を起こした。

確かにキュウビモン（銀）の必殺技は普通の成熟期デジモンから見れば威力と言う点では劣る。

だが、その反面、放った後でも技を自由自在に操れる汎用性と言う点では、他の成熟期に追隨を許さない。キュウビモン（銀）の必殺技が恐ろしいのは威力ではなく、その自由度こそに在った。

キュウビモン（銀）は自身の必殺技が直撃した事を確信するが、それでも油断無く爆発の衝撃で発生した煙の中を睨みつける。

そして案の定、身に着けていた不可思議な服はところどころ焦げていたが、充分に戦える状態のグレラムが煙の中から出て来る。

「・・・今のは危なかった。咄嗟にフィールドタイプの防御魔法を發動させていなければ、落とされていただろう。君の力は確かに厄介だが、威力不足なのが弱点のようだな」

「貴様に言われずとも分かっている」

「・・・そして同時に戦いに集中し過ぎて、他の事に意識を向け忘れる事もだな」

「如何言っ…」

「すずかちゃん……そうや！もう一度カードを使って！」

「それも止めなさい！さっき機械に映っていた場面を見ただしょう！急に力を得たら逆に危険になるかもしれないわ！攻撃を避けている事に専念しているキュウビモンに使うのは危険よ！」

カードを新たにディーアークにスラッシュしようとしているはやてに向かつて、忍は叫んだ。

忍の見る限り、今のキュウビモン（銀）はインプモンの現状に焦りを覚えて攻撃が覚束なくなっている。そんな状態で新たに力を得たら、忍の言うとおり逆にキュウビモン（銀）が危機に陥ってしまう可能性が高い。

ましてや忍達は愚か、はやて自身も所持しているカードに描かれているデジモンの力が分からないのだ。罷り間違つて変なデジモンの力を得てしまったら、逆に危険な状況にキュウビモン（銀）が陥ってしまう。

それ故にタイミングを計るか、せめて使用出来るカードの力を把握するまでは先ほどの機能を使用すべきではないと忍は思っていた。はやてはその事実に関を俯け、すずかは絶望感に満ち溢れた顔をしながら魔力弾に痛めつけられているインプモンに目を向けると、インプモンはすずかを安心させるように立ち上がりながら右手の親指を立てる。

「……へっ！！安心しろよ、すずか……こんな攻撃、屁でもねえぜ……だから、安心してみてるよ……！」

「インプモン……！」

叫ぶと共にアリアに向かつて走り出したインプモンの背に、すず

かは悲痛さに満ちた叫びを上げた。

如何見てもインプモンの限界は目に見えて近い事が分かる。それは敵対しているアリアも分かっているのか、インプモンに止めを刺そうと腕に魔法陣を出現させる。

「いや・・・インプモーン!!」

「ードックン!!」

「えっ!?!」

ずずかが一際大きな叫びを上げた瞬間、ずずかがインプモンに向かって伸ばしていた右手の中に、はやてとは色が違う、紫色の縁取りのデューアーグが光と共に出現した。

同時に突如として発生した光は、ずずかの左手にも集まり、光が消え去った後には十枚のカードの束がずずかの手に握られていた。

その現象にずずかに目の前で発生した不思議な現象に忍とはやてが言葉も出さず事が出来ずに目を見開いていると、ずずかの持つデューアーグから電子音声が鳴り響く。

EVOLUTION

「ウオオオオオオーン!!インプモン進化ッ!!」

「なっ!?!」

電子音声が鳴り響くと同時に咆哮を上げながらインプモンの体はデータ粒子に分解され、キュウビモンの時同様に別の存在へと進化して行く。

その現象に焦りを覚えたアリアは急いで砲撃を撃ち出すが、それ

は間に合う事は無く分解されたデータは一箇所に集約して行き、データが集まった場所には獰猛そうな四つの赤き瞳を持ち、背中に漆黒の翼を生やし、鋭い爪を両手に生やした体長五メートルほどの邪竜型デジモンが立っていた。

そのデジモンこそインプモンが成熟期への進化を果たしたデジモン。その名も。

「デビドラモン!!」

デビドラモン、世代/成熟期、属性/ウイルス種、種族/邪竜型、必殺技/クリムゾンネイル、レッドアイ

“複眼の悪魔”と呼ばれ、恐れられている邪竜型デジモン。ダークエリアから誕生した魔獣で、闇の中を飛び回っている。真っ赤な4つの獰猛さに満ちた瞳で睨まれたら相手は身動きがとれなくなり、その体を鋭い爪で切り刻まれてしまう。また、尻尾で相手の体も突き刺す事も得意とする。邪神像として各地に点在しているという話もあるぞ。必殺技は、両手の紅く輝く爪で相手を切り刻む『クリムゾンネイル』に、四つの瞳で相手を睨み、身動きを封じる『レッドアイ』だ。

「クリムゾンネイル!!」

「ブザン!!」

「そ、そんな!?!」

簡単に自身が放った砲撃がデビドラモンの両手の爪によって掻き消されるのを目撃したアリアは、何処か慌てるように後退りしてしまふ。

しかし、デビドラモンは構う事無くアリアから護るようにはずか

達の前に立ち、自身の凶悪さに満ちた姿に震えているはずか、はやて、忍を安心させるように優しいが籠った瞳を向ける。

「安心しろよ。俺は絶対にはずか達を護って見せるぜ!」

「あつ・・・」

デビドラモンの優しさに満ちた声に、はずかはやはりインプモンなのだと確信した。

その姿は確かに邪悪に見えても、デビドラモンは確かに自分が家族だと確信し、ずかは安心さに満ちた笑みを浮かべ、忍とはやても安心したように息を吐いた。

デビドラモンはそれを確認すると、はずか達の時とは違って完全に獐猛さしか宿っていない瞳をアリアに向けて、その力を発揮する。

「食らえ!!レッドアイ!!」

「ーギン!!」

「ヒイツ!!」

凶悪なデビドラモンの瞳を真つ向から目にしたアリアは、金縛りに在った様に身動きが取れなくなった。

デビドラモンはそれを確認すると、今度は上空でキュウビモン（銀）の相手をしているグレアムに向かって背中（の羽を大きく広げ、強く飛ばたかせて風の刃を飛ばす）。

「デモニックゲイルツ!!」

「ーブザン!!」

「ッ!!」

高速で迫る風の刃に気がついたグレアムは慌てて回避した。

そのおかげで攻撃の手が止んだキュウビモン（銀）が素早くデビドラモンの隣に滞空すると、忍はチャンスだと思い、すずかとはやてに向かつて叫ぶ。

「チャンスよ！二人とも！！一番強力そうなカードを使用して、あいつ等を家から追い出しなさい！」

「うん！」

「了解や!!」

忍の言葉にすずかとはやては同時に頷き、すずかは自分の持つカードの中から鬼のような顔をして骨の武器を持ったデジモン・『オーガモン』と名が刻まれたカードを取り、はやては凶暴そうなオレンジ色の体躯を持ったデジモン・『ジオグレイモン』と名が刻まれているカードを握り、二人は同時にディーアークにカードをスラッシュする。

『カードスラッシュ!!』

オーガモン！

ジオグレイモン！

カードがディーアークの横の部分に隙間を通り過ぎると同時に、二つのディーアークはそれぞれ電信音声を発し、デビドラモンとキ

ーードオオオオン！！

『なっ！？』

ーードゴオオオオオオオオオオン！！

バズーカ砲から発射された砲弾は真っ直ぐにアリアとロツテ、そしてグレアムの下へと直進し、直撃すると同時に空に緑色の煙が空に広がった。

そして煙が消えた後には誰も存在せず、キュウビモン（銀）とデビドラモンの二体は険しい顔をしながら再び自身の体をデータ粒子に変換させて、元のレナモンとインプモンに戻ってはやてとすずかの傍に近寄って行く。

忍はその様子を確認するとノエルが持って来たグレアムが落とされていた杖を受け取って、興味深そうに杖を見つめるのだった。

第九話 カードスラッシュ&進化の時 後編（後書き）

今回の使用カード。

オーガモン、世代/成熟期、属性/ウイルス種、種族/鬼人型、必殺技/霸王拳^{はおうけん}

鬼の姿をした鬼人型デジモン。頭は良いが気性は荒く、発達した筋肉から繰り出す攻撃は、岩さえも砕く破壊力を持っている。どんな相手にも勇敢に戦いを挑むので、通称“デジモンハンター”と呼ばれている。持っている骨は『スカルグレイモン』を倒した時の戦利品。レオモンのライバルデジモン。必殺技は、力を溜めて、強力なエネルギー状のパンチを繰り出す『霸王拳^{はおうけん}』だ。

ジオグレイモン、世代/成熟期、属性/ワクチン種、種族/恐竜型、必殺技/メガフレイム、メガバースト、ホーンインパルス
グレイモンの亜種と推測される恐竜型デジモン。頭部の甲殻や体も全身凶器の様に発達し、より攻撃的な姿となっている。必殺技は、超高熱の火炎を口から吐き出し、全てを焼き払う『メガフレイム』に、超高熱の火炎を口に溜め、極限まで高めたところで一気に敵に向かつて放つ『メガバースト』。そして恐竜型とは思えぬ超スピードで翻弄し、頭部のツノで敵に攻撃を加える『ホーンインパルス』だ。

今回デビドラモンが使用した技はオーガモンの必殺技『霸王拳』
キュウビモン（銀）が使用したのはジオグレイモンの必殺技『メガバースト』

第十話 考察と今後

グレアム達の襲撃から四時間後。

アレからグレアムの襲撃の事実を知った警察関係者が訪れ、忍とノエル、そして月村家の襲撃の事実を知って急いで駆けつけてくれた綺堂さくらも交えて話し合ったりした。

その話には、はやて、すずかは関わっていない。まだ子供だと言う理由も在ったが、二人とも命のやり取りに関わった事実に気がつき、グレアム達が去った後には震えが止まらなくなってしまったのだ。

二人にはレナ、インプモン、ファリンが万が一グレアム達が再度襲撃を仕掛けて来た時の為に護衛としてついている。

そしてグレアムを懸賞金付きの指名手配にする事で合意し在った後、一先ず警察の方でもグレアムの足取りを追う事を決めて警察は署に戻って行った。

それを確認した忍はリビングで疲れたように手足を伸ばしながら、ノエルが淹れて来る紅茶を叔母で在るラベンダーのスイツに身を包んでいる瑠璃色の瞳と、ルビーのような赤紫の髪色の女性・さくらと共に待っていた。

「ハア、完全に予想外だったわ。今回の件は」

「そうね・・・まさか、逮捕された初日に脱獄して、その後には月村家に襲撃・・・相手も相当焦っていたみたいね。無事で良かったわ、本当に」

さくらは忍の無事な姿に心の底から安堵の息を吐いた。

グレアムの件は知っていたとは言え、まさか仕掛けた初日に襲撃を掛けて来る事は、さくらも考えてはいなかった。何せ月村家が関

わっていると分かれば、大抵の裏の者は何らかの準備をして来る筈なのだ。

だが、グレアムはそんな事を無視して、獣人と思われる猫耳と尻尾を生やした女性を付き従えて来た。

さくらが一番に気になっっている事はその女性に関してだった。

「で、貴女が映像で見た女性は夜の一族に関係している可能性は？」

「多分アレは違うわね・・・何て言えばいいのか、よく説明出来ないんだけど・・・さくらとは違う感じを受けたのよ」

「そう」

さくらは忍の説明に納得したように深く頷いた。

同族で在る夜の一族ならば、忍が何かを感じない筈は無い。だが、忍は違うと断言した。

それが意味する事は、少なくとも月村家に現れた女性は夜の一族とは全く別の種族であると言う事実。

しかし、それはさくらにも忍にも全く安心出来る材料にはならなかった。何せ並大抵の夜の一族ならば倒せる實力を持っているノエルとファリンの二人掛かりで、漸く互角に持ち込めたほどの實力者がグレアム側には居るのだ。

今回はレナとインプモンの進化、そして突如として出現した不可思議な機械・ディーアークの力のおかげで危機を脱する事が出来た。その二つの要素が無ければ、は yet は攫われていた可能性が高かったと忍は内心で思いながら、さくらの前のテーブルには yet とすずかから預かっていたディーアークと合計二十枚のカードを並べる。さくらは興味深そうにディーアークと八枚の生物が描かれているカードに、黒く塗り潰された十二枚のカードを眺め、その中から『サングルウモン』と名が刻まれたカードを手に取る。

「これが例のカードなのね・・・『サングルウモン』・・・間違いなくデジモンの名前よね？」

「そうよ。それでそっちの機械の隙間の部分にカードを通すと、はやての場合はレナモンに、すすかの場合はインプモンに力が付加されるようなのよ。後は自分のパートナーが見ている映像も映せるみたいだわ」

「それは凄い機能ね」

忍の説明にさくらは感心したように頷きながら『サングルウモン』のカードをテーブルに戻し、今度は黒く塗り潰れたカードを手に取って眺める。

黒く塗り潰れたカードの方は、完全に裏面も表面も黒に染まり、大きさ以外ではデジモンが写し出されているカードと同じ物とは判別出来ないだろう。

何の意味が在るのかと、さくらは興味本位ではやてのディーアークにカードをスラッシュしようとするが、カードは何かに阻まれているかのように隙間を通らなかった。

さくらは幾ら力を込めても隙間を通らないカードに、首を傾げてしまつと、忍が何処か納得がいかなさそうな顔をしながら説明しだす。

「無駄よ。私も試したんだけど、如何にもその機械には持ち主を判別する機能が在るみたいなのよ。だから、さくらや私がカードを通そうとしても通らない。因みにすずかに試しに黒く塗り潰れたカードを通して貰ったけど、エラー文字と音声が響くだけだったわ」

「ますます凄いわね。材質も見た目は金属に見えるけど、金属にし

ては軽いわ」

「ええ、コレを作った人物は嘗ての夜の一族の技術力を超えているかもしれないわ・・・そしてギル・グレアム達が関わっている組織も地球を越える技術を持っている可能性は高いわよ、さくら」

「如何言う事なの？」

「コレを見て」

忍は自身が座っていた椅子の横から長い箱をテーブルの上に置き、箱の蓋を開けてさくらに見えるようにする。

さくらは箱の中を覗くように中身を見つめっていると、機械的な杖が箱の中に納まっていた。

その見た事も無い機械的な杖にさくらが首を傾げると、忍は杖を手に入れた経緯を話し出す。

「怪我を負ったギル・グレアムが落としていったんだけどね・・・ちよつと調べただけでも凄く高性能な機械の塊なのよ。私もレナモンの協力が無ければ、短時間では解析する事が出来なかったわ」

「忍でも解析が出来なかった機械ですって？」

さくらは訝しげな声を出して、件の機械的な杖を注意深く眺める。忍の持つ技術力がどれほど凄まじいモノなのかを、さくらは良く知っている。その忍でもレナの協力がなければ解析出来なかったほどの技術が籠った謎の杖。

時間が無かった事も原因だろうが、少なくとも忍でも解析する事が出来なかった技術を持った相手が月村家を襲ったとなれば、見逃す事だけは絶対にはならない。

何が何でもギル・グレアムは捕まえなければならない。さくらは
そう思いながら機械的な杖を箱の中から取り出し、注意深く眺める。

「……確かに一目みただけでは全く用等が分からないわね」

「でしよう……だけど、私はこの目でハッキリと見たわ。光り輝く
陣が杖から発生して、私やすずかを拘束した光の輪なんかが出現し
たのを」

「……見逃す訳にはいかない事が増えたわね……もしその力を
悪用する者が現れでもしたら」

「対抗手段の無い人物は良いようにされて終わるでしょうね……
危険な力だわ、コレは」

忍とさくらはグレアム達が使った力を危険と判断していた。

不可思議な空間にレナだけを取り込んだ事もそうだが、頭脳に特
化しているとは言え忍を拘束した光の輪も充分に危険だった。

もしもアレが一般人に使われでもしたら、一般人は何も出来ずに
好き勝手されてしまうだろう。それほどまでにグレアム達が使った
力は危険だと直に触れた忍は感じていた。

次にグレアム達が襲撃を仕掛けて来た時に、はやてを護りきれる
可能性は限りなく低い。デジモンの存在を知ったのだから、何らか
の対策ぐらいいは相手も行って来るだろう。

（レナモンを閉じ込めた結界をはやて以外の全員に指定でもされた
ら終わりね……早急にあの力の対抗策が必要だわ）

そう忍は内心で呟きながら箱に杖を戻しているさくらに顔を向け
ると、今度はレナに急いで八神家から回収して来て貰った“鎖が巻

かかっている本”をテーブルの上に載せる。

「……ドントッ！」

「……それが例の遺産かもしれない本なのね？」

「そうよ……だけど、コレも一筋縄で行く物じゃないのよね」

「如何言う事かしら？」

「試しに鎖を引っ張って見て……全力でね」

「?……よく分からないけど、分かったわ」

忍の言葉にさくらは疑問を覚えるが、とにかく試してみようと本に手を伸ばし、本当に全力で鎖を引き千切るように引っ張り出す。

「……ギシギシッ!!」

「ッ!!コ、コレは!?!嘘でしょう!?!」

自身が全力で引っ張っても壊れる事無く本に巻きついている鎖の頑強さに、さくらは驚愕した。

夜の一族の中でも強い力を持つさくらが全力を込めても、鎖はビクともする事無く本に巻きついたままだったのだ。

自身の力がどれだけ強力なのかを知っているさくらは、信じられないと言う面持ちで本を見つめる。

「……コレは確かに一筋縄ではいかない物みたいね……遺産か、どうかはともかく見過ごす事は確かに出来ないわ」

「ええ、コレら一体何なのか・・・本当に興味深いわ・・・フフフフッ」

(不味いわ！完全に忍が研究者モードに入っているわ！)

顔を俯けて底冷えするような笑い声を出している忍の姿に、さくらは戦慄した。

今の状態の忍の危険性をさくらは理解している。確実に不眠不休で本と杖を忍は解析するだろう。

そして解析し終えた時には確実に実験に付き合わされてしまうと感じたさくらは、話を早急に変えるつもりで別の話を始める。

「そ、それだけで・・・あの子には話すの？」

「・・・それはさすが次第ね・・・初めて友達なんだから、私やさくらが決めていい事ではないわよ」

「・・・そうね・・・大丈夫かしら？・・・もし受け入れて貰えなかったら・・・すずかは」

「まあ、多分大丈夫だと思うんだけどね」

「あら、如何してなの？」

「だって、デジモンを受け入れたのよ、はやてわ。何となくだけど、最初は驚いても最終的にはすずかを受け入れてくれるわよ。女の勘んだけどね」

「その勘が当たってくるといいんだけどね」

はやてを信じているように声を出す忍の様子に、さくらも何処となく安心感を持ちながらノエルが持つて来た紅茶を飲むのだった。因みにこの後、何故か『サングルウモン』のカードの心が引かれたさくらは、忍に頼んで携帯の画像部分に『サングルウモン』の姿を壁紙として写して貰ったりする。

そしてこの事が原因で、後の訪れる平行世界のマッドが絶叫を響かせる事になる、月村重工とバニングス会社が共同で売り始める『デジモンカード』が始まるのだった。

「……吸血鬼の一族やて？」

場所は変わってすすかの部屋内部。

ベットの上ではやてとすすかは対面するように座りながら、すすかから驚愕の事実を聞かされ、口を呆然と開けてしまっていた。

すすかから伝えられた月村家と言う月村と言う夜の一族の家系。他者の血を吸う事。そのおかげで異常な身体能力を発揮するなどなど、一般家庭から生まれたはやてが驚愕するには十分な事実が次々と伝えられたのだ。

そしてはやての事実を伝えたすすかは顔を深く俯けながら、膝の上に手を置いてはやての言葉をジッと待っていた。部屋の中にはすすかとはやての二人しか居ない。

当初はレナ、インプモン、ファリンも部屋には居たが、すすかの願いで退出を願ったのだ。

今回の事件でもはやてはやてに自分達の一族の正体を隠して於くのは無理だとすすかは思った。

本来ならばすすかは語りたくなかった。何れは語るにしても、それはまだずっと先の事だとすすかは心の何処かで思っていた。だが、今日の一件ではやては月村の異常を目撃してしまった。

月村の秘密を隠して於くのは不可能。ならば、せめて自身の手で話そうとすずかは決意してはやてに月村家と言つ一族と自身についてを語つたのだ。

そして全てを聞き終えたはやては、顔を俯けているすずかの様子に真剣に如何答えればいいのか考えていた。

別にはやてはすずかが吸血鬼だろうと気にする気は全く無かった。何せデジモンという不可思議な生物と一年以上暮らして、更には今日保護責任者だったグレアムの異常な力を目撃したのだ。

すずかが吸血鬼だった事には驚いたが、寧ろはやてからすれば信じていたグレアムに裏切られた事の方が心が傷ついた。だからこそ、思い悩んだ末に真実を打ち明けてくれたすずかに対して簡単には答えてはいけないとはやては思う。

(・・・すずかちゃんも今同じ気持ちなんやろうな・・・なら、私の答えは決まつとる！)

ーポーン！

「すずかちゃん・・・私な・・・今日グレアムおじさんに裏切られて・・・ほんまに辛かったんや・・・でも、レナや忍さん、ノエルさん、フアリンさん、そしてすずかちゃんが慰めてくれた・・・特にすずかちゃんは私の為に怒ってくれた・・・嬉しかったわ・・・だから、私はすずかちゃん達が普通と違っていても気にせん・・・だって、すずかちゃんはすずかちゃんや・・・私の大切な初めての友達や」

そうはやてはすずかの肩に手を置きながら、偽ざる自身の本心を笑顔と共に伝えた。

それを表すようにはやての瞳には奇異の視線や嫌悪感は一切存在していない。レナと言つ特異な生物の存在も在ったが、はやてにとつてはすずかはすずかではないのだ。

そのはやての言葉にすずかは一瞬呆然として固まってしまうが、すぐにはやてに瞳を潤ませながら微笑み、二人は仲良く抱き締め合うのだった。

そして十分後、二人の気持ちを確かめ合った後、すずかは夜の一族の秘密を知った者についての話を始める。

「えつとね・・・夜の一族の事が他の人に知られたら『誓い』をたてないといけないの・・・それが如何言う関係かは決まっていないけどね」

「ほんなら私らの関係は決まっとるやろつ。私らは『親友』や！」

「うん！はやてちゃん！」

はやての迷いない宣言にすずかも嬉しげな声で同意し、二人は仲良く会話を始める。

その様子を扉の外で聞いていたレナとインプモン、そしてファリンも嬉しげに顔を見合わせるのだった。

グレアム襲撃から二週間後、八神家前。

八神家の正面の道路には月村家が雇った引越し用のトラックが止まっていた。

アレから色々話し合い、グレアムが正式に指名手配された後、はやての親権は裁判を経て、さくらの叔母に当たるエリザと言う人物が持つ事が決まった。まだ、中学三年で在る忍や大学生のさくらでは無理だと言う事で忍の遠縁に当たるエリザが選ばれたのだ。

最も色々忙しいエリザでは、はやての面倒見る事が難しいと言

う事で、最終的にはやてとレナは月村家で暮らして貰う事が決まっている。

そして今日、色々な手続きを終えてはやてとレナは新たに住む事になる月村家への引越しを行っているのだ。

「それでは全ての積み込みが終わったので、お先に送って於きます」

「色々と助かった。それでは荷物を月村家まで頼む」

引越しの業者にレナは感謝の言葉を伝え、引越しの業者は嬉しそうに笑いながらトラックに乗り込んで月村家と向かって行った。

それをレナは確認するとゆっくりと門の前で八神家を眺めているはやてに顔を向ける。

「・・・レナ」

「何だ？」

「・・・この家な・・・レナが来るまで嫌いやった・・・私以外の誰も住んでいない寂しい家・・・それでも離れるとなると、なんや寂しい気持ち湧いて来るわ」

「そうだな・・・私も多少は寂しさを感じる・・・あの男が裏で動いたとは言え、此処は私達が共に暮らした家だからな」

「そうやね・・・でも、もう気持ちの整理はついたわ・・・行こう、私たちの新しい居場所に」

「ああ」

そうはやてとレナは互いに言葉を交し合つと、レナは車椅子を押してノエルが待つている車の方へと移動を開始する。

新しく始まる日常を互いに思いながら、はやてとレナは共に過ごした八神家から離れて行った。

こうして本来進む筈だった道の運命は更に変化した。

それが呼ぶ結果は今には誰にも分からない。だが、変化した運命は更なる変化を呼ぶのは間違いない。

『夜天の名を持つ日輪姫』と『暴食の魔王の夜姫』が出会った様に、海鳴に居る残りの二体のデジモンとそのパートナーの二人の少女達 - 『真なる竜騎士を従える女帝』と『調停の機械狼と共に歩む優しき不屈の星光姫』の出会いも近づいていたのだった。

第十話 考察と今後（後書き）

次回からはアリサとなのはの方の話になります。

第十一話 剣士と竜の趣味

早朝高町家庭内部。

其処では高町家の長男である高町恭也が自身が精魂込めて育てた盆栽を観察していた。

今朝の鍛錬を終えた後、恭也は近々行われる予定の盆栽の大会に出展する予定の作品の仕上げに掛かっていた。

何せ今回は恭也が盆栽に於いてライバルと認めている人物も必ず作品を出展して来る。

その相手に負けない為にも恭也は真剣な顔をして、最後の調整に在ったっているのだ。

その様子を家の縁側から美由希、なのは、そしてなのはが抱きついているガブモンXは、何時に無く気迫が漂っている恭也を、僅かに呆れを含んだような顔をしながら眺めていた。

「ハア、恭ちゃん、今回は何時もよりも気迫が凄いね、なのは」

「うん、沢山盆栽の本とか読み漁っていたよ。お兄ちゃん、今回は本気で優勝を狙っているみたいなの」

「・・・でも、もう三十分もあの状態で居るんだよね。そろそろ桃子さんが朝食を作り終える時間なんだけど」

「・・・ガブモン、恭ちゃんを呼んで来てよ」

「えっ？・・・いや、僕が呼んでも聞こえないんじゃないんでしょ
うか？」

「ガブモンは強いから真剣な恭ちゃんに声を掛けても大丈夫だよ。」

だから、呼んで来て」

「ガブモンX君、お願い」

「ウツ！・・・参ったな」

美由希となのはのお願いにガブモンXは困ったように頬を掻きながら、盆栽に集中している恭也の方へと歩いて行く。

恭也の隣にガブモンXは立つが、恭也は完全に盆栽に集中しているのか気がついた様子は見せず、ガブモンXは恐る恐る恭也に声を掛ける。

「あの〜恭也さん？」

「むっ？ガブモンか、如何した？」

「そろそろ朝食の時間ですよ。今日は日曜日なんですから、続きは朝食を食べた後にしたら如何です？」

「もうそんな時間だったか。分かった」

（フウ〜、良かった）

家に向かって歩いて行く恭也の背を見ながら、ガブモンXは安堵の息を吐いた。

盆栽を弄っている時の恭也には、如何にも近づき難い雰囲気が存在しているのだ。その為に恭也に声を掛ける時には神経を使ってしまう。

重圧から解放されたガブモンXは意気揚々と家の中に入り込み、リビングで桃子を含めた全員で朝食を取り始める。

『いただきます』

五人はそれぞれ手を合わせながら食事を開始する。

そして在る程度食事が進んでいると、何処と無く嬉しげな雰囲気
を放っている桃子にガブモンXは気がつき、桃子に質問してみる。

「如何したんですか？桃子さん」

「実はね。お医者さん電話が在って、士郎さんが危険な状態を脱し
たらしいのよ。意識を取り戻すのもそう遠くないらしいわ」

「本当！？お母さん！？」

「ええ、本当よ、美由希。これで漸く一安心出来たわ」

「お父さん、もうすぐ帰って来るの？」

「そうよ、なのは」

何処と無く嬉しそうにしているなのはの頭を、桃子は優しげに撫
でた。

海外でボディガードの仕事をしている最中に大怪我を負って入院
していた士郎が漸く起きるかもしれない。その事実は何処と無く不
安に思っていた桃子達の心を晴らしてくれた。

もしかしたら帰らぬ人に士郎はなるかもしれないのだから、
士郎が危険な状態を脱したと言う事実は高町家に喜びを齎した。

そして全員が食事を終わると、恭也と美由希は翠屋に仕事に行く
為に準備を始め、ガブモンとなのはリビングでテレビを見始める。
今日はガブモンとなのはの翠屋での仕事は午後からなので、午前

中は家の中で過ごす予定なのだ。

因みにガブモンとなのは既に翠屋でのマスコットキャラとしての地位を確立している。ガブモンが仕事をする時は子供連れのお客が良く訪れるので、翠屋の売り上げにも貢献したりしている。

そんな風にそれぞれ今日の準備をする中、恭也が例の盆栽の大会についての桃子に話し出す。

「そう言う訳でその日は休みを貰っても構わないか、母さん？」

「良いわよ。その日はバイトの人も何時もよりは来る予定だから・・・
・そう言えば、その大会の隣で別の大会も行われるのよね？」

「ああ、確か何かのゲーム大会だったと思ったが」

「だったら恭也。なのはとガブモン君も連れて行って頂戴。確かキヤラクターとかも居るらしいから、ガブモン君はそれで誤魔化せば入れるわ」

「ふむ・・・構わないが、俺は大会の出場者だから、大会が終わるまではなのはとガブモンを見てもらえないぞ」

「美由希も休みにするから大丈夫よ。たまには四人で遊んで来なさい。私が送り迎えはして上げるからね」

「分かった。それならば大丈夫だ」

「それじゃ当日はお願いね」

そう桃子は恭也に頼むと、美由希にも事情を説明して了承を貰い、仕事場で在る翠屋へと三人で向かい出す。

それを入り口の前でなのはとガブモンXは見送ると、そのまま再びリビングへと戻ってトランプを興じたり、テレビを見たりと時間を潰して行く。

「うゝまた負けたの」

「なのははすぐに顔に出るからだよ。それだと、どんなカードなのか分かつちゃうよ」

「それでもガブモンX君の方がババ抜きは強い。だって、全然顔色で読めないんだもの」

「まあ、僕は普通のデジモンよりも意識を強く保たないといけないからね」

何処と無く誇らしげにガブモンXは、なのはに向かって声を出した。

デジモンの強化を行う『X抗体』を保有しているガブモンXは、通常のデジモンよりも意識を強く保たなければならなかった。

『X抗体』はデジモンに通常を遥かに超える力を与える代わりに、何時理性を失って凶暴化させてかもしれない危険性を秘めた抗体。

それ故にガブモンXは成長期に進化してからと言うもの、常に意識を強く保てるように士郎から教えて貰った精神鍛錬を欠かさず毎日行っている。

そのおかげで相手の顔色など窺って判別するゲームなどでは、士郎や恭也以外には負けた事は無く、美由希とは互角の戦いを繰り広げられるレベルになっていた。

「なのはもやってみる？精神鍛錬ぐらいだったら士郎さんも教してくれているし」

「うん？考えてみるね」

「それが良いよ。じゃ、もう一度やろうか。今度はなのはが得意な神経衰弱でね」

「うん！今度は負けないの！」

ガブモンXの言葉になのはは決意を秘めた顔をして頷き、二人は床にトランプカードを並べ、桃子達が戻って来るまでゲームを興じるのだった。

場所は変わってバニングス邸内部。

広がる庭先の隅の方に置かれている丹精に育てた盆栽達の中から、ドラコモンは自身の最高の出来であると思っっている杉を取り、隣に立っていたバニングス家の執事である鮫島に手渡す。

「コレで今回は頼むぜ、鮫島さん」

「ほう・・・素晴らしい出来栄だ・・・まさか、初めて半年近くで此処までの作品を作るとは、思ってみなかつた」

鮫島はドラコモンから手渡された杉を感心したように眺める。

年配であり、ドラコモンに頼まれて何度か盆栽の大会に代理人として出場した鮫島も、多少は盆栽を嘗を嗜んでいた。最もドラコモンのように本気で取り組んでいる訳ではなく、あくまで嗜む程度だが、その鮫島から見ても見事としかドラコモンが渡して来た杉は言えなかつた。

その言葉に誇らしげにドラコモンは胸を張り、盆栽が置かれていた棚の横に置いて在った盆栽の雑誌を見始める。

「今回は本気で優勝を狙うぜ！そしてアイツに勝ってみせる！」

ドラコモンはそう決意に満ちた声を上げた。

忘れもしない前回の盆栽大会。後一步でドラコモンが出展した作品は入選にまで届いた筈だったが、大会に参加していた中学生の作品にドラコモンの作品は破れたのだ。

その光景を鮫島に頼んで録画して貰っていたビデオで目撃したドラコモンの落ち込みは、バニングス邸に居る全員が驚くほどだった。だが、ドラコモンはその敗北をバネにして立ち上がり、次こそは優勝を誓って立ち上がったのだ。

因みに相手側の人物も自身と互角に戦った相手に興味を覚えて、以後ドラコモンと件の人物は手紙でやり取りをしていたり、最高とは言えないが素晴らしい出来の作品を写真を送ったりして交流を結んでいた。

（それにしても、何で一時期だけアイツの作品はあんなに荒れたんだ？別人が作ったのかと思わず思っちまうほどに酷いぜ）

ドラコモンは鮫島と共に屋敷の方に向かって歩きながら、雑誌に挿んでおいた件の人物から送られて来た写真を眺める。

その作品は一目見ても酷く、ドラコモンは最初は別の人物が作ったのではないのかと首を傾げたぐらいだった。だが、それから送られて来る作品の写真は同じ物ばかりだったので、ドラコモンは苦言をするように手紙を送ったのだ。

自身がライバルと認めた相手に堕ちぶられては、前回の雪辱を晴らす事が出来ない。その為にドラコモンは手紙を何度も送ったりしたのだ。

そしてそのおかげで相手も調子を取り戻したらしく、雪辱を晴らす事が出来るとドラコモンは思って、今出来る最高の作品を大会に出展する事にしたのだ。

ドラコモンは来たる大会の日を思いながら鮫島と共に中庭に辿り着くと、何かを探るように辺りを見回しているアリサをドラコモンは目にする。

「うん？・・・おい！アリサ！如何したんだ!？」

「如何したじゃないでしょうが!！」

「へッ?」

何処か怒ったように叫んで来たアリサに、ドラコモンは疑問の声を上げるが、アリサは構わずにドラコモンに近寄り、その頬を力強く引っ張る。

「――ギユウウッ!！」

「ウゲッ!！イテエよお!！」

「痛くしているのよ！アンタ今日は私と遊ぶ約束をしていたでしょう!！」

「アッ!！」

アリサの言葉にドラコモンは頬を引っ張られながらも、何処か納得したようにポンと両手を合わせた。

確かにアリサの言うとおり、昨日の就寝前に遊ぶ約束をドラコモンはアリサとしていたのだ。早朝と言う事で、何時の庭への水撒き

と鮫島を呼んで大会への出展作品などの事で、ドラコモンは完全にアリサとの約束を忘れていた。

その様子にアリサは更に怒りを覚えたのか、更にドラコモンの頬を引っ張りながら屋敷の中に向かって歩き出す。

「さあ、約束どおり遊ぶわよ！」

「わ、分かったからよお！頬を引っ張るのは止めてくれ！本気でいてえぞ！」

ドラコモンは頬を引っ張られながらもアリサに声を掛けるが、アリサは屋敷の中に戻るまでドラコモンの頬を引っ張るのを止めず、ドラコモンは痛そうに顔を歪める。

その様子を見守っていた鮫島は何時もの様子に顔を綻ばせながら、ドラコモンから渡された杉の包装へと向かい出す。

そして屋敷内部に辿り着いたアリサとドラコモンは、アリサの部屋でアリサの父親であるデビットから借りたチェスを興じていた。

「はい、チェックメイトよ」

「うげっ！これで三連敗！・・・何でチェスだと俺は勝てねえんだよ」

「アンタ、囲碁や将棋は強いよね。オセロは私と互角・・・何でアンタは竜のくせに日本の物は強いのよ」

「おいおい、囲碁や将棋だって、もうアリサは俺と互角だろうが。俺としたらそっちの方が怖いぜ」

呆れたようにドラコモンは声を出しながら、ジト目でアリサを見つめた。

確かに竜族で在りながらもドラコモンは日本に関わるモノは強かったが、今ではアリサと互角レベルだった。

最初はルールにアリサは戸惑っていたが、其処は子供ながら恐るべき学習能力を持った才女。

既にチエスや運に頼る側面を持つボードゲーム以外ではドラコモンが勝てなくなって来ていた。

最も自身の成長に気がついていないアリサは、ドラコモンの言葉に首を傾げる。その様子にドラコモンは溜め息を吐きながらチエスの駒を並べていると、アリサは気になっていた事を質問する。

「そう言えば、今回も鮫島にビデオを撮って大会を見るの」

「いや、今回は俺も直接行くぜ」

「ハッ？……ねえ、今何て行ったの？」

「だから、俺も行くつっていたんだよ」

「……ば、馬鹿！！」

「……キイイイーン！！」

ドラコモンの言葉の意味を理解したアリサは、怒りに満ちた叫びをドラコモンの耳元で叫んだ。

その威力にドラコモンは頭を抱えるが、アリサは構わずに怒りと戸惑いに満ちた視線をドラコモンに向かって放つ。

「アンタ！本気で馬鹿なの！？アンタは屋敷の中ならともかくね！

外に出たら実験動物行き、間違いないわよ!」

「い、いや、それは充分に分かってる・・・だけど、ほら、見てみるよ」

「うん?」

片手で頭を押さえながらドラコモンが差し出して来た雑誌をアリサは疑問を覚えながら見てみると、盆栽の大会が行われる予定の会場の隣で大規模なゲーム大会が行われる事が記されていた。

「この大会は発売される前のゲームの試作品なんかも試せるんだよ。だから、俺はそのキャラに紛れて参加するんだ。俺の視力なら隣の会場でも盆栽の大会は見えるからな・・・因みにデビットさんの許可は貰って在るぜ。まあ、あんまり目立たないように動けって言われたけど」

「・・・私も行くわよ」

「へっ?」

「私も行くって言ったのよ!」

意味が分からずに口を開けているドラコモンに向かって、アリサは声を出した。

そして意味が徐々に分かって来たドラコモンはジッとアリサを見つめると、アリサは険しい視線をドラコモンに向けながら話し出す。

「アンタの事だから、絶対に盆栽の会場に乱入しようとするでしよ
うから、私が見張って上げるわ」

「いやいや、待てよ。確かアリサはこの日は夕方から習い事が在るだろうが」

「大丈夫よ。大会の終わる時間は午後四時でしょう。それならその後には急いで向かえば間に合っわ。そう言う訳で私も行くからね。これは決定事項だから、諦めなさい」

「・・・まあ、俺が何を言ってもアリサは止まらないだろうから、別に構わないぜ・・・（それに俺はアリサの護衛だからな。アリサが来れば護れるし、問題はなくなるな）」

ドラコモンはアリサの言葉に納得したように頷き、アリサは笑みを浮かべる。

実を言えば、ドラコモンがアリサを心配しているように、アリサもドラコモンの事が心配だった。

ドラコモンはバニングスが全力で調べても正体が分からなかった不可思議な生物。それ故に殆どバニングス邸から出る時は、車に乗って出るしかない。しかも車から降りる事は出来ずに隠れ続けなければならぬのだ。

一年近くも家族として過ごしたアリサは、ドラコモンが誰かに攫われるかもしれない事が心配だった。だからこそ、一緒に大会に行く事にしたのである。

そして二人は使用人が呼びに来るまで当日の予定を楽しげに決め合い始める。

大会当日に出会う生涯の親友と呼べる者との出会い知らずに、アリサとドラコモンは楽しげに日常を送るのだった。

第十二話 竜と獣の邂逅

海鳴市で開催されているとあるゲーム会場。

その場所の館内では大人や子供、或いはゲームに登場するキャラクターなどの着ぐるみが集まって、展示されているゲームやメインイベントのゲーム大会、そしてとある企業が突然に盛り込んだ試作品のカードゲームなどで遊んでいた。

そしてゲーム会場の二階の窓の傍には、某ロンドンの名探偵が着るような服を着飾って着ぐるみに成り済ましているドラコモンとアリサが、ゲーム会場の隣で行われている盆栽の大会を双眼鏡で眺めていた。

「ん〜、中々の作品達だぜ。だけど、俺が育てた盆栽だって負けてねえぞ」

「・・・私にはサツパリだわ。どれも同じにしか見えないもの」

横で双眼鏡に向こうで並べられている盆栽達の評価を行っているドラコモンに、アリサはお手上げと言うように双眼鏡を目から離れた。

双眼鏡の向こうで並べられている盆栽の違いをドラコモンは理解しているようだが、アリサには全く理解が出来ず、二階の並べられているゲーム機などに目を向ける。

格闘ゲーム、シューミレーションゲーム、その他にも沢山の試作品のゲームが並び、どれかで遊んでいようかとアリサが考えていると横に立っていたドラコモンの尻尾がピンっと立ち上がる。

「ーピンッ!」

「あん？」

「ん？何どうかしたの？」

「……………嫌、何でもねえよ……………気のせいだった」

「？」

何処となく真剣な様子のドラコモンにアリサは疑問が浮かぶが、ドラコモンは答える事無く双眼鏡の向こう側だけを見続ける。

その様子にアリサも何でもなかったのだと思い、近い場所に置かれている格闘ゲームに関するゲーム機の方に歩いていく。ドラコモンはそれを横目で確認すると、双眼鏡で目を隠しながら険しく目を細める。

(……………間違いねえなあ……………俺以外のデジモンが近づいてきていやがる)

ドラコモンはそう内心で険しい声を出しながら、自分以外のデジモンの気配に神経を尖らせる。

相手がどんなデジモンで、どんな目的でこの場所に向かっているのかまでが分からないが、接触は行うべきではないとドラコモンは判断する。

自身一人ならば接触するが、今この場にはアリサ以外にも大勢の人々が居る。万が一戦いにもなっても、人々を傷つけたりしたらアリサだけではなくバニングス家そのものにも被害が及んでしまう。

故にドラコモンは自分以外のデジモンの存在を感知しても、接触は行わないことを決めた。

(まあ、俺以外にもデジモンが居るって分かったただけでも収穫だな・

・それよりも今は盆栽盆栽つと・・・もう少ししたらアリサと会場を歩いてみるか)

そうドラコモンは今後の行動について考えながら、真剣な顔をして格闘ゲームで遊んでいるアリサに近づくのだった。

(・・・間違いない。ここには僕以外のデジモンが居る)

ドラコモンが自身以外のデジモンを感知していた時、件のもう一体のデジモン - ガブモンXもまた、ゲーム会場の入り口の前で、本能から自身以外のデジモン - ドラコモン - がゲーム会場内部にいることを感じていた。

ガブモンXも、まさかこのような場所で自身以外のデジモンが居るとは夢にも思っただけだった。

そしてガブモンXは入場券を買っているのはと美由希、周りの人々の行きかいに目を向ける。

相手がどんなデジモンかまでは判断出来ないが、少なくともこの場で会うのは不味い。万が一危険なデジモンだった場合、戦いに発展してしまう可能性が高い。

戦いになればX抗体を宿している自身ならば簡単には負けないだろうが、周りへの被害を考えれば接触は行わない方がいい。

(僕以外にもデジモンがいることだけ分かっただけでも収穫だし、何よりもなのは今日を楽しみにしていたからね)

そうガブモンXは内心で呟きながら、美由希と楽しげに会話をしているのは目を向ける。

土郎の怪我の件で最近では兄妹揃って何処かに出かけること自体

が少ない。出かけても買い物とかばかり。だからこそ、なのはは今日を楽しみにしていた。隣の盆栽大会の会場に居る恭也とも昼食は一緒に取る予定。

流石に仕事がある桃子は一緒ではないが、それでもなのはは今日と言つ日を楽しみにしていた。

そんな、なのはの想いを踏みにじる訳にはいかないとガブモンXは思い、ゲーム会場に居るドラコモンと接触は行わないと誓いながらなのはと美由希に近づく。

「二人とも、入場券は買った？」

「うん、買ったよ、ガブモン。はい、一応ガブモンはコスプレで来たってことにしたからね」

「コスプレって・・・」

美由希の言葉にガブモンXは一瞬呆然とするが、確かにそれでしか自身は会場には入れないと思い、美由希が差し出して来た入場券を複雑そうに受け取る。

それを隣で聞いていたなのはは何故ガブモンXが複雑そうにしているのか疑問に思うが、すぐに笑みに変わり、ガブモンXの手を握る。

「ーギョー！！」

「ガブモンX君！早く行こう！」

「アッ！な、なのは落ち着いて、割り込んじゃ駄目だからね」

「そっだよ、なのは。まずは列に並んでから入ろうね」

「は〜い！」

ガブモンXと美由希の言葉になのはは頷き、入場口の列に並んでゲーム会場内部に入って行く。

一方その頃。美由希達と別行動でゲーム会場の隣の盆栽大会の会場に来ていた恭也が、自身が育て上げた盆栽を管理員に手渡していると、他の大会で顔馴染みになってしまった男性が声を掛けて来る。

「やあ、恭也君」

「これは鮫島さん。お久しぶりですね」

「そうですね。前の大会以来だから、かれこれ二ヶ月近くになるからね」

恭也と鮫島は会話をしながら、近くに置かれている椅子に腰掛ける。

二人の出会いの理由は言うまでもなく、ドラコモンが鮫島に頼んで大会などに出展している盆栽が縁だった。最初は鮫島も中学生の恭也が盆栽を育てていることには驚いたが、ドラコモンが盆栽を育てていることよりは衝撃が少なかったので今では恭也が盆栽の大会に出ていることは驚かなくなった。

そして何度も大会で会っている内に、いつの間にか茶飲み友達のような関係になっていたのである。

「しかし、鮫島さんが来ていると言う事は、やはりアイツは来れな

いんですね？」

「ええ、色々と事情があつて、病気のこともあるので・・・（恭也君には悪いが、流石に竜だから来れないとは言えないからね）」

鮫島としては恭也に嘘をつくのは心苦しいが、流石にドラコモンの存在を話すわけにはいかない。

バニングス家でもトップシークレットに位置する情報なのだ。幾らドラコモンとは手紙でやり取りを行っている恭也でも話すわけにはいかない。

そんなことを知らない恭也は僅かに顔を俯かせながら鮫島に声を掛ける。

「会えたら改めて礼をいいたかつたんですが」

「礼と言うと、君の盆栽が一時荒れていた件かね？」

「ええ・・・アイツの手紙のおかげで我に返れた部分もあつたんで・・・会えたら礼を言つつもりだつたんです」

「ふむ・・・流石に会わせることは出来ないが、折を見て電話を取れるようにしよう。彼も君と話がしたそうだったからね」

「それは嬉しいですね・・・ありがとうございます」

「いえいえ・・・さて、そろそろ時間ですし、行くでしょう」

「はい」

鮫島の言葉に恭也は頷きながら立ち上がり、二人は数多くの盆栽

が並べられている場所に向かって行く。因みに鮫島の手には大会の一部始終を録画する為のビデオカメラが握られている。

ゲーム会場内部

会場の中に入場した美由希、なのは、ガブモンXは一先ずどんな作品が見て回ろうと会場の中を歩いていった。

シューミーション、RPG、格闘、シューティングなどなどの作品を見ているが、読書の方が好きな美由希と幼いなのはやはりたいたいと思えるゲームがなかった。

「うん・・・色々あるけど、やっぱりこう言うのって場違いな気がするんだよねえ」

「どれもこれも難しそうなの」

「・・・それじゃ、アレなんてどうかなあ？」

「ん？」

ガブモンXが指差した方向になのはと美由希が目を見てみると、試作品カードゲーム会場と書かれている案内板が存在していた。

「カードゲームとかだったら、二人とも出来るし。なのはが漢字とか読めなくても、美由希さんが教えれば大丈夫だからね」

「・・・うん、それがいいかもね。行こう、なのは」

「うん！」

なのはは頷き、ガブモンXと美由希と手を繋ぎながらカードゲームの場所に歩いていく。

その途中で売り子と思われる、バスケットを持った女性が笑顔を浮かべながらなのはに声を掛ける。

「いらつしやいませ！其方の子は何歳でしょうか？」

「四歳ですけど？」

「でしたら、此方のパックをお受け取り下さい。十歳以下のお子さんへのサービスです」

女性はそう言いながら、バスケットの中から何も書かれていない白いパックを取り出し、なのはに手渡す。

なのははその白いパックに首を傾げていると、女性は笑顔を浮かべながら説明を始める。

「そのパックの中には四枚のカードが入っているの。此処の場所で行われている試作品のカードゲームのカードだね。カードゲームを少しでも知って貰おうと、こうしてカードを配っているのよ」

「どんなカードなんですか？」

「それは見てからの楽しみです……あら？」

「ん？」

突然にガブモンXを見て首を傾げた女性に、なのはと美由希は疑問を覚えた。

しかし、女性は答える事無く、いきなりトランシーバーらしき物を取り出すと、何かを確認するようになるのは達には背を向ける。

「・・・はい・・・いません・・・で・・・分かりました」

「あの？ガブモンがどうかしたんですか？」

「えっ？・・・いえ、実はですけど、よく似たキャラクターが書かれているカードがあったので、ちょっと確認したんですが、気のせいだったみたいです」

「ハア・・・そうですか」

要領を得ない答えに美由希は疑問を覚えながら返事をするが、女性はその以上話す事はなく、美由希達の後から来る人の方へと歩いて行く。

美由希は直感的に何かを感じるが、これ以上この場に留まってもしょうがないと思い、なのはと手を繋ぎながら奥へと進んでいく。

「うーん、一体なんだったんだろうね？」

「分からないの」

「・・・僕に似たキャラクターって言っていたけど・・・そう言えば、なのは？渡されたパックを開けてみなよ。どんなカードなのか気になるし」

「うん！」

「ーっブリッ！」

ガブモンXの言葉になのはは頷き、先ほどの女性から渡されたパツクの中を開けてみる。

その中には女性の言うとおり四枚のカードが入っていた。なのははそのカードをパツクの中から取り出し、一枚一枚美由希、ガブモンXと共に眺めていく。

最初の一枚に描かれていたのは背中に六枚の翼を生やし、手に黄金のロッドを握っている仮面を付けた天使。

二枚目に描かれていたのは背中に大きなヤドカリの殻を思わせるような殻を背負った生物。

三枚目は恐竜と機械が融合して左腕が完全に機械化し、背中に翼を生やした生物。

そして最後の四枚目に描かれていたのは、黄色のトカゲを思わせるような姿をした二足歩行の生物だった。

「変わった絵だね？何となくけど不思議な感じを受けるね」

「変な感じなの・・・名前とかは書かれていないけど、何となく不思議な感じを受けるの」

(・・・まさか、このカードに書かれているのは!?)

カードに書かれている生物の姿に、なのはと美由希は首を傾げるが、ガブモンXだけは目を見開いていた。

流石にカードに描かれている生物の名前まではガブモンXは知らない。だが、本能からカードに描かれている生物は自身と同種族のデジモンではないかとガブモンXは直感していた。それならば先ほどの女性の行動にも納得がいく。アレはX抗体ではない自身が描かれたカードを見たこそその行動だったのだ。

(もしかして、この会場から感じるデジモンの気配はこのカードを会場に持ち込んだ所にいるデジモンなんじゃ・・・もしそうだとしたら)

自身の想像にガブモンXは僅かに顔を険しくする。

もし自身の考えが当たっているとしたら、先ほどの連絡で自身の存在が知られたのは間違いない。

何が目的かまでは分からないが、此処に居るのは不味いとガブモンXは思い、カードを眺めているのはと美由希に声を掛けようとする、先のカードゲームが行われている場所の方から、なのはと
同じ年ぐらいの少女の声が聞こえて来る。

「どつ言つことよお!？」

「お、落ち着け!アリサ!！」

「落ち着いていられないでしょう!?!何で、何で!?!アンタの絵が描かれたカードがあるのよ!?!ドラコモン!?!」

『えっ?・・・ドラコモン?』

前の方から聞こえて来た声を耳にしたのはと美由希は、デジモンの名前らしきモノに思わずガブモンXの方に目を向ける。

その視線にガブモンXは顔を思わず逸らしてしまうと、前の方から金髪の少女を抱えたドラコモンが走って来る。

「とにかく!この場所から離れるぞ!?!」

「って!!!アンタ前見なさい!?!」

『えっ！？』

「ーードゴオオオオオオオオオオ！」

アリサの叫びに慌ててドラコモンは前を向き、その場所に立っていたガブモンXと激突してしまった。

その衝撃にガブモンXは倒れ、ドラコモンも背中から倒れるが、アリサだけは傷つけないように抱えて床に激突する。

「ーードオン！」

『ゲフツ！？』

「この馬鹿！？だから、前を見るっていったのよお！？」

「だ、大丈夫！？ガブモン！」

「しっかりして！？ガブモンX君！」

ドラコモンを叱っているアリサの横で、美由希となのははガブモンXの傍に近寄り心配そうに声を掛けた。

その声に激突した衝撃で目を回していたガブモンXは意識を取り戻し、ドラコモンもぶつかった箇所を押さえながらゆっくりと起き上がり、目の前に居る相手に向かって深々と頭を下げる。

「すまねえ！慌ててたもんだから！ほんとうにすまねえ！！！」

「き、気にしなくていいよ・・・僕も考え事していたから・・・アッ！！！」

第十三話 迫る夜と事情説明（前書き）

一日遅れて申し訳ありませんでした。

励ましの言葉を送ってくれた皆さん、本当にありがとうございます。

第十三話 迫る夜と事情説明

ガブモンXとドラコモンが邂逅している頃。

海鳴に居る残り二体のデジモンが住んでいる月村家の地下室では、家の主である忍が十字架のような物が書かれている表紙に描かれている本と機械的な杖が置かれているテーブルの前の床で女性らしさが全く感じられない格好で眠っていた。

二つの物品を手に入れてから連日連夜徹夜で忍は手に入れた二つの物を研究し続けたのだが、機械的な杖はレナモンとインプモンのおかげである程度の研究は進んでいた。だが、もう一つの『本』については全く進まず、忍は研究者としての本能が疼いたのか殆ど毎日調べ続けていた。

月村家のメイドであるノエル、ファリン、そして家族であるすずか、はやて、レナモン、インプモンは体を壊さないか心配しているのだが、それで止まる忍ではないので手の打ちようがなかった。

そんな一般的な男性が見たら女性として幻滅してしまいそうな姿のまま忍が眠っていると、地下と地上を繋ぐ扉が開き、慌てた様子をしたノエルが飛び込んで来る。

「忍お嬢様！起きて下さい！！！」

「フェ〜・・・ムニヤムニヤ・・・もう食べられないわよ、ノエル」

「古典的過ぎる寝言を言っている場合ではありません！！レナモンとインプモンではない、別のデジモンが捕捉出来ました！！しかも、同時に二体もです！！！」

「ッ！！何ですって！？！」

ノエルが告げた事実には忍は一瞬で目覚め、目を見開きながら叫んだ。

それを確認したノエルは、月村重工の関係者から送られてきた二枚の画像写真が保存されている携帯を服の中から取り出し、忍の手に渡す。

携帯を渡された忍は即座に携帯の画像をチェックするために操作し、ガブモンXとドラコモンの画像を確認すると、地下室に備わっているパソコンの中から二体の情報を調べだす。

「間違いなくデジモンね！……片方は確かドラコモン！……もう一体はガブモンかしら？」

パソコンの中に存在する、はやてとすずかのディーアークから調べて記録したデータから忍は片方がドラコモンであることは間違いないと確信したが、もう一体のガブモンXについては首を傾げて疑問の声をあげた。

前回のグレアムの襲撃の時に手に入れたディーアークを調べた結果、ディーアーク内部にはデジモンの情報が大量に記録されていることを忍達は調べ上げていた。

そのデータをはやて、すずか、レナモン、インプモンの協力によってパソコン内部に忍は記録したのである。同時にデジモンの画像データも存在していたので、それを利用して忍はさくらの時のように画像を別の物に移し替え、月村重工の力を使って未完成のデジモンカードを作り上げていた。

最もはやてとすずかが所持しているオリジナルと呼ぶに相応しいカードに比べれば不完全な出来だったのだが、それでも遊べる程度には仕上がったので今日行われているゲームイベントに急に加えて貰ったのである。

全てはそのデジモンカードを目撃して、はやてとすずか以外にデ

ジモンに選ばれている人間を発見することが目的だったのだが、まさか当日にデジモンが、しかも二体も現れるとは完全に想定外の事態だった。

「まさか、こんなに簡単に見つかるなんて・・・まあ、良いわ。ノエル！すぐに車の用意！それとレナモンかインプモンを呼んで頂戴！」

「残念ながら無理です、お嬢様」

「えっ？」

「昨日の夕食時にお伝えしたことをお忘れですか？今日は、はやて様の診察日なのです。ずかお嬢様とファリンが付き添い、そしてインプモンが護衛として一緒に病院に向かっています。それとレナモンは今日は最近通いだした明心館空手巻島流道場に稽古の日です」

「アッ！」

ノエルの説明に忍は昨日の夕食時のことを完全に思い出した。グレアムの襲撃の件から、常にはやてにはレナモンかインプモンが護衛をすることになっていた。

何時グレアムが再度襲撃をかけて来ても可笑しくはない。故に忍は、はやてには護衛をつけるようにしていた。

それと同時に先日の戦いの件で自身の實力不足を理解したレナモンは、海鳴市に存在する明心館空手巻島流道場に入門していた。

人間の姿に唯一変身することが出来るレナモンは、その能力をフルに利用して明心館空手巻島流道場に入門してより自身の實力アップを図っていた。

人間に化けられないインプモンは流石に無理だが、インプモンも

ノエルと毎日訓練を行っていた。

自分達の大切なモノを護る為に努力なのだが、とにかく現在月村家にはデジモンに対抗出来るメンバーが誰一人としていなかった。

ノエルだけでは万が一、戦闘に発展した時に戦力としては不安を隠せなかった。

相手が凶悪なデジモンの可能性も考えられるのだから、せめてレナモンかインプモンどちらかに来て貰いたいと思っただが、ノエルは冷静に状況を伝える。

「レナモンが向かった明心館空手巻島流道場では携帯が使えませんが、ずずかお嬢様達の方に関しても病院では携帯の電源を切っているとされます。その後には図書館に行くとも言っておられましたし……どちらとも連絡が取れません」

「ああもう！せつかくデジモンが見つかったのに！……いいわ。だったら接触せずに、どんな子達と一緒にいるかだけでも確認するわよ」

「了解しました。すぐに車の用意をいたしますので、忍お嬢様も着替えて下さい」

「分かったわ」

ノエルの言葉に忍は頷き、二人はそれぞれ準備を行い、ガブモンXとドラコモンがいるゲーム会場に急ぎ向かうのだった。

ゲーム会場内部の休憩所。

その場所に置かれていたテーブルを挟んで対面するように右側の

方に美由希、なのは、ガブモンXが、左側の方にアリサ、ドラコモンが座っていた。

互いを確認したガブモンXとドラコモンだったが、とにかくあの場にいたら混乱を呼ぶと判断し、一先ずは落ち着いた場所で話し合うことを同意してこの場に訪れていた。

「・・・それじゃ自己紹介から始めようか。私は高町美由希、こっちは妹の」

「高町なのはです」

「僕はガブモンXだよ」

「私はアリサ・バニングスよ。で、こっちが私のボディガード件家の庭師の」

「ドラコモンだぜ」

全員がそれぞれ自身の自己紹介を終えると、アリサはガブモンXへと目を向け、気になっていたことを美由希に質問する。

「質問ですけど、そっちのガブモンXもデジモンですよね？」

「うん、そうだよ。一年ぐらい前に家に現れたタマゴから孵ったんだよ」

「一年ぐらい前・・・」(ドラコモンが家に来た頃と同じぐらいね)

「・・・うん、バニングスさん」

「ん？何かしら、高町さん？」

なのはの質問にアリサは首を傾げながら答えると、なのははジュースを飲んでいるドラコモンを見ながら質問する。

「え〜と、ドラコモンさんも『Xほつたい』を持っているの？」

「へっ？『Xほつたい』？」

「違うよ、なのは。『Xほつたい』じゃなくて『X抗体』だよ」

ガブモンXはそうなのはの言い間違いを訂正し、なのはは自身の間違いに気がついた顔を赤らめた。

その様子を見ていたドラコモンは、なのはが聞きたいことの意味を理解し、首を横に振るいながら答える。

「いんや。俺は其処のガブモンXと違って『X抗体』は保有していないぜ。まあ、気配で普通とは違うとは思っていたが、まさか『X抗体』を保有している奴だったとは思ってなかったけどな」

「どう言うことかしら？ドラコモン・・・今の言い方、まるでガブモンXが居たことを知っていたみたいな言い方なんだけど？」

「ああ、知ってたぜ」

「なっ！？だったら！？何で教えなかったのよお！？」

ドラコモンの答えにアリサはドラコモンに詰め寄りながら叫んだ。いきなり詰め寄って来たアリサに、ドラコモンは僅かにうるたえ

るが、すぐさま冷静に飲んでいたジュースをテーブルの上に置いてアリサに手を向けながら説明しだす。

「お、落ち着けよ、アリサ！何も意地悪とかそう言う理由とかで教えなかった訳じゃねえぞ」

「じゃあ、どう言う理由だったのよお？」

「・・・こうして会えば問題は無かったけどよお。もしガブモンXの奴が危険な性格をしたデジモンだったとしたら如何だよ？もしかしたらいきなり戦闘になっていたかも知れねえんだぞ？」

「ッ！！ガブモンX君はそんなことしないの!？」

「落ち着いて、なのは。ものの例えだからね」

「そうだよ。だから、落ちついてね」

テーブルに両手をついて怒鳴ったなのはを落ち着かせようと、美由希とガブモンXはそれぞれ声を出してなのはを落ち着かせようとす。

その声になのはは落ち着きを取り戻し、ゆっくりと椅子に座り直し、ドラコモンは言い方が少し悪かったと反省しながら話を再開する。

「まあ、相手がどんなデジモンなのか分からない状況で、こんな人が多い場所で会うのは不味いと思ったから接触しなかったんだよ。そっちもそうだろう？」

「うん。僕も同じ考えで君とは会う気はなかったんだけど・・・」

まさか、あんな形で会うとは思ってなかったけどね」

「ああ、それは俺も同感だ・・・これを見て冷静でいられなかったからなあ」

ドラコモンはそう言いながら、着ていたコートの中のポケットの中からは同様にアリサが女性から渡されたパックの中に入っていた四枚のカードをテーブルの上に置いた。

美由希、なのは、ガブモンXはテーブルの上に置かれたカードの絵柄を見ると、一枚目には海蛇を思わせるような長い体をしている生物が、二枚目には赤い体を持ったティラノサウルスを思わせるような生物が、三枚目には女性の容姿をして背中にも天使のような翼を生やした絵が書かれ、最後の一枚にはドラコモン、ソックリの絵が描かれていたのだった。

最後のカードに描かれているドラコモンの姿に、美由希達は思わずカードとドラコモンを見比べてしまうと、アリサは当然だと言うように頷きながら声を出す。

「私達もそれを見たから驚いたのよ。どうみてもそのカードに描かれているのは・・・」

「ドラコモンにしか見えないよね・・・（これって、もしかしてガブモンXやドラコモンだけじゃなくて他にもデジモンが居るって意味なのかな？・・・だとしたら、その人達はデジモンを探す為にカードの形にしてデジモンの情報をばら撒いている？）」

美由希はそうアリサからの情報から状況を推察し、僅かに眉を顰めながらテーブルの上に置かれている四枚のカードを眺める。

少なくともドラコモンとアリサと出会ったおかげで、デジモンが他にも居たことを知ることが出来た。

そして同時にドラコモンとガブモンX以外にもデジモンが存在していることが、カードの件から明らかになった。どんな目的なのかは分からないが、少なくとも既に自分達の情報はカードを作り上げた人物達に送られてしまっていると、美由希は先ほどのカードが入っていたパックを渡してくれた女性の様子から間違いないと思う。

(不味いかもしれない。小太刀は持って来ていないし、今あるのは鋼糸ぐらいだし・・・戦闘になったら不味い。しかもこのゲームイベントに入り込めるほどの企業が関わっているんだとしたら、もしかしたら私達の手におえなくなるかもしれない)

美由希はそう内心で険しい声を出しながら、カードを販売している者の裏にいる企業に険しい声を出さざるえなかった。

今日来たイベントは大きいものだと言う事を美由希は知っている。そのイベントにデジモンの存在を示すカードを盛り込んだ事を考えれば、少なくともその企業の上位に位置する人物が関わっていることは間違いない。

そんな相手にアリサとドラコモンはともかく、美由希、なのは、ガブモンXは対抗する手段がなかった。父である士郎ならばもしかしたら対抗する手段を考えてくれるかもしれないが、残念ながら士郎は漸く峠を越えた状態なので、未だ目覚める兆しはない。

どうしたらいいのかと美由希が頭を悩ませていると、ドラコモンが小声でアリサと相談をする。

「おい、アリサ。一先ずこいつ等も連れて家に戻らねえか？」

「どう言うことよ？」

「いいか、もしこのカードをばら撒いた連中のところにもデジモンがいたとしたらだ。そいつと戦闘になるかも知れねえ。人間相手な

「俺は簡単には負ける気はねえけど。デジモンが相手だった場合は、周りなんざ気にしてらねえんだよ。だから」

「ガブモンXも一緒に連れて一先ず家に帰れば、そう簡単には追って来れないわね。もし襲い掛かって来ても、二体が相手なら相手のデジモンも倒せるって訳なの？」

「おう、その通りだ・・・（それに俺としたらガブモンXとは出来れば戦いたくねえんだよなあ）」

ドラコモンはそう内心で呟きながら、なのはと共にジューズを飲んでるガブモンXに目を向けた。

大抵の成長期デジモンならばアリサのボディガードで実戦経験も積んでいる自身が簡単には負けないとドラコモンは思っているが、ガブモンXと戦うことになったら死力を尽くさないといけないかもしれないと本能から分かっていた。

『X抗体』を保有しているデジモンと保有していないデジモンでは、同世代ならばかなりの自力の差が出るのだ。もちろん訓練などでその差は埋められるのだが、ドラコモンの見立てではガブモンXもまた自身の鍛錬を絶やしている様子が見えない。

（戦ってアリサに被害が及ぶのは不味いからなあ・・・それにそろそろアリサにも友達が出来ていい年頃だ）

そうドラコモンは内心で呟きながら、今度はなのはの方に意味深な視線を向ける。

バニングス家と言う大企業の子供の娘として生まれたアリサは、純粹に何かを言い合えるような友達がいらない。更に日本では珍しい地毛の金髪の髪が目立つ上に近寄って来る者は、大抵はバニングスに取り入ろうとする者ばかり。

その上、自身が狙われていることもあってアリサは人付き合いが苦手になり始めていた。そのことはアリサの父親と母親も知ってドラコモンと共に悩んでいたのだが、フツとしたことで出会ったガブモンXと共にいるのはならばアリサをバニングス家とかの枠組みで見るとはドラコモンには思えない。

先ほどのドラコモンのガブモンXを危険視するような発言の時も、なのはは真剣にガブモンXの為に怒っていた。そんな優しい心を持ったなのはならば、アリサと心の底から何かを言い合える親友になれるかもしれないとドラコモンは考えていた。

そんなことをドラコモンが考えているとは思っていないアリサは、自身に話してくれたドラコモンの表の理由を吟味して頷くと、美由希に声を掛ける。

「え〜と、美由希さんって呼んでいいですか？」

「アツ！・・・そうだね。高町さんだとなのはとどっちだか分からないから構わないけど、何かな？」

「あの・・・家に来ませんか？家なら外から簡単には襲えませんが、それにデジモンのことを話したいんで」

「家？」

「はい・・・ちょっとセキュリティとかがって言うのが、備わっているのよ」

「ん〜」

アリサの提案に美由希は悩むような声を出して腕を組んだ。

ちょっとしたセキュリティ程度で何とかなる相手ではないことは間

違いないと美由希は思っている。

実際のところはちよつとどころか、それなりの実力者でも簡単に入れないほどのセキュリティテイのだが、そんな事を知らない美由希は断ろうとアリサに伝えようとするが、その前にガブモンXが美由希に小声で話しかける。

「美由希さん。ここは応じた方がいいかもしれませんよ。僕やドラコモンが現れた理由は話したいですし」

「でも、ガブモン。相手がデジモンを連れて来たらあの子達の家に迷惑が掛かるかもしれないんだよ？」

「それは確かにそうですけど、ドラコモンと僕と一緒にいれば戦う前に相手のデジモンを無力化出来るかもしれないじゃないですか・・・それに少なくとも僕らの情報が伝わっているとしたら、同時に二体のデジモンがいる場所を襲うと思います？」

「アッ！そう言えばそうだね」

ガブモンXの説明に美由希は確かに一理あると思つて頷いた。

カードを作り上げた方にもデジモンがいると仮定すれば、つまり相手側もデジモンの強さを知っているということに他ならない。

そして二体のデジモンが一緒に行動していると分かれば、デジモンの力を知っている者ならば余程の自身がある実力者でなければ襲つて来ないだろう。或いはデジモンのことを何も知らない者ならば襲うだろうが、その時は返り討ちにすることが出来る。

それならばアリサの提案を受けてもいいと思つた美由希は、仲間外れにされていると思つて膨れているのはに声を掛ける。

「ねえ、なのは。ちよつとバニングスさんの家に行こうか。デジモ

んの話もしたいし、いいかなあ？」

「プ〜ウ〜・・・良いよ」

「ありがとう、なのは」

膨れながらも了承の言葉を出してくれたなのはに、美由希は感謝の言葉を告げながらなのはの頭を優しく撫でる。

その感触になのはの目は気持ちよさそうに緩まり、一先ず話は纏まったと思ったドラコモンが全員に声を掛ける。

「よっしゃ！それじゃ俺達の家に行こうぜ！・・・アツ！でも、大会が・・・」

「諦めなさいよ。鮫島がいないと車の運転が出来ないんだし、棄権するしかないでしょう？」

「トホホ・・・今回は絶対に優勝を狙っていたのによお」

「ん？・・・ドラコモン。君はこのゲーム会場で行われてる大会に出るつもりだったの？」

「違うのよ・・・ドラコモンが参加していた大会って言うのは・・・隣の会場で行われている“盆栽”の大会の方なのよ」

『ハツ？・・・盆栽？』

アリサが告げた言葉に美由希、なのは、ガブモンXは自分達の家族の趣味を思い出しながら、大会を棄権することになって落ち込んでいるドラコモンを見つめるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3171q/>

電子の獣と少女達

2011年9月17日17時00分発行